

第1章王安石五言絶句訳注

はじめに

わたしたちが王安石(1021-1086)の絶句を読み始めたのは、2003年のことであった。王安石を選んだ理由も、なぜ絶句にしたのかも、今となっては思い出せない。絶句は四句からなる、もっとも短い詩型である。とりわけ五言絶句はわずかに二十字のみ。わたしたちはそれを「盆詩」と呼んだ。盆詩の盆は、盆栽・盆景の盆。だから盆詩ということばには、まず何よりも「小さな詩」という意味を込めている。

思いつきにも似た経緯から「盆詩」と呼んだのであったが、読み進めていくうちに、そこには、ことばによってかたちづくられた小さいながらも豊かな世界が開かれていることに気づくこととなった。それはちょうど盆栽が小さな鉢のなかに無涯の世界を構成しているように。

同時にまた、わたしたちの生きる現実のなかに、ひとつの小宇宙としての盆栽を置いてそれに臨む一瞬、ふたつの世界を跨ぐ越境と、それにとまなう目眩のような感じが生じるのと同じように、王安石の絶句を読み進めるときにわたしたちが味わうことになったのも、得も言われぬ不思議な感覚であった。翻弄、詐術、倒錯、畸形などことばはいくつも思い浮かぶのだけれども、これはやはり五言絶句という最小の詩型がもたらす要素が大きい。最小にして無限という逆説が独特の読書体験をもたらす。「盆詩」ということばは、あるいは王安石絶句の世界の特質を、うまく掬い上げているのではないか。

とりあえず詩を、詩人を取り巻く現実世界の反映であるとするならば、その詩から翻って喚起される言語外の現実よりも、詩のことばそのものが前景化する点に、王安石絶句の特徴の一つがあるように思われる。例を挙げよう。

「臥聞」(臥して聞く)

臥聞黄栗留	臥して黄栗留を聞き
起見白符鳩	起ちて白符鳩を見る
坐引魚兒戯	坐して魚兒を引きて戯むれ
行將鹿女游	行きて鹿女と將に遊ぶ

——身を横たえて黄栗留の啼く音を聞き、身を起こして白符鳩のすがたを見る。腰をおろし魚を誘って戯れ、出かけては鹿といっしょに遊ぶ。

初句、第二句の黄栗留・白符鳩は鳥の名。いずれも色彩語（「黄」「白」）をともない、また第三・四句の「魚」と「鹿」も、接尾辞（「兒」「女」）をともなって詠み込まれる。主人公の動作として書き込まれるものも、「聞」と「見」（前半）、「引—戯」と「將—游」（後半）というように対をなす。すなわち前半・後半ともにいわゆる対句を形づくる。

これにとどまれば特段に珍しいわけではないのだが、この作品では、さらに日常の行為を分節し焦点化する語、「臥」「起」「坐」「行」が各句の冒頭に配置され、一首全体を通じて一貫した系列を構成する。

「行坐」と熟すればそれは拳止ふるまいを言う語であるように、ここで詠われているのは、日々繰り返される主人公の生活であろう。とはいえ、ここには人の姿は見えない。静かで穏やかな主人公の行動と小さな動物との交流のみが詠われる。

さきに詩をテキスト外の現実の反映であるかのように述べたが、それは必ずしも正確とは言えまい。詩はまた現実と切り離された、もう一つの世界を形づくるものでもあるだろう。王安石詩にしばしば顕著な意識的な言語操作の痕跡を見て思うのは、現実への回帰・還元をある意味では拒む、ことばの皮相における戯れへの志向である。

現実への回帰を拒むと言えれば言い過ぎかもしれない。しかし、王安石絶句の世界を読み進めるとき、現実の生活とは別に詩のことばによって構築された、小体ではあるが静謐な王国、そこに遊び戯れる小君主の稚気を帯びた喜悦が時として読み取られるのである。

この、ある意味で「閉じられた」一篇の世界が、過去の文献・語彙などの参照を踏まえて作られていること、すなわち閉じられているようで実は開かれていることも、わたしたちはすぐさま付け加えなければなるまい。

たとえば上の詩の「黄栗留」は、呉の陸璣『毛詩草木鳥獸虫魚疏』に引かれる俚語にみえ（歐陽脩詩等に用例あり）、「白符鳩」は『晋書』樂志の挙げる舞の名にあり（劉禹錫詩等に用例あり）、また「鹿女」は『大唐西域記』などに引かれる仏教系の説話に由来する語彙である（王維詩等に用例あり）。王安石絶句の世界は、無数のテキストの網の目のなかで成立している。博学を以て知られた王安石の詩である。わたしたちの力を顧みれば、用例検索の手だてが急速に豊かになった現在でなければ、その世界への接近は、むつかしかったであろう——検索の手だての備わった現在でも、誤解・誤読は少なくあるまいが。

王安石絶句の世界は、先にも触れたように、時には表現・修辞に淫するあまりの、いささかいびつな側面を見せないこともないが、一方では風通しのよい、明るく開放的な世界でもある。王安石がことばの可能性を追求して作り上げたその世界の探索、王安石がたどった径路、たどりついた極点を確認する作業は、とても楽しいものであった。道に迷うことは数限りなくあったが、「なんていい詩なんだろう」という嘆声わたしたちの間に漏れたことも幾度となくあった。詩を読む喜び。およそ一千年前を生きた異国の詩人の詩に感嘆できる奇跡。それを以下に載せるわたしたちの訳注稿が十分に伝えられているかどうかは心許ないが、まずはいまの私たちの力を尽くして、王安石絶句の世界を紹介したいと思う。

王安石集の諸本につき、その大概を示せば以下の通り。

(I) 臨川先生文集一百卷

卷 1-13 古詩、14-34 律詩、35 挽辞、36-37 集句・歌曲、卷 38 以下四言詩ならびに文。前詩後文という構成をとる。詩は詩型ごとに整理されていて、五言絶句は卷 26 に収める。

この系統には、(1) 紹興十年 (1140) 詹大和刊本と、(2) 紹興二十一年 (1151) 王珣刊本がある（王珣は王安石の曾孫）。(1) については、これに基づくと称する明・嘉靖三十九年 (1560) 何遷刊本が四部叢刊に影印されており、また排印本（『臨川先生文集』中華書局上海編輯所 1959）がある。(2) は、北京図書館、台湾国立中央図書館に蔵される（『鉄琴銅劍楼宋本書影』、『国立中央図書館宋本図録』）。(1)(2) 両者は詩に数首の出入あるも、卷第等は等しいという（『鉄琴銅劍楼蔵書目録』卷 20、『鉄琴銅劍楼宋本書影』附丁祖蔭識語）。

(II) 王文公文集一百卷

卷 1-37 は文、卷 37-51 古詩、卷 52-77 律詩、卷 78 挽辭、卷 79 集句、卷 80 集句歌曲、卷 81-100 は祭文・墓志等の文。すなわち文詩文という構成。詩は古詩と律詩（今体）に分かれ、さらに内容によっておおまかに分類されているが、五言と七言、絶句と律詩は区別しない。序跋・刊記無く詳細は不明ながら南宋初の刊と思われる。中華書局上海編輯所 1962 年影印本がある。傅增湘氏が劉啓瑞氏の食旧德齋旧蔵本を写真撮影したものをもとに、欠卷は宮内庁蔵本（前七十卷を存す）によって補ってある。(I) の (2) の王珣序に「比年臨川の龍舒にて刊行せるは、尚お旧本に循う」とあるのがこの本であろうという（趙万里氏）。またこれによった排印本（『王文公文集』上海人民出版社 1974）がある。

(III) 王荊文公詩五十卷

南宋の李壁 (1159-1222) が王安石の詩に注解を施したもの。宋人の詩に対する宋人の注として貴重である。詩型による分類で、五言絶句は卷 40 に収める。配列は (I) 卷 26 に同じ。(I) にない詩を収める。以下のような諸本がある。

(1) 元・大徳五年 (1301) 王常刊本。劉辰翁の評点を附し、李注を削り、劉の門人王常が刊行。北京図書館（『北京図書館古籍珍本叢刊』87）、宮内庁書陵部蔵。なお張元濟氏による影印本があり、「拋元本重印」と称するが、実はこの本によった明初重刻本の影印であるという。

(2) 清・乾隆六年 (1741) 張宗松刊本。(1) より劉辰翁評点を削る。四庫全書本、天保七年 (1836) 官版はこれによる。また排印本（『王荊文公詩箋注』中華書局上海編輯所 1958）がある。

(3) 蓬左文庫蔵朝鮮活字本。他本に比して多くの李注を存するほか、補注、庚寅増注、劉辰翁評点等を取める。影印本（『王荊文公詩李壁注』上海古籍出版社 1993）がある。またこれによって校点整理した李之亮『王荊公詩注補箋』（巴蜀書社 2002）がある。

ほかに清・沈欽韓の『王荊公詩集李壁注勘誤補正』四巻があり、時に参照した（以上参照：清水茂『王安石』、趙万里「宋龍舒本王文公文集題記」、国家出版局版本図書館『古籍目録 1949 年 10 月至 1976 年 10 月』、四川大学古籍整理研究所『現存宋人別集版本目録』、王水照「王荊文公詩李壁注前言」、笈文生・野

村鮎子『四庫提要北宋五十家研究』)。

わたしたちの訳注は、(III)のうち、(3)の朝鮮活字本の影印を底本とした(『李壁注』と略称する)。詩題の前の「王安石-1」等は、『李壁注』の掲載順に基づく作品番号である。訳注のなかで王安石の他の詩に言及するときも、この本によって所在を示した。また(I)については四部叢刊本、(II)については中華書局影印本によって文字の異同を確認した。

(和田英信)

王安石-1 「聊行」

「聊行」

聊行弄芳草

獨坐隱團蒲

問客茅簷日

君家有此無

いさぎ ゆ ほうそう ろう
聊 か行きて芳草を弄し
ひと ぎ だんぼ よ
獨り坐して團蒲に隠る
きやく と ぼうえん ひ
客 に問う茅簷の日
きみ いえ こ あ な
君が家 此れ有りや無しや

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 75

【校異】

題、『王文公文集』では「絶句」九首其二に作る。

【押韻】

「蒲」：上平声 11 「模」、「無」：上平声 10 「虞」（同用）

【訳】

ちょっと出歩いては草を手でゆらし、
ひとり腰をおろしては、座蒲団によりかかる。
いなか家の軒端の日なたのここちよさ、
あなたのお宅に、このよきものございますか。

【注】

- 行・坐：行くことと座ること。生活のおりふし・ふるまいを二語で代表させる。もと仏教語。四語にのばせば「行住坐臥（いく・とまる・すわる・ねる）」。唐・王維「終南別業」（『全唐詩』巻 126）に「行きて到る水の窮まる処、坐して見る雲の起こる時」。
- 弄芳草：草をめぐる、手でもてあそぶ、手入れする。王安石「園を窺う（窺園）」（『李壁注』巻 41）に「策に杖り園を窺いて日に数しば巡り、花を攀り草を弄して興 常に新たなり」。
- 隠：よりかかる。『莊子』齊物論に「南郭子綦 几に隠りて坐し、天を仰いで嘘す。嗒焉（ぼんやり）として其の耦を喪るるに似たり」とある。そこに

示されているのは、分別を超え、我を忘れた境地。また「隠」は、隠れる、隠棲する。碁を打つことを、坐ったままの隠棲としゃれて「坐隠」ということもある。劉宋・劉義慶『世説新語』巧芸に「王中郎（王坦之）は囲棋を以て是れ坐隠なりとし、支公（支遁）は囲棋を以て手談と為す」と。

- 団蒲：僧が座禅をするときに尻に敷く、ガマの繊維を詰めた丸い敷物。蒲団に同じ。北宋・蘇軾「臘日 孤山に遊び恵勤・恵思の二僧を訪う（臘日遊孤山訪恵勤恵思二僧）」（『合注』巻 7）に「紙窓 竹屋 深くして自ずから暖く、褐を擁し坐して睡り団蒲に依る」。
- 茅簷日：茅葺き屋根の軒端にさしかかる日差し。ここではその日の光を浴びる、すなわちひなたぼっこ曝背の快感をいう。『列子』楊朱にみえる故事を踏まえる。補説参照。

【補説】

「聊か行きて芳草を弄し、独り坐して団蒲に隠る」の「行」と「坐」は、注に引いた王維詩の「行きて到る水の窮まる処、坐して看る雲の起る時」もそうであるように、日常のおりふしを二語に焦点化しつつ代表させることばで、詩中においてしばしば対にして用いられる。王維詩の場合には、自然の美しさ雄大さを詠って、ある種コスモロジカルな広がりを感じさせるが、王安石の詩の方はそれとは逆に外への動きを抑制し、小さな身近な世界をいつくしむ。

第二句「団蒲」は、仏教が士大夫層に浸透して以来しばしば詩の中に詠み込まれる。「隠」を「かくる」、すなわち「団蒲」に象徴されるこの空間に隠棲するという、精神的な意味合いを読みとることも可能かも知れない。いまとりあえず第一句の「弄」と対をなす、具体的な身体動作をいうものとして「よる」と読んでおく。

後半二句にうたわれるのは、『列子』の表現に由来する、日光のぬくもりのここちよさ。むかし宋の国の農夫が、冬はボロを着て何とか冬をのりきり、春になると身体いっぱい日光を浴びながら畑を耕し、妻に「このお日様の心地よさは誰も知るまい。ひとつお殿様に献じてご褒美をもらおうか」と言ったという逸話。王安石お気に入りのモチーフのようで、もっぱらこれを主題とする「朝日一曝背」と題された作品もある（『李壁注』巻 11）。『列子』では嘲笑

の対象として取り上げられる貧しい農夫の快感ではあるが、本作では、「茅簷」(粗末な茅葺き屋根の軒端)という語の使用にもうかがわれるように、原意をふまえたうえで、ささやかな自足の喜びとして詠出されている。

囲い込まれた空間における自足への志向は、「客」「君家」というメッセージ対象の仮設、すなわち自己と他者という境界の設定によって、より明瞭な輪郭が与えられる。それと同時に、問いかける主人、語りかけられる客というささやかなキャラクターの導入は、軽やかな滑稽感を作品にもたらしめているように思われる。

江寧(現在の南京)隠棲後、すなわち熙寧九年(1076)以降の作であろう。

(和田英信)

王安石-2 「染雲」

「くもをそ染む」

染雲爲柳葉

剪水作梨花

不是春風巧

何縁有歳華

くもをそ染めてりゅうよう柳葉と為し
みずをきりてりかな梨花と作す
こ是れしゅんぷう春風のたく巧みにあらざれば
なに何によ縁りてさいかあか歳華有らん

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻75

【校異】

題、『王文公文集』では「絶句」九首其六に作る。

【押韻】

「花」「華」：下平声9「麻」

【訳】

雲を染め上げて、さみどり柔らかな柳の葉。

水を裁ち切って、白くかがやく梨の花。

春風のみごとな手わざがなかったら、

かくも美しい季節に出会えただろうか。

【注】

- 染雲・剪水二句：柳の葉、梨の花といった春の景物を、いずれも春風の「染める」「剪る」といった手しごとによって作りなされたものと見立てる。春風を「剪刀」にたとえ、柳の葉や春の花について「裁つ」「剪る」という表現、また花について「染める」という表現は、下に引くようにしばしばみえるが、「雲を染める」という表現は、他に見出しがたい。唐・賀知章「詠柳」（『全唐詩』巻 112）に「知らず細葉 誰か裁ち出だせし、二月の春風 剪刀に似たり」。唐・馮延巳「歸國謠」（『全唐詩』巻 898）に「春艷艷、江上の晩山 三四点、柳糸剪るが如く花染むるが如し」。また唐・陸暢「驚雪」（『全唐詩』巻 478）の「天人^な寧^かんぞ許くも巧みなる、水を剪り花と作して飛ばす」は、雪について、水を剪って花のごとく飛び散らすと詠う。本詩の「梨花」と、その白の色彩において、あるいはそれを「天人の巧」という発想において通じ合う。「剪水」の語は、唐・李賀「唐兒歌」（『全唐詩』巻 390）に「骨重く神は寒し天廟の器、一双の瞳人 秋水を剪る」、唐・白居易「箏」（『全唐詩』巻 454）に「双眸 秋水を剪り、十指 春葱を剥く」と、いずれも光を湛えて澄んだ瞳に用いられているが、本詩では、梨の花の潤いを帯びた白さをいう。
- 歳華：時のうつろいのなかで盛衰する草木。ここでは春の景物の美しさ。

【補説】

全体としては春風を擬人化して春の景物、あるいは季節の推移を詠う作。とくに後半二句の説理は、季節の推移とその美しさを造化の功によるものとみなす、いささか常套的な発想・措辞の系譜を襲う。ただ、それ故に安定した骨組みのうえに、季節の推移の一点を繊細にとらえた所がこの詩の魅力であろう。「雲」「水」といった軽快な流動感。それを「染める」「剪る」といった意外性。そしてその主はといえば「春風」という後半二句の種明かし。さみどりと白のパステルの対比も春にふさわしい。こうしたリズムと完結性は、絶句という短詩型に求められるモデルのひとつと言えるかも知れない。本詩は南宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集巻 35 に「一唱三歎」に値する作例として引かれ、王安石の絶句のなかでも高く評価されるものの一つとなっている。詩では「雲を染め

て柳葉と為し、水を剪りて梨花と作し」たのは「春風」と詠われているが、じつはそうした春を描き出した——創りだしたのは、王安石自身の詩筆に他ならない。

(和田英信)

王安石-3 「溝港」

「こうこう溝港」

溝港重重柳

山坡處處梅

小輿穿麥過

狹徑礙桑回

こうこう ちょうちょう やなぎ
溝港 重重たる柳
さんば しよしよ うめ
山坡 処処の梅
しょうよ むぎ うが す
小輿 麦を穿ちて過ぎ
きょうけい くわ さまた まわ
狹徑 桑に礙げられて回る

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 75

【校異】

題、『王文公文集』では「絶句」九首其七に作る。

【押韻】

「梅」「回」：上平声 15「灰」

【訳】

水路のほとりに、幾重にも重なる続いてゆく柳、

山の斜面には、いたるところに咲く梅。

小さな輿こしは麦の間をぬってゆき、

狭い小徑こみちでは、桑にさえぎられて迂回する。

【注】

- 溝港：小川やみぞ、堀などを指す。
- 重重：遠くまで幾重にも重なり続けている様子。唐・張説「趙侍御と同一に歸舟を望む（同趙侍御望歸舟）」（『全唐詩』巻 89）に「山庭は迴迴として長川に面し、江樹は重重として遠煙に極む」とある。

- 山坡：山中の傾斜面。
- 処処：いたるところに。あちらにもこちらにも。唐・孟浩然「春暁」（『全唐詩』巻 160）に「春眠暁を覚えず、処処に啼鳥を聞く」とある。
- 穿麦：麦の間を分け入って進むこと。唐・杜甫「曲江二首」其二（『全唐詩』巻 225）「花を穿つ蚊蝶は深深として見われ、水に点ずる蜻蜓は款款として飛ぶ」では、蝶が花の間をぬって飛ぶことを「花を穿つ」と表現する。
- 礙：さえぎり邪魔をする、行く手をさまたげること。唐・方干「再び路支使南亭に題す（再題路支使南亭）」（『全唐詩』巻 651）に「行く処 松を避け 兼ねて石に礙げらるれば、即ち門徑 落斜 開くを須つ」とある。

【補説】

李壁は注に、唐・李白「妓を携えて梁王の棲霞山の孟氏桃園中に登る（攜妓登梁王棲霞山孟氏桃園中）」（『全唐詩』巻 179）の句「碧草已に地に満ち、柳は梅と春を争う」をひき、唐人が「梅」と「柳」の対を好んだことを指摘する。「柳」「梅」「麦」「桑」と、同一カテゴリーの語を一句に一字ずつ置いていく特徴は、王安石の他の詩にもしばしば見られる。王安石-19「移松皆死」補説参照。

前半二句では視覚により捉えられた空間が表現される。「重重」「処処」とそれぞれの句に疊語が並ぶ。「重重」は、唐・杜甫「涪江に舟を泛べて韋班の帰京するを送る（涪江泛舟送韋班歸京）」（『全唐詩』巻 227）の「花は遠し 重重たる樹、雲は軽し 処処の山」にみられるよう、奥行きのある広さを表し、視線は先へ先へと伸びてゆく。他方「処処」は散りばめられるよう、あたり一面に広がる様子を表す。

一方後半二句では、身体感覚により捉えられた空間が表現される。前半二句が開かれた視界を描くのとは対照的に、後半二句では「小」「狭」が使われ、内へと集約する印象を受ける。さらに三四句はそれぞれ、麦畑をまっすぐに進む「穿ちて過ぐ」と、桑の木にぶつかって「礎ぎられて回る」の伸と屈が対比されている。また、この三四句の動きは、何れも主体的な意志に基づくものではなく、偶然に否応なく導かれてのものだと言えるだろう。麦畑に分け入り桑に邪魔をされながら道をゆけば、時に思いもかけず開かれた視界に出会う。主人公は自然の織りなす偶然に翻弄されることを心地よく受け入れ、楽しんでいるか

のようだ。言葉ひとつひとつの配置や句の構成に綿密で厳格なつくり方をしながらも、詠いあげているものはこのようなのどかな田舎の情景であることに、面白さを感じる。

(大戸温子)

王安石-4 「霹靂溝」

へきれきこう
「霹靂溝」

霹靂溝西路

柴荊四五家

憶曾騎款段

隨意入桃花

へきれき こうせい みち
霹靂 溝西の路

さいけい し ご いえ
柴荊 四五の家

おも かつ かんだん の
憶う 曾て 款段に 騎り

ずい い とうか い
随意に 桃花に 入りしを

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 71

【押韻】

「家」「花」：下平声 9「麻」

【訳】

霹靂溝の西の道すがら、

粗末な家がまばらに見える、このあたり。

以前、ぽくりぽくりと馬に揺られてここに来て、

気の向くまま満開の桃園に入っていったっけ。

【注】

- 霹靂溝：江寧府（現在の南京）付近の水路の名。霹靂は激しく鳴る雷、落雷。また、擬音語で、大きな音を表す。あるいは「雷のような音を立てながら流れる水」から命名されたものかもしれない。南宋・周応合『景定建康志』巻 19に「霹靂溝は城東五里に在り。王半山に詩有りて云う、霹靂 溝西の路、柴荊 四五の家」とある。
- 款段：馬の歩みのゆったりしたさま。『後漢書』馬援伝の「款段の馬を御す」

の李賢の注に「款は猶お緩のごときなり、形段遅緩なるを言うなり」とある。転じて、馬のこと。唐・李白「江夏 韋南陵氷に贈る（江夏贈韋南陵氷）」（『全唐詩』巻 170）「昔は天子大宛の馬に騎り、今は款段に乗る諸侯の門」。

- 柴荊：柴やいばらで作った粗末な門。また、粗末な作りの家のこと。唐・熊孺登「至日李常侍の郊居を過らるるを 荷 す（至日荷李常侍過郊居）」（『全唐詩』巻 476）「賤子 柴荊を守り、誰が人か姓名を記さん」。

【補説】

詩題にある「霹靂溝」は、『景定建康志』によれば江寧府東郊（鍾山の麓）にあった。李壁の引く『建康統志』では、「蔣山宝公塔の西北に宋興寺の基有り。基の左に桃花塢有りて桃花甚だ盛んなり。今復た存せず」とあり、蔣山（鍾山）に桃園があったとする。現在でも、南京市にある中山陵园风景区（かつての鍾山一帯）に「霹靂溝」という名の小溪谷があり、市民の憩いの場になっているという。

「桃の花」は『詩経』周南「桃夭」以来数多く詠まれており、「桃花を尋ねる」と言えばまず思い浮かぶのが劉宋・陶淵明の「桃花源記」（『靖節先生集』巻 6）であろう。しかし、劉辰翁はこの詩を評して「妙、此れ其の崔護を暗に用いて変化冷然たり」と言う（「冷然」は軽妙の意）。崔護の故事とは唐・孟棻『本事詩』情感にみえる、唐の詩人崔護と、桃の花のように艶やかな女性との恋物語である。崔護は女性の姿を桃の花に託し、「去年の今日此の門の中、人面桃花相映じて紅なり。人面は祇今何れの処にか去る、桃花は旧に依りて春風に笑う」の詩を作ったとされる。女性は崔護を慕って仮死状態に陥ってしまうが、崔護が泣きながら「わたしはここにいるよ」と呼ぶと息を吹き返した。馬に乗って随意に桃花に入るという言葉から、劉辰翁は女性との逢瀬を暗示すると考えたのであろう。「款段」は馬に乗ることをいうが、王安石の詞「漁家傲二首」其 一（『臨川先生文集』巻 37）に「款段に騎り、雲を穿ち鳥に入りて遊伴を尋ぬ」とあり、ここでは「款段」は驢馬を指すようである。王安石-14「浣亭」補説参照。桃の花のもつ艶っぽさが、ともすれば生々しさを伴うのを、「老人と驢馬」の構図は程よく緩和しているようである。

制作年は未詳であるが、霹靂溝という地名から熙寧九年（1076）、王安石隠棲

後以降の作であろう。

(三瓶はるみ)

王安石-5 「午睡」

ごすい
「午睡」

簷日陰陰轉

牀風細細吹

儻然殘午夢

何許一黃鸝

えんじつ いんいん てん
簷日 陰陰として 轉じ

しょうふうさいさい ふ
牀風 細細として 吹く

しゆくぜんご むざん
儻然 午夢 殘す

いずこ いちこうり
何許にかある 一黃鸝

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』卷 76

【押韻】

「吹」「鸝」：上平声 5「支」

【訳】

軒先の太陽は陰を作りながら移り、

臥所の風はかすかに吹き抜ける。

真昼の夢の名残の中ではととする。

ウグイスはどこにいるのやら。

【注】

- 簷日：軒先に掛かる太陽。梁・簡文帝「内人昼眠るを詠ず（詠内人晝眠）」（『玉台新詠』卷 7）に「北窓に聊か枕に就き、南簷に日は未だ斜めならず」とあるように、横になったまま軒先の日を眺めやるのは昼寝の一つの風情と考えられていた。王安石-1「聊行」に「客に問う茅簷の日、君が家 此れ有りや無しや」とみえる。
- 陰陰：陰って暗い様子。唐・王維「燕子龕禪師」（『全唐詩』卷 125）に「山木日は陰陰、結跏して旧林に帰す」とあり、明るい日差しがあるがゆえに却って陰が濃く落ちる様子をいう。

- 儻然：時間の経過などにはっとして驚くこと。後世の用例だが、南宋・李綱「旧夢を紀す（紀舊夢）」（『梁溪集』巻 6）に「小舟は遊罷めて帰路を尋ぬ、恰かも似る儻然として夢覚むる時」とあるなど、夢から覚める描写にしばしば用いられる。
- 午夢：昼寝に見る夢。
- 黄鸝：高麗ウグイス。唐・王維「積雨輞川莊作」（『全唐詩』巻 128）に「漠漠たる水田に白鷺飛び、陰陰たる夏木に黄鸝囀る」とある。

【補説】

王安石よりやや若い北宋・蘇舜欽(1008-1048)の「夏意」（『蘇学士集』巻 6）は、夏の昼寝の心地よさを描いた詩であるが、「樹陰地に満ち日は午に当たり、夢は覚む流鶯時に一声」と結ぶ。木陰が地面一面に広がり、時は正午、微睡んでいた詩人は飛び行く鶯の一声を聞き、はたと夢から覚める。この「夏意」詩は、南宋・呂祖謙『宋文鑑』巻 27、南宋・劉克莊『後村詩話』巻 2、南宋・蔡正孫『詩林広記後集』巻 7 に引かれるなど、宋代から高く評価されており、蘇舜欽の代表作の一つとして有名であったようである。王安石もこの詩を知っていて「午睡」詩を作ったのではないか。日が移り木陰が広がることは第一句に示されている。詩人は第三句において、ぼんやりとした夢の名残の中で黄鸝の声を聞いたように思い、はっとする。だが、王安石は夢うつつに聞いた黄鸝が、現実のものであったのか、夢の中のものであったのか分からずにいる。彼はきよろきよろと黄鸝の姿を探しながらも、心地よい昼寝の夢の余韻を楽しんでいるのであろう。

王安石「湖陰先生^{さん}の壁に書す（書湖陰先生壁）二首」其二（『李壁注』巻 43）には「黄鳥数声午夢残し、尚お身の半山の園に在るを疑う」とある。湖陰先生（楊徳逢）は鍾山に隠棲しており、王安石が半山に園圃を構えたのも江寧府（現在の南京）に隠遁して以降であることから、「湖陰先生の壁に書す（書湖陰先生壁）二首」其二は熙寧九年（1076）以降の作品と考えられる。「湖陰先生の壁に書す（書湖陰先生壁）二首」其二と「午睡」は同工異曲であることから、二首は同時期の作品であるかもしれない。

王安石-6 「題齊安壁」

「齊安の壁に題す」

日	淨	山	如	染	日	淨	く	山	染	む	る	が	如	く
					ひ	き	よ	や	ま	そ			ご	と
風	暄	草	欲	薫	か	ぜ	あ	た	た	か	く	さ	か	お
														ほ
梅	残	數	點	雪	う	め	ざ	ん	す	う	て	ん	ゆ	き
麥	漲	一	溪	雲	む	ぎ	み	な	ぎ	い	っ	け	い	く
														も

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』卷 63

【押韻】

「薫」「雲」：上平声 20「文」

【訳】

日に清らかにあらわれて、山はいま染めあがり、
風あたたかに吹きそよぎ、草は匂いたつ。
梅はさかりをすぎ、ぽつりぽつりと残る雪。
麦は日々ののび、みぎわいっばいみなぎる雲。

【注】

- 齊安：江寧にあった寺の名。南宋・張敦頤『六朝事迹編類』卷下・寺院門に「淨妙寺（旧名齊安寺）は南唐の昇元中（937-943）、額を建てて齊安と曰う。本朝の政和五年（1115）正月、改めて淨妙と賜う。旧は官路に臨み、今は移して高隴に置く。秦淮に面す。王荊公の齊安寺詩刻に云う、……。城を去ること四里」とみえる。
- 日淨：日の光の清浄感をいう。唐・杜甫「近聞」（『全唐詩』卷 221）に「渭水 逶迤として白日淨く、隴山 蕭瑟として秋雲高し」。
- 山如染：目に鮮やかな山の美しさをいうのであろう。王安石以前の用例を見出しがたい。南宋・周紫芝「叔共 近詩百余篇を出す 携え帰りて灯下に読む 竟に小詩を其の後に題す（叔共出近詩百餘篇攜歸燈下讀竟題小詩其後）三

首」其二（『太倉稊米集』巻 21）に「翠鬢 戸に当りて山染むるが如く、匹練簷を繞りて江自ずから寒し」。

- 風暄：春風のあたたかさ。梁・江淹「別賦」（『文選』巻 16）に「閨中 風暖く、陌上 草薫る」。
- 梅残：梅の花が盛りを過ぎること。散りのこること。唐・閻選「八拍蠻」（『全唐詩』巻 897）に「雲は嫩黄を鎖して煙柳細やかに、風は紅蒂を吹きて雪梅残す」。
- 数点雪：あちこちに消えのこる雪。南宋・李綱「葉夢授 家に園の梅花を送らる 且つ絶句十五章を以て示さる 其の韻に次す（葉夢授送家園梅花且以絶句十五章見示次其韻）」其三（『梁溪集』巻 27）に「枝頭数点 雪初めて残し、折りて氷壺に置けば外寒を分かつ」。
- 麦漲：麦が伸び育つこと。南宋・黄公度「余子侯の石泉に遊ぶに次韻す（次韻余子侯遊石泉）」（『知稼翁集』巻上）に「平疇の漲麦 雲は海に連なり、絶壁の蟠松 蓋は天に倚る」。
- 一溪雲：谷全体に広がる雲。北宋・田錫「偶題 因りて張王二諫議を懐う（偶題因懷張王二諫議）」（『咸平集』巻 16）に「半夜の啼猿 千里の客、数峰の残雪 一溪の雲」。

【補説】

詩の中に現れる事物は、「日」「山」「風」「草」「梅」「雪」「麦」「雲」と少なくない。しかし気をつけて見ない限り、この短い詩のなかにこれほど多くのものが詠み込まれていることは見過ごしそうだ。四句はすべて対句からなる。対句は上下の句の対比性、相似性によって構成されるわけだが、右にあげた八つのモチーフは何れもパートナーと対応する位置に行儀良く収まっていて、整齊のとれた構成となっている。

しかしながら句と句の関係、四句それぞれの重さは一様ではない。たとえば前半、第一句「日淨く山染むるが如し」は視覚を中心とし、第二句「風暄く草薫らんと欲す」は触覚（温度）と臭覚を織り交ぜるというように、より鮮やかで明確なものと、穏やかで微妙なものというように、軽重のメリハリがはかられている。措辞もこれに見合うかのように、新奇な表現とやや常套的な表現が

使い分けられる。「日」を「浄」といい、「山」を「染」めるとするのは、第二句の「風一暄」「草一薰」に比べると、習見の表現ではない。見いだした新しい春を、それにふさわしく表現すべく選び取られた新しさと言えようか。「あたたかな風」「薫る草」の凡庸さは、それが凡庸であることによって第一句を下支えし、その新しさを保障する。

後半二句の「残」と「漲」は、過去と現在、あるいは現在と未来の対比のもとに感受されたもので、ここにさりげなく時間の推移が詠み込まれている。盛衰・消長の対比が、いままさにある春の一瞬をとらえる。また「梅は残す数点の雪、麦は漲る一溪の雲」には前半二句の「如」「欲」というような比喻のマーカが見られない。しかし「梅一雪」、「麦一雲」をもまた、喩詞と被喩詞の関係にとらえることは可能であろう。「残数点」「漲一溪」という語によって、たくみにつないで差し出された、「咲き残る梅」と「消え残る雪」、「伸び育つ麦」と「湧き上がる雲」の類似性が、読者の直感に訴える。ただ、「梅」と「雪」、「麦」と「雲」を、いずれも眼前の景としてとらえるも可。詩そのものはどちらにも読めるように書かれている。詩のことばが喚起するテキスト外の現実としての八つのモチーフは、わずか二十字の中に安定していて無理はない。同時に詩のことばそれ自体に目をむけたとき、そこにはことばの表層における遊戯が巧みに織り込まれている。

詩題によれば江寧にあっての作。

(和田英信)

王安石-7 「昭文齋」

しょうぶんさい
「昭文齋」

我自山中客
何縁有此名
當縁琴不鼓
人見有虧成

われ みづか さんちゆう きやく
我 自ら 山中の 客 たるに
なに よ 縁りてか この 名 ある
まさ きん こ
当に 琴 鼓 せざるも
ひと きせい あ み よ
人の 虧成 有る を 見る に 縁る なる べし

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 68

【校異】

「人見有虧成」、『臨川先生文集』は「人不見虧成」に作る。

【押韻】

「名」「成」：下平声 14「清」

【訳】

わたしはすでに山中の人として隠棲したのに、
 どうしてここに昭文斎の名が付けられたのだろうか。
 わたしは、昭文のように琴は弾かないが、
 わたしの官界での浮沈を見たのによったのだろう。

【注】

- 昭文斎：王安石の書斎の名。この詩には題下の自注に「米黻 余の定林の居る所に題す。因りて作る」とある。米黻は米芾のこと。南宋・周応合『景定建康志』巻 17 及び巻 21 には、鍾山に王安石の住まい定林庵があり、米芾が書斎を昭文斎と名付けたとの記述がある。昭文は王安石が熙寧八年 (1075) に昭文館大学士という、典籍の管理、修写や校訂を司る館職（名誉職）を加官されたことと、『莊子』齊物論に登場する琴の名手昭文の名をかけている。「琴不鼓・虧成」の項を参照。
- 山中客：王安石が江寧（現在の南京）の鍾山（蔣山）に隠棲したことを指す。
- 琴不鼓・虧成：虧成はかけることと満ちること。『莊子』齊物論の琴の名人昭文（昭氏）に関する記述の中に出てくる表現。「成ると虧くると有るは、故ち昭氏の琴を鼓すなり。成ると虧くると無きは、故ち昭氏の琴を鼓せざるなり。昭文の琴を鼓するや、……」と琴の名人昭文であっても、琴をひいてしまえば、何かしらの分別が生じてしまうことを説く（訓読及び解釈は金谷治訳岩波文庫版による）。この詩では、「虧成」を王安石自身の政治上の得失とかけている。

【補説】

米芾『書史』によると、米芾は元豊六年 (1083) に王安石とはじめて面識を

得たとある。このことから、この詩は元豊六年以降の作とわかる。

米芾は王安石が宰相位にあった時の館職である昭文館大学士を以て、その書齋の名とした。それは、同時に『莊子』齊物論にあらわれる昭文なる琴の名手の名前もかけてある。琴は隠者と結びつけられるので、隠者となった王安石という意味が込められていると考えられよう。

その命名に対する返答として、王安石は、『莊子』の昭文が言及される部分に出てくる「虧成」の表現を利用して、自分の政治家生活の浮き沈みに言及し、ひねりを加え、やや自嘲気味な作品に仕上げた。『臨川先生文集』や『景定建康志』巻21では結句を「人不見虧成」に作る。この場合、詩の後半の解釈は、「わたしは、琴を弾かない。そのため、『虧成』が生じないことにちなんで、昭文と名付けられたのだろう」となる。しかし、王安石らしいひねりを持たせたとして、「人見有虧成」で解釈したい。この詩は前半部が問い、後半部が答えという構成になっている。承句、転句二文字目に「縁」の字が線対称となるように用いられているのが、視覚上の技巧として面白い。

(佐野誠子)

王安石-8 「臺上示呉愿」

だいじょう ごげん しめ
「台上 呉愿に示す」

細書妨老讀	さいしょ ろうどく さまた 細書 老読を 妨げ
長簞愜昏眠	ちやうてん こんみん かな 長簞 昏眠に愜う
取簞且一息	てん と しばら いっそく 簞を取りて 且く一息す
抛書還少年	しよ なげう ま しょうねん 書を抛てば 還た少年たり

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻69

【校異】

「愜」、『王文公文集』は「怯」に作る。

【押韻】

「眠」「年」：下平声 1 「先」

【訳】

細かい文字は老人の読書には辛く、
竹の長いすは寝てしまうのにちょうどいい。
長いすを引き寄せて一休み、
書物を投げ捨ててしまえば少年のころと変わらない。

【注】

- 呉愿：人名。未詳。
- 昏眠：眠り込むこと。唐・韓愈「朝より帰す（朝歸）」（『全唐詩』巻 342）に「暮に抵りて但だ昏眠し、歌成らずして慷慨す」とある。
- 抛書：書物を放り出す。唐・元稹「竇校書に酬ゆ 二十韻（酬竇校書二十韻）」（『全唐詩』巻 406）に「塵土に書巻を抛ち、槍籌に酒権を弄ぶ」とある。

【補説】

第一句と第四句、第二句と第三句が対応しており、それを如実に表すのが、「書」「簞」「簞」「書」と並ぶ各句の二文字目である。一句目の「老」と四句目の「少」も対応している。同時に、一句目と二句目に「細」「長」、「老」「昏」と近似した意味、「妨」「愜」と逆の意味の文字を据え、完全な対を為している。一方、三句目、四句目は「一」「少」が近似した意味、「取」「抛」が逆の意味であり、これもまた対といえる。以上のように、この詩は極めて緻密に練り上げられた、複雑な構成を持ち、言葉遊びをふんだんにちりばめてある。

末句については「書を抛ちて少年に還す」（書物を投げて少年に返す）との読みも可能ではある。その場合「少年」は呉愿を指すことも考えられる。だが、末句に唐突に「少年」が現れるのは、いささかまとまりが悪く、また、この「少年」が呉愿であるとすれば、テキスト外の状況に依拠しなくては読めない詩となる。

また、「還少年」が「少年の日に戻る」の意味を表す類例として、南宋・陸游「酒に対す（對酒）」（『劍南詩稿』巻 13）の「鏡を看れば喜びて舞わんと欲し、追いて還る少年の狂」、明・劉基「旅興五十首」其二十（『誠意伯文集』巻 15）の「自ら恨む松喬に非ざりて、少年に還る能わざるを」などが挙げられる。こ

これらの用例においては「還」を動詞の「かえる」として読むべきであるが、ここでは、対となる第三句「且」と同じく副詞で理解し、「還」を「また」と読みたい。なお、意味については、「かえる」と解釈した場合と同様、読書さえしなければ少年の日と変わらないのだ、と理解した。なお、この詩の成立時期については不明であるが、「少年」の語などから熙寧九年(1076)南帰後の詩である可能性が高い。

(高芝麻子)

王安石-9 「示道原作」

どうげん しめ さく
「道原に示すの作」

久不在城市

ひさ じょうし あ
久しく城市に在らず

少留心悵然

しば とど ところ ちょうぜん
少らく留まりて心悵然たり

幽芳可攬結

ゆうほう らんけつ
幽芳攬結すべし

佇子飲雲泉

ま し うんせん の
佇つ子が雲泉を飲むを

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻69

【校異】

題、『臨川先生文集』、『王文公文集』は「示道原」に作る。

【押韻】

「然」「泉」：下平2「仙」

【訳】

もう長いこと城市から離れていたの、

しばらく城市に留まるだけで、心に寂しさがわきおこる。

私がいま暮らしている山中は、香り高い花を身に帯びることができる。

あなたがいつか、雲や泉の湧くこの山中に隠棲することを待ち望んでいます。

【注】

○ 道原：沈季長(1027-1087)。字道原。王安石の妹婿。王安石には三人の姉妹

があり、沈氏は末妹の婿。補説参照。

- 悵然：失意に悲しむ様子。戦国・宋玉「神女賦」(『文選』巻 19)に「寐ねて之を夢み、寤めて自ら識らず。罔として楽まず、悵然として志を失う」とある。
- 幽芳：清らかな香りを放つ花。北宋・欧陽脩「豊樂亭記」(『居士集』巻 39)に「乃ち日に滌人と仰ぎて山を望み、俯して泉を聴き、幽芳を掇りて喬木に蔭す」とある。
- 攬結：手に取り、身につけること。君子の象徴として芳草を身に帯びる『楚辞』の遺意が込められていると考える。『晋書』五行志に「草生うれば攬結すべし、女兒攬抱すべし」とある。
- 佇：待ち望むこと。劉宋・謝靈運「従弟恵連に酬ゆ(酬従弟恵連)」(『文選』巻 25)に「夢寐に帰舟を佇つ、我が吝と勞とを釈かん」とある。
- 飲雲泉：「雲泉」は雲や泉のわく山中。「飲雲泉」はここでは官職を辞し山中で隠棲することをさす。王安石「望之と八功德水に至る(與望之至八功德水)」(『李壁注』巻 2)に「知る子が糟を舗わざるを、相与に雲泉を酌まん」とある。これは『楚辞』「漁父」の「衆人皆酔わば、何ぞ其の糟を舗いて其の醜を啜らざる」を典故とする。「あなたは世間に迎合するような人ではないと、私は知っている。だからともに雲や泉を飲もうではないか」という意味。唐・白居易「自ら写真に題す(自題寫眞)」(『全唐詩』巻 429)に「宜しく当に早く罷め去り、雲泉の身を収取すべし」とある。

【補説】

『宋史』沈銖伝によると、沈季長(道原)は王安石の妹婿である。王安石の集には他にも王安石と沈季長との交歓が伺われる詩がみられる。それらは王安石引退後、鍾山を舞台とした詩が多い。「定林にて道原に示す(定林示道原)」(『李壁注』巻 3)、「棋に対して道原と草堂寺に至る(對碁與道原至草堂寺)」(『李壁注』巻 4)など。定林寺、草堂寺はともに鍾山にある(南宋・周応合『景定建康志』巻 46 による)。また、「道原と西菴に遊び遂に草堂宝乗寺に至る(與道原遊西菴遂至草堂寶乘寺)二首」(『李壁注』巻 22)では自注に「元豊四年十月二十四日」の日付があり、王安石が鍾山に隠棲した後の作品であることがわかる。沈季長は王安石死去の翌年元祐二年(1087)に亡くなっているが、沈季

長は最後まで官職についており隠棲はしていない。この詩は王安石自身が隠棲した後、城市へ行き沈季長と会った際に詠まれたものであろう。

(大戸温子)

王安石-10 「傳神自讚」

でんしんじさん
「傳神自讚」

此物非他物

今吾即故吾

今吾如可狀

此物若爲摹

しぶつ たぶつ あら
此物は他物に非ず
きんご すなわ こご
今吾は即ち故吾なり
きんご も かたど
今吾如し状るべくんば
しぶつ い か も
此物若為にか摹せん

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』卷 67

【校異】

題、『王文公文集』では「眞贊二首」其二に作る。

【押韻】

「吾」「摹」：上平声 11「模」

【訳】

わたしはわたしであり、それ以外の何物でもない。

かたちは移ろえど今のわたしは過去のわたしと同じなのだ。

変化するわたしをもしかたちに写すことができるとすれば、

変わらないわたしというものをどのように描き得ようか。

【注】

- 伝神：描かれた事物が真に迫っていること。または事物の本質や精神をよく描きだしている絵。劉宋・劉義慶『世説新語』巧芸に「顧長康 人を画くに、或いは数年目睛を点ぜず。人 其の故を問う。顧曰く、四体妍蚩、本より妙処に関する無し、伝神写照は、正に阿堵中に在り」（「阿堵」は「この」の意）とある。また北宋・蘇軾「鄴陵の王主簿画く所の折枝に書す（書鄴陵王主簿所

畫折枝)二首」其一(『合注』卷29)に唐代の画家^{へんらん}辺鸞と北宋の画家^{ちようしょう}趙昌の花鳥画を称えて「辺鸞の雀は生を写し、趙昌の花は神を伝う」という。

- 自讚：「讚」は「賛」に同じ。絵画に書き添えた詩文(画賛)のこと。この場合は「自らの肖像画に自ら賛したもの」の意。
- 此物・他物：「此物」は自分自身。「此物」「他物」とともに仏教、特に禅宗に見える語。南宋・普濟『五灯会元』卷3「大梅山法常禅師」の条に、禅師は臨終に際して弟子たちに「即ち此物は、他物に非ず。汝等諸人、善く自ら護持せよ、吾今逝くなり」と言ったとある。
- 今吾・故吾：「故吾」は昔の自分、以前の自分。「今吾」は故吾に対する語で、今の自分をいう。王安石の絶筆とされる「新花」(『李壁注』卷2)には「新花と故吾と、已んぬるかな^や両つながら^{ふた}忘るべし」とある。
- 状・摹：かたちを写す、描く。

【補説】

描かれたかたちである自らの肖像画に相對しつつ、かたちが移ろっても変わることのないただひとつのわたし「此物」に思いをはせた詩。一句目、二句目に「此物一他物」、「今吾一故吾」と、仏教語とそれに対応する語を尻取りのように並べ、一句目と四句目、二句目と三句目の冒頭に同じ語を配するなど、技巧を凝らした詩である。

冒頭にある「此物」とは、自分の存在そのものであり、仏教でいうところの「真我・本性」に当たるものか。これに対応する「他物」とは、自分以外の一切の事物を指す。「故吾」は「以前の自分」の意であり、『莊子』^{でんしほう}田子方にある、孔子が顔回を諭したという言葉「^{ふる}故き吾れを忘ると^{いえど}雖も、吾れ忘れざる者の存する有り」(刻々に変化推移してゆく古きわたしの姿は見失っても、見失われることのないもの、変化しながら変化することのない本質的なものが、このわたしにはちゃんと存在しているのであるから)を踏まえる(書き下し、解釈は福永光司『莊子』外篇朝日新聞社刊中国古典選8、1966による)。わたしというものはひとつであり、今と昔、かたちは移ろえどわたしなのだ、とするのが前半二句である。二句目、三句目にたたみかけるように用いられる二つの「今吾」は、前者を描かれた過去の自分に対する「いまこの時点でのわたし」、後

者をいまこの時点のわたしすらも追い越して「この先も刻々と変化推移するわたし」とわずかながらニュアンスの異なるものに読み替えたい。昔から今へ、今から未来へと刻々変化するわたしをもしかたどることができるのなら、変化することのないただひとつのわたしをどのように描き得るのだろうか——それがすなわち「伝神」ということなのだ、とするのが後半の二句であろう。

親交のあった画家・李公麟の手になる王安石の肖像画に関する記述は、南宋・周応合『景定建康志』巻17、南宋・陸游『入蜀記』巻2の乾道六年(1170)七月の条などに見える。陸游が亡き父から伝え聞いたところによると、李伯時(伯時は李公麟の字)は王安石の住まいであった江寧(現在の南京)・鍾山にある定林庵の昭文齋の壁に、その肖像画を描いた。王安石亡き後、書齋は封印され賓客があったときにだけ開かれたが、肖像画の生き生きとした描写は見る者を驚かせたという(李公麟については王安石-25「題定林壁懷李叔時」に詳注があり、参照されたい)。この記述を踏まえれば、肖像画は江寧隱棲後に描かれたもの、詩もまた晩年のものと推察できる。また、描かれた「故吾」とそれをみつめる「今吾」のあいだにより顕著なかたちの相違があったと読めば、肖像画のなかの詩人は壮年期のすがたであったと考えることもできよう。

校異に示した通り、この作品は『王文公文集』では二首連作の第二首とする。第一首は七絶で、「我と丹青とふたつながら幻の身、世間流転してかならず塵と成る。但ただ知る 此物は他物に非ず、問う莫れ 今人猶なお昔人のごときかと」(『李壁注』巻43に「眞贊」として、また『臨川先生文集』巻29に「傳神自讚」として収録)と述べ、「わたしという存在も、描かれたそのかたちも」ともに幻と達観しつつも、他の何者でもない「わたしという存在」(「此物」)をみつめるすがたが描かれている。

(水津有理)

王安石-11 「題何氏宅園亭」

「かしたく えんてい だい
何氏宅の園亭に題す」

荷葉參差卷 かよう しんし 荷葉 參差として巻まき

榴花次第開	りゅうか しだい ひら 榴花 次第に開く
但令心有賞	ただ ころ をして しょう あ 但だ 心をして 賞有らしめば
歲月任渠催	さいげつ それ うなが まか 歲月 渠が 催すに任す

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 67

【押韻】

「開」：上平声 16「咍」、「催」：上平声 15「灰」（同用）

【訳】

ハスの葉はそれぞれが思い思いのかたちに巻き、
ザクロの花は一つ又た一つと開く。
ただ、自然の美を心でとらえることが出来さえすれば、
歲月などただ過ぎるに任せればよいのだ。

【注】

- 何氏：人名、未詳。補説参照。
- 参差：ふぞろいな様子。
- 卷：生えたばかりのハスの葉がまだ開ききらず、巻いている状態をいう。
- 榴花：ザクロの花。唐・韓愈「張十一が旅舎に題す三詠 榴花（題張十一旅舎三詠 榴花）」（『全唐詩』巻 343）に「五月の榴花 眼を照らして明らかなり」、北宋・梅堯臣「石榴花」（『宛陵集』巻 32）に「春花 開き尽くして深紅を見し、夏葉 始めて茂りて浅緑明らかなり」とあるように、「榴花」は、春の花が尽きたのち、燃え立つ緑のなかに深紅の花を咲かせる初夏の風物として描かれる。
- 次第：次々と、一つまた一つと。
- 賞：嘆賞する。自然の美を眺め、味わうこと。劉宋・謝靈運が愛用したことばで、たとえば川の中洲にそびえる孤島的美しさをうたった「江中の孤嶼に登る（登江中孤嶼）」（『文選』巻 26）の中に「雲日は相輝映し、空水は共に澄鮮たり。靈を表して物賞する莫く、真を蘊みて誰か伝うるを為さん」などの表現がみえる。
- 渠：三人称の代名詞。それ。唐・貫休の「靈溪暢公が墅に題す（題靈溪暢公

墅)」（『全唐詩』卷 830）に「但だ心をして清浄たらしめば、渠の歳月の催すにまか従す」。

【補説】

前半二句は一見してわかるきれいな対句であり、池にひろがる「荷葉」とそのほとりに咲く「榴花」によって初夏の庭園の風景を点出しているが、そこにとらえられているのはモノとしての景物というよりもそのいのちの輝きであり、その表現を可能にしているのが「参差一卷」「次第一開」という句づくりである。ハスの巻葉の長短高低ふぞろいなさまをかたどる「参差」は表現に視覚的なリズムをもたらし、花の開くありさまを動きのなかでとらえた「次第」とともに、自然のすがたをあたかも生きて動いているものであるがごとくに描いているからだ。李壁注は、句法の類似するものとして「参差」（入り乱れ交錯するさま、双声）と「邈迤」（曲がりくねって長く続くさま、疊韻）を用いた唐・杜牧「沈処士に別る（別沈處士）」（『全唐詩』卷 524）の「旧事 参差の夢、新程 邈迤の秋」を引くが、「参差」と「次第」を用いて動きのある視覚イメージを作り上げているものとしては、唐・盧綸「魏広の下第して揚州に帰るを送る（送魏廣下第歸揚州）」（『全唐詩』卷 276）の「淮浪 参差として起ち、江帆 次第に來たる」、唐・羅隱「扇上に牡丹を画く（扇上畫牡丹）」（『全唐詩』卷 663）の「葉は彩筆に随いて参差として長く、花は輕風を逐って次第に開く」などをあげることができる。ことに後者は、表現の対象が実際には静止しているはずの絵画であることから、筆者があえて表現しようとしたものが描かれた対象の生命力や躍動感であることがより明確であるともいえるだろう。

前半二句が描くのが自然の美のいのちの輝きであるがゆえに、それらが時の流れの中にあってたちまち移ろっていくものであることは一層自明であり、後半二句はそれを踏まえた上で、自然の美を心でとらえることが出来さえすれば、移ろうものは移ろうままに任せればよいのだと述べる。「心に賞有らしむ」をここでは、自然の美を眼ではなくこころでとらえること、移ろいゆくものの中にある真実や本質をとらえることと理解した。前半に描き出された眼前の景の輝きや躍動は、この後半二句の存在により、一瞬を封じこめたような不可思議な静けさの漂うものとなっている。

この詩の制作時期及び「何氏宅」の所在については不明だが、清水茂『王安石』(岩波書店 1962)は「何氏宅の壁に題す(題何氏宅壁)」(『李壁注』巻 43)の注の中で、同じ場所に関する作品と思われるものとして本作を挙げたうえで、作中に「皖瀾^{かんせん}」(現在の安徽省潜山県の西に位置する山)の語がみえ、「此の言在りと雖も己に三年なり」とあることから、王安石が舒州(現在の安徽省懷寧県)の通判となって三年目の皇祐五年(1053)の作であろうとする。一方、『臨川先生文集』巻 28 に「道原と与に何氏宅自り歩みて景德寺に至る(與道原自何氏宅歩至景德寺)」(ただし『李壁注』巻 42 は題を「道原と与に歩みて景德寺に至る(與道原歩至景德寺)」に作る)とあることから「何氏宅」は景德寺の近くに位置するものと推察することも可能である。景德寺について清朝の沈欽韓注は「景德寺は城内嘉瑞坊に在り、旧崇孝寺なり」(南宋・周応合『景定建康志』巻 46)を引いており、これに従えば「何氏宅」もまた江寧(現在の南京)に在ることになる。後半二句に垣間見える一種の達観を考えあわせれば、江寧に隠棲した晩年の作と考えることもできよう。

(水津有理)

王安石-12 「草堂一山主」

「草堂^{そうどう}の一山主^{いちさんしゅ}」

一公持一鉢

想復度遙岑

地瘦無黃獨

春來草更深

一公 一鉢^{いっこう いっはつ も}を持ちて
 復^また遙岑^{ようしん}を度らんと想^{わた おも}う
 地^ち瘦^やせて黄獨^{おうどく}無^なく
 春^{はる}来^きたりて草更^{くささら}に深^{ふか}し

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 63

【校異】

「独」、『臨川先生文集』、『王文公文集』は「犢」に作る。

【押韻】

「岑」「深」：下平声 21「侵」

【訳】

一人の僧侶が托鉢の鉢をひとつ持って、
遠くの山を越えようとしている。
土地はやせていて山芋がない、
春が来て草ばかりがさらに生い茂ってしまった。

【注】

- 草堂：原義は草葺きの堂屋。ここでは、齊・孔稚珪「北山移文」（『文選』巻43）冒頭で「鍾山之英、草堂之靈」と書かれる周顒の隠居所草堂寺を指す。南宋・周応合『景定建康志』巻46によると、当時の隆報宝乘禅寺が昔の草堂寺であり、上元県鍾山郷にあった。王安石が草堂寺を訪れたこと及び草堂寺を詠んだ詩については、補説参照。
- 山主：寺の住職。
- 一鉢：僧侶が托鉢のときに持つ一つの鉢。また、北宋・道原『景德伝灯録』巻30に「一鉢歌」なる杯度禅師作という歌がしるされており、こちらも意識されていたようである。補説参照。北宋・道原『景德伝灯録』巻3「唯だ一衣一鉢一坐一食、頭に奉じて陀行す」。
- 遥岑：遠くにあるそそりたった山。
- 黄独：山芋。飢饉のときに食べる植物。

【補説】

王安石には「草堂一山主」以外にも草堂寺を詠んだ詩がある。『李壁注』巻22の「道原と西菴に遊び遂に草堂宝乘寺に至る（與道原遊西菴遂至草堂寶乘寺）二首」では、李壁が、王安石の「元豊四年（1081）十月二十四日」とある自注を紹介する。また、その他に『李壁注』巻4に「棋に対して道源と草堂寺に至る（對碁與道源至草堂）」、巻22に「重ねて草堂寺に遊びて次韻す（重游草堂寺次韻）三首」、「草堂」の詩がある。「重ねて草堂寺に遊び次韻す三首」は、草堂寺の困窮の状況を描いた作品である。さらに、この詩の其一には「禅房深竹に閉じ、齋鉢遥岑を度る」とあり、其二には、「寒くして三衣の法を守り、飢えて一鉢の歌を伝う」とあって、この詩と表現が重なる。「一鉢歌」は、托鉢の

ときに歌う歌だったのであろう。つまり、草堂寺の僧侶は現実に飢えに苦しんでいた。

唐・杜甫「乾元中同谷県に寓居し歌を作る（乾元中寓居同谷縣作歌）七首」其二（『全唐詩』巻 218）には「長鑿^{ちようざん} 長鑿 白木の柄、我が生子^しに託して以て命と為す。黄精 苗無く 山雪盛んなり、短衣^{しば} 数しば挽^ひけども脛^{すね}を掩^{おお}わず」との句がある。長鑿は長い柄の鋤、杜甫が乾元年間（758-760）同谷県（現在の甘粛省成県）に閑居していたおり、食料がなくなったために、鋤を持って山芋を掘ろうとした。しかし、雪が降り、山芋を探す手がかりとなる蔓もない、着物もつんつるてんで、いくら引っ張っても脛を覆わないと言っている。「黄精」は、『全唐詩』では「黄精」に作るが、『杜詩詳注』では「黄独」に作り、かつ、校異が載っている。李壁注もこの杜甫の詩を引用し、「黄独」に作る。杜甫の詩の「黄独」、「黄精」については、飢饉なのだから、山芋である「黄独」が正しいという説と、杜甫はしばしば薬草を売って現金を得ていたことから、薬草である「黄精」が正しいという説と両方あるそうである。小高修司「杜甫疾病攷」（『中唐文学会報』16、2009）参照。

王安石のこの詩では、杜甫と同じく飢えた状況にある僧侶が托鉢なのか、遙か遠くの山まで出かける。そこから、王安石は杜甫の山芋掘りを連想した。しかし、ここは土地が痩せていて山芋さえ存在しない。季節は春であり、杜甫のときのように雪によって山芋の蔓がみつからないということはない。しかし、春は春とて、他の草木が生い茂り、山芋の蔓を弁別して探すのが難しい、という意味が結句に込められているのではないだろうか。また、杜甫「春望」（『全唐詩』巻 224）の「城春にして草木深し」も意識しての「草更に深し」なのかもしれない。

『臨川先生文集』は詩題を「草堂一上人」に作る。ちなみに、全く同じ詩が『全唐詩』巻 274 では戴叔倫「草堂一上人」として収録される。『全唐詩』では、この詩の前後に『王文公文集』巻 26 と同じ配列で王安石の詩が収められており、これらは、何らかの編集上の誤りで戴叔倫の作とされてしまったようである。清・呉景旭『歴代詩話』巻 37「杜詩・黄独」の項目でも、この詩を戴叔倫の作として紹介している。とりわけ本作の場合、前述のように他の王安石詩との関連が認められるため、唐代の作品である可能性はない。王安石-13「題黄

司理園」、王安石-75「回文詩四首」其四の補説も参照。

「重ねて草堂寺に遊びて次韻す」と類似の表現があるため、同時期の作であろう。詩題の「重」が、「道原遊西菴遂至草堂寶乘寺二首」のあとに再び訪問、という意味であれば、制作時期は元豊四年(1081)以降である。

(佐野誠子)

王安石-13 「題黃司理園」

「こうしり えん だい黄司理の園に題す」

爲憶去年梅

凌寒特地來

閨前空臘盡

渾未有花開

きょねん うめ おも ため 去年の梅を憶うが為に
かん しの とくち き 寒を凌いで特地に来たる
じゅんぜん むな ろう つ 閨前空しく臘尽きて
す いま はな ひら あ 渾べて未だ花の開く有らず

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 67

【押韻】

「梅」：上平声 15「灰」、「来」「開」：上平 16 声「哈」（同用）

【訳】

去年のこの日の梅を思い、
寒さをこらえて わざわざたずねた。
師走はすぎたが うるうをあまし、
花はちっとも咲いてはくれぬ。

【注】

- 黄司理：この人物については未詳。司理は司理参軍で検察官の職掌。宮崎市定「宋代州県制度の由来とその特色」(『宮崎市定全集』10、岩波書店 1999) 参照。
- 去年梅：去年目にし、いままた訪ね見ようとする梅の花。唐・白居易「諸客

と酒を携え去年の梅花を尋ねて感有り（與諸客攜酒尋去年梅花有感）（『全唐詩』卷 443）に「馬上 同に携う今日の杯、湖辺 共に覓む去春の梅。……樽前 百事 皆な旧に依るに、点検 惟だ無し薛秀才」。

- 特地：ことさらに。
- 閏：うるう月。閏前はその前。太陽の周期に準じて一年を二十四の節気・中気に分けるが、閏十二月の置かれる年の場合、二十四節気の最後の中気である大寒（これの属する月が十二月となる）が十二月晦にあたり、次の中気である雨水（これの属する月が正月となる）は正月朔になる。この間にもう一度、朔から晦にいたる月のサイクルがはさまるが、中気がない。よってここに閏月が置かれる。約 29.5 日の月の周期と約 365 日の太陽の周期の折り合いをつけるための処置である。かりに年ごとの寒暑の差を無視すれば、もっとも春の訪れの遅い年ということになる。なお春に限らず「閏前」は時節の訪れの遅さが意識される。たとえば唐・司空図「白菊三首」其一（『全唐詩』卷 634）に「猶お喜ぶ 閏前 霜未だ下りず」と。十二月閏の前は、臘が尽きてもなお春が来ないということで、特に意識されるであろう。
- 臘：陰暦十二月。唐・杜甫「江梅」（『全唐詩』卷 232）に「梅蕊 臘前に破れ、梅花 年後に多し」。
- 渾：まったく。なお。

【補説】

去年の梅の美しさに惹かれて寒さのなかわざわざ訪れた、と詩はうたう。注に引いた白居易の詩（李壁注は元禎詩として引く）は、去年と今年のあいだの変わらぬものを詠みわたったうえ、ただ一人亡くなってこの場にはいない友人を偲ぶ。変わらぬ花と移りゆく無常の人事との対比。王詩の主人公の方は、去年と同じく十二月のすえに訪れた。しかし去年と異なったのは「おおつごもり」ならぬ閏月の前であったこと。梅の花目当ての思いは裏切られ、花はまだ咲いていない。当時の人が閏月を失念することはあるまい。ただ、主人公の思いの中にあっただのは去年この日の梅の美しさ、かぐわしさだけ。そのまま詩のことばとして投げ出された花への執着と現実の落差は、からっぽの庭に、暦のいたずらがもたらした戸惑いと落胆、そして去年の梅の幻像を空しく浮かび上ら

せる。

この詩は、「題黃司直園」と題して、『全唐詩』巻 274 に戴叔倫の作として収められている（「閨前」を「門前」に作る）が、誤収であろう。なおこの詩が詠われたのが、閏十二月の置かれた年とすれば、嘉祐三年（1058）、王安石は三十八歳。同年、彼は知常州から提点江東刑獄（江西鄱陽）に移る。その前の閏十二月は、宝元二年（1039）、十九歳。父、王益が卒し、江寧（現在の南京）に葬った年。

（和田英信）

王安石-14 「洵亭」

せんてい
「洵亭」

西崦水泠泠

沿岡有洵亭

自從春草長

遙見祗青青

せいえん みずれいれい
西崦 水泠泠

おか そ せんてい あ
岡に沿いて 洵亭有り

しゅんそう ちょう よ
春草 長ぜし自從り

はる み た せいせい
遙かに見る 祗だ青青たるを

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 67

【校異】

題、『臨川先生文集』では「北山洵亭」に作る。

【押韻】

「亭」「青」：下平声 15「青」

【訳】

西の嶺の冷たい水がさらさらと流れるあたり、

岡に沿ったところに洵亭がある。

春の草が萌えだしてからというもの、

野原は目の届く限り、青一色。

【注】

- 洧亭：鍾山付近にあったあずまやの名。「洧」は次から次へと、しきりにの意。『易』「坎」卦の象伝に「水洧りに至るは習坎なり」とあり、水が絶えず流れ来るさまを言う。「洧亭」とは、附近に小川が流れていたことによる命名か。『李壁注』巻 2 にも「洧亭」と題する五言古詩があり、李壁はその注に『金陵志』を引いて、「洧亭は蔣山に在り廢されて久し。余嘗て之を過る。公の詩に又た云う、西崦水泠泠、岡に沿いて洧亭有りと」という。補説参照。
- 西崦：「崦」は山のくま。「西崦」には日の沈むところという意味もあるが、ここでは「西の山」ほどの意であろう。北宋・蘇軾「新城道中二首」其一（『合注』巻 9）「西崦の人家応に最も楽しむべし、芹を煮筍を焼きて春耕に餉す」。
- 泠泠：音が清く澄んださま。また、清らかで冷たいさま。晋・陸機「招隠詩」（『文選』巻 22）「山溜 何ぞ泠泠たる、飛泉 鳴玉を漱ぐ」。

【補説】

詩題の「洧亭」は、北宋・黄庭堅の題跋「書王荊公騎驢圖」（『山谷内集』巻 27）によれば江寧（現在の南京）城外にあった。黄庭堅はその題跋の中で、王安石と交遊のあった兪清老が王安石の乗る驢馬の後に随って法雲寺と定林寺を行き来し、王安石が洧亭の辺りを散策したことを述べている（金華の兪紫琳清老……荊公の驢を追逐して法雲・定林を往来し、八功德水を過ぎ、洧亭の上りを逍遙す）。洧亭の近辺を王安石が好んで訪れたことは、『李壁注』に洧亭を詠んだ詩が二首あることや、『臨川先生文集』巻 37 収載の詞「漁家傲二首」からもうかがえる。王安石は洧亭が春の雨に洗われたことを聞き、驢馬に乗って爛漫の花が咲き乱れる山道の散策に出かけている（灯火已に収む正月半ば、山南山北 花撩乱。聞説く洧亭に新水 漫るを。款段に騎り、雲を穿ち鳥に入りて遊伴を尋ぬ）。

「春草」「青青」は生命力にあふれた春の息吹の表現であり、劉宋・謝靈運「池上楼に登る（登池上楼）」（『文選』巻 22）の「池塘春草生ず」や「古詩十九首」其二（『文選』巻 29）の「青青たり河畔の草」をはじめとして、繰り返し用いられてきた。雨上がりの春の野は、萌えだした草で青一色に染まる。この詩は清冽な水の音と一面に広がる緑という、聴覚と視覚の双方から春の訪れを捉えているのである。

王安石が涪亭付近を散策したのは鍾山隱棲後である。先に挙げた黄庭堅の題跋にいう「兪清老が王安石の著作『字説』を持ってその驢馬の後に随った（字説を抱き、荊公の驢を追逐す）」時期であるとすれば、『字説』が成ったのは元豊五年(1082)、王安石六十二歳のときであるから、この詩は王安石最晩年の作と考えられる。

(三瓶はるみ)

王安石-15 「題永昭陵」

「永昭陵えいしょうりょう だいに題す」

神闕澹朝暉	神闕 <small>しんけつ</small> に 朝暉 <small>ちょうきたん</small> 澹たり
蒼蒼露未晞	蒼蒼 <small>そうそう</small> として 露 <small>つゆいま</small> 未だ晞 <small>かわ</small> かず
龍車不可望	龍車 <small>りゅうしゃ</small> 望 <small>のぞ</small> むべからず
投老涕霑衣	投老 <small>とうろう</small> 涕 <small>なみだ</small> 衣 <small>ころも</small> を 霑 <small>うるお</small> す

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 78

【校異】

題、『王文公文集』では「永昭陵」に作る。

「澹」、『臨川先生文集』では「淡」に作る。

「霑」、『臨川先生文集』では「沾」に作る。

【押韻】

「暉」「晞」「衣」：上平声 8「微」

【訳】

陵の柱には、朝日がやわらかく射し、

蒼蒼と茂った草の中、露は未だ乾かずに残る。

亡き皇帝の乗る龍車は、追い求めても見ることができない。

年老いた自分の流す涙が、衣を濡らしてゆく。

【注】

- 永昭陵：仁宗陵。仁宗趙禎は在位 1023-1063、王安石四十三歳の時に崩御した。
- 神闕：廟や陵墓の出入り口の両脇に建てられた柱。
- 澹：光があわく、おだやかに射しこんでいるさま。唐・太宗「秋日即目」（『全唐詩』巻 1）「爽気 丹闕に浮かび、秋光 紫宮に澹たり」とある。
- 蒼蒼：草木がよく茂っているさま。『詩経』秦風「蒹葭」に「蒹葭蒼蒼、白露霜と為る」「蒹葭萋萋、白露 未だ晞かず」とある。
- 龍車：皇帝の車。皇帝自身の代わりとして使われることもあり、ここでは亡くなった仁宗をさす。『史記』封禅書の黄帝が龍に乗り天に昇る故事に由来する。
- 投老：老年にいたること。

【補説】

亡き仁宗の陵に詣でた際に詠まれた詩。朝露は日が昇ればすぐにはかなく消えてしまう。そのはかなさに人の命を重ねたものには、死者を弔う歌「薤露歌」（『樂府詩集』巻 27）「薤の上の露、何ぞ晞き易きや。露は晞くも明朝は更に復た落つるに、人の死して一たび去らば何時か帰らん」が挙げられる。この詩では、一日の中のほんの一瞬の美しくはかない風景と人の命、そして追い求めても届かない亡き仁宗への思いを描く。

王安石には他にも「八月一日永昭陵旦表」（『臨川先生文集』巻 45）「十月一日永昭陵 仁宗皇帝に奏告す 旦表（十月一日永昭陵奏告仁宗皇帝旦表）」（『臨川文集』巻 45）などの作品がある。仁宗が亡くなった嘉祐八年（1063）以降の作。

（大戸温子）

王安石-16 「詠穀」

「穀を詠ず」

可憐臺上穀

轉目已陰繁

あわ だいじょう こく
憐れむべし 台上の穀
め てん すで いんはん
目を転ずれば 已に陰繁す

不解詩人意
何爲樂彼園

解せず 詩人の意
何為れぞ 彼の園に楽しむ

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』卷 76

【校異】

「彼」、『王文公文集』は「陂」に作る。

【押韻】

「繁」「園」：上平声 22「元」

【訳】

情けないものだ、台上のコウゾの木は。
あつという間に樹陰が暗くなるほどはびこってしまった。
『詩経』の詩人の気持ちも理解せずに、
どうして奴らはあの樂園を楽しんでいるのだろうか。

【注】

- 穀：楮（コウゾ）のこと。『詩経』小雅「鶴鳴」に、「爰に樹檀有り、其の下に維れ擗あり。它山の石、以て錯と為すべし。……其の下維れ穀あり。它山の石、以て玉を攻むべし」とある。毛伝では穀を悪木とし（穀は悪木なり）、鄭玄は箋で、樹檀（ムクノキ）は賢人を、擗（落ち葉）や穀は小人を譬えるとする（以て彼の園に之きて観る所の者は、人曰く、樹檀有りて檀下に擗有るを言う。此れ猶お朝廷の賢者を 尚びて小人を下にするがごとし。是を以て往くなり）。
- 転目：あつという間に。またたく間に。
- 詩人意：『詩経』の詩人の気持ち。『詩経』小雅「鶴鳴」小序の「鶴鳴は宣王を誨うるなり」の鄭箋に、「宣王に賢人の未だ仕えざる者を求むることを教う」という。
- 彼園：あの樂園。『詩経』小雅「鶴鳴」の「楽彼之園」に取る。鄭箋は朝廷のこととする。

【補説】

この詩は『詩経』小雅「鶴鳴」を借りて、本来下にいるべき小人（穀）が朝廷（台上）でのさばっていることを暗に風刺する。この詩で王安石が謗ったその人物とは、彼自身が推挙した寒門の士であったという。王安石-17「池上看金沙花數枝過酴醾架盛開」の李壁注に『高齋詩話』を引き、王安石が政界を引退した後、その人物が政治の表舞台に立つようになったことを述べている。三句目に言う「詩人の意を解せず」とは、在野の賢人を挙げることで政治の弊を正そうとした『詩経』の詩人の気持ち（＝王安石の気持ち）も理解せずに、の意か。制作年は王安石の宰相辞任（熙寧七年、1074。王安石は翌年宰相に復歸、熙寧九年に再び辞任している）以降と思われる。王安石-17の補説参照。

（三瓶はるみ）

王安石-17 「池上看金沙花數枝過酴醾架盛開」

ちじょう きんさかすうし	とび か よぎ	さか ひら み
「池上 金沙花數枝の	酴醾架に過りて	盛んに開くを見る」
故作酴醾架	故 に酴醾架を作り	
金沙祗漫栽	きんさ た そぞ う	金沙は祗だ漫ろに栽う
似矜顔色好	がんしよく よ ほこ に	顔色の好きを矜るに似て
飛度雪前開	と わた せきぜん ひら	飛び度りて 雪前に開く

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 77

【校異】

題、『王文公文集』は「薔薇四首」其四に作る。

「祗」、『臨川先生文集』は「祗」に作る。

「漫」、『臨川先生文集』、『王文公文集』は「謾」に作る。

【押韻】

「栽」「開」：上平声 16「咍」

【訳】

わざわざ酴醾には棚を作ってやったが、

金沙花は適当に植えただけのもの。

その美しき姿を誇り驕るかのように、

金沙花は雪（酴醾）に蔓を伸ばして咲いている。

【注】

- 酴醾：もとは何度も醸して作る濁り酒のこと。白い色が似ていることから、転じてトキンイバラの花を言う。
- 金沙：未詳。『佩文齋広群芳譜』巻 42 には「金沙羅は酴醾に似ているが、花卉がひとえで鮮やかな紅色をしている」とある。
- 雪：ここでは酴醾を指す。

【補説】

校異に示した通り、『王文公文集』では題名を「薔薇四首」其四に作る。其一、二は『李壁注』巻 42 所収の七絶、同書巻 42 所収の七絶「北山」であり、其三のみ韻が異なる。以下に其一、其二を引く。

「池上看金沙花數枝過酴醾架盛開」（『李壁注』巻 42）

其一

午陰寛占一方苔	午陰 寛く占む 一方の苔
映水前年坐看栽	水に映じ 前年 坐ろに栽うるを看る
紅蕊似嫌塵染汚	紅蕊は塵の染汚するを嫌うに似て
青條飛上別枝開	青条は飛上して 別枝に開く

其二

酴醾一架最先來	酴醾の一架 最も先に來たり
夾水金沙次第栽	水を夾み 金沙 次第に栽う
濃綠扶疏雲對起	濃綠 扶疏として 雲に対して起ち
醉紅撩亂雪爭開	醉紅 撩亂して 雪に争いて開く

これらは恐らく同時期の庭の様子を描いたものであろう。「夾水」とあることから、金沙花は酴醾の棚から池を挟んだ位置にあるらしい。酴醾は白く、金沙花は紅だが、『佩文齋広群芳譜』によれば、両者はよく似ていたようである。また、この二つを合わせて詠む作品は多く見られる。例えば南宋・楊万里の「度雪臺」（『誠齋集』巻 36）には「二月尽頭三月來たり、紅紅白白一齊に開く。酴

醜正に要す金沙の映、道う莫れ金沙は只だ漫ろに栽うと」とある。「度雪臺」というタイトルは王安石の「飛度雪前開」を踏まえるものかと思われる。また、末の句に「金沙花は適当に植えたものだなどと言ってくれるな」と述べるのは、王安石の「金沙は祗だ漫ろに栽う」を踏まえ戯れているのだろう。楊万里には、ほかにも「醜醜金沙を種うるに因りて度雪台を作り以て之に下臨すれば醜醜^{つか}瘁れて金沙独り茂る（因種醜醜金沙作度雪臺以下臨之醜醜瘁而金沙獨茂）」（同卷 36）、「度雪台に登りて金沙茶醜を観る（登度雪臺觀金沙茶醜）」（同卷 41）など、度雪台の金沙花を詠った詩が残る。王安石、楊万里の作品から推測するに、金沙花は醜醜を圧倒するほど生命力の強い植物であったようである。

だが、李壁の引く南宋・曾慥『高齋詩話』は「王安石は数名の寒門の士を推薦した。彼らの位は侍従であった。当初は重要な役割のために用いるつもりはなかった。王安石が政界を去った後、（彼らは）とうとう政治の中樞に参与した。そこでこの詩を作って思いを託した」として、この詩に込められた寓意を指摘する。すなわち、重用するつもりがなかった寒士たちが出世したことと、適当に植えたつमりの金沙花が醜醜を圧倒するように見事に咲き誇っていることを重ね合わせているというのである。

この詩は王安石-15「題永昭陵」、16「詠穀」という二作品に続いて採録されている。「題永昭陵」は仁宗を追慕する詩であろうと考えられる。また「詠穀」には朝廷の現状への寓意がみえる。これらを踏まえ、この詩から時世に対する痛烈な批判を読み取りたい。王安石が宰相の職を辞したのは、熙寧九年（1076）であり、この詩はそれ以降の成立であろう。

（高芝麻子）

王安石-18 「五柳」

ごりゅう
「五柳」

五柳柴桑宅

三楊白下亭

往來無一事

ごりゅう さいそう たく
五柳 柴桑の宅
さんよう はくか てい
三楊 白下の亭
おうらい いちじ な
往來 一事も無く

長得見青青

つね せいせい み う
長に青青たるを見るを得

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 77

【押韻】

「亭」「青」：下平声 15「青」

【訳】

五本柳の我が家を出て、
三本やなぎの駅亭まで。
そんな行き来の繰り返し、特別な何かなどない、
ただずっと道沿いの柳の青が見えるだけ。

【注】

- 五柳：五本の柳。劉宋・陶淵明の自宅の庭にあったと伝えられる。
- 柴桑宅：陶淵明の住まい、ここでは王安石の住まいを言う。「柴桑」は陶淵明の故郷があった県の名（現在の江西省九江県西南）で、その名は県の西南に柴桑山があったことに由来する。
- 三楊：三本の柳。唐・李白「金陵の白下亭にて留別す（金陵白下亭留別）」（『全唐詩』巻 441）に「駅亭 三楊樹、正に白下の門に当る」とあることから、ここでは起句の「五柳」と対をなし、後に続く「白下亭」を導くことばとして用いられている。
- 白下亭：南京の町の東の城門にあった駅亭。
- 長得：常に～することができる。唐・白居易「菩提寺上方晚眺」（『全唐詩』巻 454）に「誰か知らん 簪纓の内しんえいを離れずして、長に逍遥自在の心を得るを」。
- 青青：多くは草木を指すが、ここではとくに柳をいう。唐・白居易「江柳を憶おもう（憶江柳）」（『全唐詩』巻 174）に「遥かに憶う 青青 江岸の上、知らず攀折はんせつするは是れ何人ぞ」。

【補説】

王安石は晩年、江寧（現在の南京）の街の東門と鍾山のあいだに住まいをかまえて隠棲した。このころの作品には、王安石が自宅からそれほど遠くない場

所に他出することを描いたものがしばしば見られる。本作はそうした作品群の一つであるとともに、隠棲後の「何事もない」（「無一事」）日常を描いたもの。

第一句の「五柳 柴桑の宅」は、注に記した通り陶淵明の故事を借りて南京の町と鍾山の半ばにある自らの住まいを指したもの。その住まいから西をさして進めば、第二句の「三楊 白下の亭」、つまり南京の町の東門があらわれる。「白下亭」はその東門に面した駅亭で、かつて李白が「駅亭 三楊樹、正に白下の門に当る」とうたった場所なのだ。王安石は「東門」（『李壁注』巻 6）と題する作品のなかで「東門 白下の亭、摧巖に寒葩 蔓る。浅沙に素舸を柂ぎ、一水宛として秋蛇のごとし。漁と商と数十室、門巷 桑麻に隠る。翰林なる謫仙人、往歳酒姥の家。調笑す 此の水の上、能く歌う 楊白の花」とうたう。地面を覆う砕いた敷き瓦のうえにはびこる花々。かたわらをうねうねと続く浅い水の流れ。たくさんの商家や漁師のすまい。桑や麻の木。かつてここを謫仙人たる李白が訪れ、酒を飲んだり、楊花の歌をうたったものだ。当時の東門あたりの情景はこの作品においていっそう具体的である。また「和叔に招かるも往かず（和叔招不往）」（『李壁注』巻 42）では「門前の秋水 舳を揚ぐべし、意は有り西のかた白下の亭を尋ねん。只だ欲す 往来して相邂逅せんことを、却って嫌う招喚さること苦だ丁寧なるを」（門前の川からは小船を出すことができるし、白下亭のある市街まで行く気持ちはあるのです。ただ私は興にまかせてたまたま出会ったりするのが好きで、きちんと招かれたりするのはちよいと堅苦しく感じるのです）と述べ、自宅と南京の町のあいだを気ままに行き来していたであろうことが推測される。心の赴くまま、行っては戻り、戻ってはまた出かけて行く。誰にもわずらわされず、誰をわずらわすこともない生活。その日常を「五柳」「三楊」「一事」というお得意のことば遊びを用いつつ、自分の感情に少し距離を置いて淡々と描く。そして、そのような往来の繰り返しのなかにじんわりとただよう叙情、愁いとも喜びともつかない雲をつかむような叙情を、「長得見青青」という最後の一句が掬いとしているようにみえる。先にあげた「東門」の詩に「迢迢たり 陌頭の青、空しく復た鴉を蔵すべし」とあるように、道沿いにはずっと柳の青が続いていたのであろう。あるいは王安石は、自宅と南京の城門のあいだを行き来しつつも、文学化されたもう一つの時空を歩いていたのかも知れない。五本の柳、あれはあれ慕わしい陶淵明が愛したもの。三

本の楊、あれはその昔、かの李白がみつめたに違いないもの。何もない日常、行き路も、帰りの道も、目にはずっと柳の青がみえている。ただそれだけ。確かにそれだけなのだが、そこに何ともいえぬ味わいがあることを詩人は言う。その読後感と同じく「何もない」日常を描いた唐・杜甫の「西郊」(『全唐詩』卷226)「時に碧鷄坊を出で、西郊より草堂に向かう。市橋 官柳細に、江路 野梅香し。……人の来往を覚る無し、疎懶 意何ぞ長き」に通じるものがあるように思う。

制作時期未詳だが、おそらく鍾山隱棲後の作品。

(水津有理)

王安石-19 「移松皆死」

「松を移すも皆死す」

李白今何在

桃紅已索然

君看赤松子

猶自不長年

李すももの白しろきは今いま何いくにか在ある

桃ももの紅あかきも已すでに索さく然ぜんたり

君きみ看みよ 赤せき松しょう子の

猶な自お 長ちやう年ねんならざるを

【収載】

『臨川先生文集』卷26、『王文公文集』卷77(卷73に「李白」と題して重収)

【校異】

題、『王文公文集』卷73では「李白」に作る。

【押韻】

「然」：下平声2「仙」、「年」：下平声1「先」(同用)

【訳】

すももの白い花は今どこに、
桃の紅い花もすっかり消え失せた。
ごらん、かの仙人赤松子ですら、
不老長生の夢かなわぬものを。

【注】

- 李・桃：桃李は、春を代表する華やかな花として、またそれゆえに儂い存在の象徴としてしばしば併称され、これに対する質実・長生の象徴としてよく「松」が対置される。唐・李白「韋侍御に黄裳を贈る（贈韋侍御黄裳）二首」其一（『全唐詩』巻 168）に「願わくば君 長松に学べ、慎みて桃李と作ること勿れ」。
- 索然：尽きてなくなるさま。晋・陸機「歎逝賦」（『文選』巻 16）に「曾て共に一塗に遊び、同に一室に宴せし所、十年の外、索然として已に尽きぬ」。
- 赤松子：いにしえの仙人。『列仙伝』巻上に「赤松子なる者は、神農時の雨師なり」。

【補説】

全体の詩意は、植え替えを試みた松が根付かず、すべて枯れてしまったというものだが、ことばのうえでは様々な遊戯を試みている。ひとつは植物名の詠み込み。一句目に「李」、二句目に「桃」、さらに第三句「赤松子」の名のなかに「松」もみえる。むろん仙人の名として赤松子が選ばれたのも、植え替えようとした「松」にかけてであろう。ここでは「李」「桃」「松」が、それぞれに一句を分かって詠み込まれるわけだが、こうした詠み込みにうかがわれる意識的なことばのあしらいは、「赤松子」の「赤」に準じるように、「李」に「白」、「桃」に「紅」という色彩語を付け加えることによってより強調されている。また色彩語の付加はさらに今ひとつの遊戯をも浮かび上がらせる。神仙「赤松子」の系列に沿って想起される「李白」という詩人の名である。すなわち「李」「桃」「松」という植物名と、「李白」「赤松子」という人物名の、いわばかけことば。「謫仙と称された詩人、李白は今いずこ？——かの仙人、赤松子すら長年の夢のかなわないものを……」（なお収載・校異に示したように『王文公文集』巻 73 では「李白」と題し、詠史詩の一群に本篇を収める）。

華やかな「桃李」の儂さを言うにしろ、また歴史上の人物に詠懐を投げかけるにしろ、いずれも時間の推移や生命の短促を嘆く情調であり、本来重々しいものである。しかし、小松を植えて根付かなかったというテキスト外の現実に戻ると、その小さな出来事と表現の重々しさ（あるいは重々しさの装

い)とのギャップに、そこはかたないユーモアが漂う。この詩にはそうした軽みをこそ読み取りたい。

(和田英信)

王安石-20 「山中」

さんちゆう
「山中」

隨月出山去
尋雲相伴歸
春晨花上露
芳氣著人衣

つき したが やま い さ
月に随いて山を出でて去り
くも たず あいともな かえ
雲を尋ねて相伴いて帰る
しゅんしん かじょう つゆ
春晨 花上の露
ほうき じんい つ
芳氣 人衣に著く

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 71

【押韻】

「歸」「衣」：上平声 8「微」

【訳】

月と一緒に山を出て、
雲間に遊び、仲良く朝帰り。
春の明け方、花卉には露、
花の香りが、着物にふうわりと。

【注】

- 相伴：ともにつれだつ。王安石「適意」(『李壁注』巻 45)「一灯相伴うこと十余年、旧事の陳言幾編かを知らん」。
- 芳氣一句：植物の香りが身にまわりつくこと。『楚辞』九歌「少司命」「菲菲として予を襲う」。

【補説】

「相伴」の相手を起句中の「月」と解したが、素直な対句と読めば、「月と一緒に出かけたり、雲と一緒に帰ったり」と解釈できる。満月に近い月は夕方空

にのぼりはじめ、明け方沈んで行く。王安石はこの月の動きにあわせて自分の精神を雲のある空へと飛翔させ、明け方また地上へと戻ってきたのだと読みたい。すると、後半二句が朝帰りに目撃したすがすがしい情景としてつながりが出てくる。

李壁注は起句について、唐・李白「終南山を下り斛斯山人を過りて宿り置酒す（下終南山過斛斯山人宿置酒）」（『全唐詩』巻 179）から冒頭四句「暮に碧山従り下り、山月 人に随いて帰る。却りて来たる所の径を顧りみれば、蒼蒼として翠微に横たわる」を引く。山を下ると、月が李白のあとをついてきた、というのである。しかし、この詩で、王安石は自らの意志で月のあとについて、しかも空へと移動している。そのため、李白詩のように「山を下る」ではなく、「山を出でて去る」としたのだ。

おそらく熙寧九年（1076）江寧（現在の南京）帰隠以降の作品と思われる。

（佐野誠子）

王安石-21 「送王補之行風忽作因題四句於舟中」

おうほし ゆ	おく	かぜたちま	おこ	よ	しく	しゅうちゅう	だい
「王補之の行くを送るに風忽ち作る因りて四句を舟中に題す」							
淮口西風急	わいこう	せいふう	きゆう				
君行定幾時	きみ	こう	さだ	いくとき			
故應今夜月	もと	まさ	こんや	つき			
未使照相思	いま	あいおも	て				
							未だ相思を照らしめざるべし

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 58

【校異】

「使」、『臨川先生文集』『王文公文集』は「便」に作る。

【押韻】

「時」「思」：上平声 7「之」

【訳】

淮口では西風が強く吹き付けており、
あなたの出発が一体いつになるか分からない。
(この風は) きっと今夜の月に、
あなたを思うわたしの心をまだ照らさせないのだ。

【注】

- 王補之：おうむきゆう王無咎(1024-1069)のこと。補説参照。
- 題：書きしるすこと。詩題に「舟中」とあるから、船内の壁にこの詩を書きつけたのだろう。
- 淮口一句：淮口は、黄河と淮河を繋ぐ運河・通済渠の、淮河に流れ込む地。現在の江蘇省くち盱眙県。そこに船着き場があった。唐・宋之間「初めて淮口に宿る(初宿淮口)」(『全唐詩』巻51)に「晚泊 楚郷に投じ、明月 清淮の裏うち」という。「急」ははやいの意。風が強いこと。李壁注は唐・戴叔倫「戯れに顧十一明府を留む(戯留顧十一明府)」(『全唐詩』巻274)「未だきじょう帰機動かすべからず、前程 風浪急なり」を挙げる。
- 定：疑問詞の前について、いったい、そもそもの意を表す。北宋・蘇軾「王郎昆仲及び兒子の邁と城を遶りて荷花を觀……(與王郎昆仲及兒子邁遶城觀荷花……)」其二(『合注』巻19)に「清風定めて何者ぞ、愛すべくして名づくべからず」とある。
- 故応・未使二句：二句は中国古来の発想、月を通して離れた相手(恋人、家人等)を思う、という構図を踏まえる。李壁注が引用する唐・李白「張舎人の江東に之ゆくを送る(送張舎人之江東)」(『全唐詩』巻175)の「吳洲 如し月を見ば、千里 幸いに相思わん」や唐・杜牧「偶題二首」其二(『全唐詩』巻524)の「只だ明月を見るに因りて、千里 両ともに相思わん」もこの構図を持つ。但し王安石はそこに捻りを加えている。詳しくは補説参照。

【補説】

おうむきゆう王無咎、南城(江西省南城市)の人。字は補之。嘉祐二年(1057)の進士。
そうきやう曾鞏の妹の夫。王安石には「臺州天臺縣令王君墓誌銘」(『王文公文集』巻93。なお『臨川先生文集』巻91は「王補之墓誌銘」とする)がある。それに依れば、王無咎は始め江都県尉、衛真県主簿の任に就き、その後天台県令の職を辞

して王安石と共に長らく勉学に励んだ。やがて生活が困窮した為に南康県主簿の職を得たところ、当時ちょうど京師に召喚されていた王安石が引き留めた。近々京師に学校が開校する為、その教授の職に就かせようとしたのである。しかし正式な辞令が下る前、熙寧二年(1069)に死去。享年四十六。世の知識人たちに慕われたが、他人と交わることなく門を閉ざし読書に励み、ただ王安石とだけ莫逆の交わりを結んだという。

本作品の特徴は後半二句に表れる。古来中国では、どこからでも望める月とは、離れた相手とお互いの心を繋いでくれる存在だと考えられた。早期の例に劉宋・鮑照の「月を城西門の解中に翫ぶ(翫月城西門解中)」(『文選』巻30)「三五二八の時、千里 君と^{とも}同にす」が挙げられる。

だが強風が船の出発を妨害し、今夜は二人一緒に過ごすことになった。つまり、「月を通して離れた相手を思う」という構図を逆手にとって、強風のおかげでまだ一緒にいられる、だから相手への思いを月に託していない、と言うのである。従来表現から脱却した、王安石独自の着想と言えよう。同時に、単に理屈を捏ね回して意表を突くだけではなく、相手との別れを心から惜しむ気持ち込み込められる。本当に別れた後の思いこそが月に託すべきものだから、今の悲しみを抑えているのである。

(加納留美子)

王安石-22 「被召作」

「召^めされて作^{つく}る」

榮祿嗟何及

明恩愧未酬

欲尋西掖路

更上北山頭

えいろく ああ な およ
榮祿 嗟 何んぞ及ばんや
めいおん いま むく は
明恩 未だ酬いざるに愧ず
せいえき みち たず ほつ
西掖の路を尋ねんと欲し
さら のぼ ほくざん いただき
更に上る 北山の 頭

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻71

【校異】

題、『李壁注』では題下に「一本北山」とある。

題、『王文公文集』では「北山」に作る。

【押韻】

「酬」：下平声 18「尤」、「頭」：下平声 19「侯」（同用）

【訳】

栄達や富は求めてどうなるものでもないが、
ただ悔やまれるのは君恩に報いていないこと。
これから向かう朝廷に続く道を一目見ようと、
私は鍾山をその高みへと登っていくのです。

【注】

- 被召：朝廷に召し出されること。
- 榮禄：栄達・名声とそれに伴う俸禄。
- 嗟何及：嘆いても追いつかない、どうにもならない。『詩経』王風「中谷^{ちゅうこく}有^{ゆう}蕕^{たい}」に「^{てつ}啜として其れ泣けり、何ぞ嗟及ばんや」。
- 明恩：賢明なる君主から受けた恩。
- 西掖路：朝廷へと続く道。「西掖」は中書省の別称。唐・鄭畋「中秋の月 禁苑に直す（中秋月直禁苑）」（『全唐詩』巻 557）に「暫く来たる 西掖の路、還た整う 上清の槎」。
- 北山頭：北山の頂。「北山」は江寧（現在の南京）郊外の鍾山を指す。この地で隱遁生活を送った周顥^{しゅうぎょう}を「見かけは隱者のようだが、本心は高い地位を望んでいる」と糾弾した齊・孔稚珪の「北山移文」（『文選』巻 43）で有名。王安石は晩年この地に隱棲した。

【補説】

この詩の制作時期は明らかでないが、詩題に「被召作」とあり、作中に「西掖」「北山」の文字がみえることから、王安石が知江寧府から翰林学士として中央に召されて上京した熙寧元年（1068）、あるいは一旦宰相の職を辞して江寧に戻ったのち復歸した熙寧八年（1075）のいずれかに作られたものと推察することができる。前半二句は、中央に召されて行くにあたり、自らの真意は「榮

禄」を求めることではなく、自分自身を評価して召し出してくれた「明恩」に報いることにあるのだと述べたもの。唐・王之涣の詩句「千里の目を窮めんと欲し、更に上る一層の楼」（『全唐詩』巻 253「鶴雀楼に登る（登鶴雀樓）」）を彷彿とさせる後半二句は、鍾山の高みから江寧の地に別れを告げて朝廷に赴こうという作者の決意を表現したものであろう。

劉辰翁は「北山、陟^{ちよくき}岵の恨なり」と述べて、第四句に亡き母をしのぶ王安石の心情を読み取ろうとしているようだが（「陟岵」は『詩経』魏風「陟岵」^{ちよくこ}「彼の岵^きに^{のぼ}陟りて母を^{せんぼう}瞻望す」にもとづき、母を思う典故として用いられることば）、王安石にとって鍾山は、母の墓所のあるところであり、やがては自らも帰り来る場所、同時にいまは去り行く場所である。このことを踏まえて読むならば、はるか遠くを見通すために高みにのぼるという後半二句の所作の中には、縁の深いこの地を去るにあたり、自らの来し方と行く末を俯瞰しようとする作者のすがた、心情が表現されているとも言えるだろう。

李壁はこの作品について「此の詩、意は君と親とを兼ねて之を言えり」と述べ、王安石が自らの出处進退を明らかにするにあたってその胸の内を君主と身近な人々に述べたという解釈を示している。母・呉氏の喪が明けて後も出仕に応じなかった王安石が治平四年（1067）にまずは知江寧府となったとき、病を理由に久しく出仕に応じなかった者が、ひとたび大郡の知事に任ぜられるやこれを受けたというのなら、それは「君命に対する傲慢であり、いたずらに禄を食んで自らの利益を図る行為だ」という意見があった（北宋・韓維『南陽集』巻 24「王安石を召すを議す筭子（議召王安石筭子）」）。これに限らず、久しく官に就かなかつたものが再び出仕に応じようとするとき、あるいは一旦辞した職を再び拜命しようとするとき、その思惑や事情をとやかく言うことがあったのであろう。李壁の意見は、このような背景にもとづいて王安石の作意を明らかにしようとしたものと思われる。

（水津有理）

王安石-23 「再題南澗樓」

「再び南澗樓に題す」

北山雲漠漠

南澗水悠悠

去此非吾願

臨分更上樓

ほくざん くも ぼくぼく
北山に 雲 漠漠たり

なんかん みず ゆうゆう
南澗に 水 悠悠たり

ここ さ わ ねが あら
此を去ること 吾が願いに非ず

わ 分かるるに 臨み 更に 樓に上る

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 66

【押韻】

「悠」：下平声 18「尤」、「樓」：下平声 19「侯」（同用）

【訳】

北山には、雲が遠くはてしなく広がり、
南澗には、水は尽きることなく流れている。
この地を去ることは、わたしの望みではない。
しかし別れの時がきたのだ、更に上へと樓に登ろう。

【注】

- 南澗樓：江寧（現在の南京）にある。李壁のひく『建康志』では、南澗樓は城南八里にあるという。清・趙宏恩『江南通志』巻 30 では、南澗樓は江寧の城の西南にあるとする。同じく『江南通志』巻 11 には、躍馬澗（またの名、南澗）は府南五里にあり、宋代にはここに南澗樓があったとする。
- 北山：江寧の鍾山をさす。王安石には他にも北山を詠んだ詩が見られるが、多く江寧郊外にある鍾山を指している。王安石-22「被召作」注参照。
- 漠漠：遠くはてしなく広がるさま。五代・韋莊「古離別」（『全唐詩』巻 695）に「晴煙漠漠 柳毵毵、離情を那ともするなし 酒半ば酣なり」とある。
- 悠悠：尽きることなく、絶え間なく続くさま。晋・左思「呉都賦」（『文選』巻 5）に「直に濤を衝きて瀨に上り、常に沛沛として以て悠悠たり」、唐・杜甫「秦州を発す（發秦州）」（『全唐詩』巻 218）に「大なるかな乾坤の内、吾

が道は長く悠悠たり」とある。

【補説】

王安石には他にも「南澗樓」(『李壁注』巻 44)と題する作がある。「再題南澗樓」はその作品を受けての第二作。江寧に於ける作。王安石の本籍は臨川であるが、彼は江寧との縁が深い。江寧にいた時期は長く、深い思い入れがうかがわれる。十七歳の時に父の転勤に伴い移り住んだ地であり、両親の墓をつくった地でもある。また晩年隠棲したのも江寧である。治平二年(1065)四十五歳の時、江寧にて母の喪が明けた王安石は朝廷に召されるが、病気を理由に留まる。治平四年(1067)には翰林学士に除せられるが、この時も江寧に留まる。そして英宗が崩じ神宗が即位し、熙寧元年(1068)王安石はついに上京する。本詩の制作時期は未詳であるが、おそらくはこの熙寧元年(1068)に上京した時期の作、もしくは一旦宰相の職を辞して江寧に戻ったのち再び復歸する熙寧八年(1075)のいずれかに作られたものと思われる。唐・張喬「九華樓晴望」(『全唐詩』巻 639)に「重ねて此の地に來たるは 知んぬ何れの日ぞ、別れんと欲して殷勤 更に樓に上る」とあるように、王安石のこの詩にある「更に樓に上る」という行為は、別れの前にもう一度じっくりとこの土地を眺めて、この目に焼き付けておこうとしてのものであろう。漠漠と広がる雲、悠悠と流れる水を、遠くどこまでも眺めることのできる高い樓に登り、江寧の地すべてを、より遠くまで、より多くと、今一度惜しむように眺める姿がうかがわれる。

(大戸温子)

王安石-24 「南浦」

なんほ
「南浦」

南浦隨花去
迴舟路已迷
暗香無覓處
日落畫橋西

なんほ はな したが き
南浦 花に 随いて 去り
ふね めぐ みちすで まよ
舟を 迴らせて 路已に 迷う
あんこう もと ところ な
暗香 覓むる 処 無く
ひ お がきょう にし
日は 落つ 画橋の 西に

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 71

【押韻】

「迷」「西」：上平声 12「齊」

【訳】

花をたずねて南の浦を離れたが、
船を漕ぎまわっているうちに、すっかり道に迷ってしまった。
かすかな香りをたよりに探しても、花のありかはわからずじまい。
赤々と照らされた橋の向こうに、夕日はゆっくりと沈んでゆく。

【注】

- 南浦：南の水辺。
- 廻舟：船をめぐらせる。「廻」は「めぐる」「まわる」の意。「迴」「廻」「回」の三字は通用する。唐・曹唐「武陵洞に題す（題武陵洞）五首」其二（『全唐詩』巻 641）「溪口 舟を回らせば日 已に昏く、却つて鷄犬の前村に隔たるを聴く」。
- 暗香：どこからともなく漂う花の香り。補説参照。
- 無覓処：探し当てられない。唐・白居易「花か花に非ざるか（花非花）」（『全唐詩』巻 435）「花か花に非ざるか、霧か霧に非ざるか。夜半に来たりて、天明に去る。来たること春夢の如くして幾多なる時、去ること朝雲に似たりて覓むる処無し」。
- 画橋：彫刻や彩色を施した橋。唐・無名氏「絶句」（『全唐詩』巻 786）「緑楊陰転し画橋斜めに、舟に笙歌有りて岸に花有り」。

【補説】

花の香りに誘われて水郷に漕ぎ出した作者は、興にまかせて川をさまよう。水郷の春の一日の情景が、一幅の絵のように繰り広げられる。「興に乗って舟に乗る」故事と言えば、劉宋・劉義慶『世説新語』任誕の王徽之のエピソードが夙に有名であるが、劉辰翁は王安石の詩を評して「渠の興未だ尽きざるに在り」と言う。

『世説新語』のエピソードでは、ある雪の夜、突然載安道に会いたくなった

王徽之は、夜半に船を出して載安道を尋ねるが、門の前まで来たにもかかわらず、会わないで帰ってしまう。その訳を問われて、「興の赴くままに出かけたのであって、興が尽きてしまった後では、載安道に会ってもしかたない」と答えたという。王徽之は「舟をめぐらせて」帰ってしまったが、王安石は「舟をめぐらせて」花の香りを追いかけているうちに、帰る道を忘れてしまう。「南浦」詩における王安石の興は、劉辰翁が指摘するように尽きてはいないのである。

「暗香」はほのかな香り。北宋・林逋の「山園小梅二首」其一（『林和靖先生集』巻2）「疏影横斜し 水清浅たり、暗香浮动し 月黄昏たり」以来、梅の香りの形容に使われることが多いが、梅に限定されるわけではないようだ。たとえば『李壁注』巻43「熊伯通と同一に定林自り悟真を過る（同熊伯通自定林過悟真）二首」其一では、「暗香一陣 風に連なりて起こり、知る薔薇の澗底に花さく有るを」とバラの香りを形容している。唐代の用例では、唐・許渾「故友の旧居を過る（過故友舊居）」（『全唐詩』巻530）の「高竹 疏翠を動かし、早蓮 暗香を飄わす」、唐・羅鄴「滄浪峽に題す（題滄浪峽）」（『全唐詩』巻654）の「暗香 歩を惹いて澗花^{ひら}発く」などがみられる。王安石の「南浦」詩について言えば、「水辺」「路に迷う」「花」というシチュエーションから劉宋・陶淵明の「桃花源記」（『靖節先生集』巻6）が想起される。「暗香」は桃源郷への道しるべとして作用しているのではなかろうか。「画橋」は彫刻や色彩などの手を加えられた橋であるが、水路に架けられた橋であれば、一般生活用のものであったに違いない。ここでは沈む夕日によって色鮮やかに照らし出された橋、と取りたい。

「暗香」に誘われて桃源郷を目指して船を出してみたものの、そこにたどりつけなかった失望感。しかし遅い春の日がゆっくりと暮れようとするとき、沈む夕日は辺りを赤々と照らし出す。桃源郷は目の前にあるじゃないか。外を探し求めて見つからず、求めるものは常に自分の足元にあるのだとは、禅の教えにしばしば言われることである。しかしそれは一心にそれを求めた者にしか体得できない悟りであるだろう。沈む夕日が照らし出したのは橋ばかりでなく、王安石の心それ自体であったに違いない。

詩題の「南浦」は、「東崗」とともに王安石詩中にしばしば登場する。固有の地名と言うより、当地の通称で「南側の水辺」「東にある丘」ほどの意である

う。あるいは王安石がお気に入りの場所を、こう呼んでいたのかもしれない。
『李壁注』巻41にも同名の詩がある。

(三瓶はるみ)

王安石-25 「題定林壁懷李叔時」

「定林の壁に題して李叔時を懷う」	
雲與淵明出	雲は淵明と与に出で
風隨禦寇還	風は禦寇に随いて還る
燎爐無伏火	燎炉 伏火無く
蕙帳冷空山	蕙帳 空山に冷たし

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻63

【校異】

「蕙帳」、『王文公文集』は「蕙帳」に作る。

【押韻】

「還」：上平声 27「刪」、「山」：上平声 28「山」（同用）

【訳】

あなたは雲が陶淵明と一緒に行くように、
風が列禦寇と共に戻っていくように自由な人だった。
炉にはかすかな火も残っていないし、
帳は人気のない山でひんやりとしてしまっているよ。

【注】

- 李叔時：李公麟(?-1106)のこと。北宋の画家。字は伯時。号は龍眠。舒州（現在の安徽省舒州県）の人。熙寧三年(1070)の進士。地方官を歴任したあと、中書門下後省刪定官、御史台を経て、朝奉郎に至った。元符三年(1100)に病のため退官し、龍眠山（現在の安徽省桐城県西北部）に隱棲した。博学で文才・画才があり、仏教に通じ、また多くの奇字を知っており、古銅

器の収集考証に長じていた。伝は『宋史』巻 444。その他『宣和画譜』巻 7、南宋・鄧椿『画繼』巻 3 等にも李公麟に関する記事がみえる。

王安石は、李公麟のことを字の伯時ではなく、叔時あるいは、時叔と記している。北宋・秦觀「晋賢図の後に書す（書晋賢圖後）」（『淮海集』巻 35）に龍眠李叔時とあり、李叔時は李龍眠こと李公麟であることがわかる。

- 定林：鍾山にあった王安石の庵の名。南宋・周応合『景定建康志』巻 17 および 21 には、書斎昭文斎の壁に李公麟による王安石の肖像画が描かれたとある。昭文斎については王安石-7「昭文斎」を、壁に描かれた王安石像に関しては王安石-10「傳神自贊」を参照。
- 雲与淵明出：劉宋・陶淵明「歸去來辭」（『文選』巻 45）に「雲は無心にして岫〔山の洞窟〕を出で、鳥は飛ぶに倦んで還るを知る」とあるのによる。
- 風随禦寇還：禦寇は列子の名。『莊子』逍遥遊に「夫れ列子は風を御して行き、冷然として善し。旬有五日して後に反る」とあるのによる。
- 燎炉：暖を取るための小型の炉。王安石は他の作品でも、定林庵にある炉のことを「燎炉」と記している。王安石「定林院の窓に書す（書定林院窗）」（『李壁注』巻 43）に「竹鷄 我を呼びて華胥より出で、起滅する篝灯 燎炉を擁す」。
- 伏火：炉に残るかすかな火。ただし唐宋代の用例では、丹薬を練るための弱火という意味しか見あたらない。
- 蕙帳：とぼりの美称。齊・孔稚珪「北山移文」（『文選』巻 43）に「還飈の幕に入り、写霧の檻より出ずるに至りては、蕙帳空しくして夜鶻怨み、山人去りて暁猿驚く」とある。鍾山に隠遁していた齊・周顒は、詔に応じて朝廷に仕えるようになり、会稽郡の海塩令になった。「北山移文」はその変節を非難するために書かれた。「北山移文」のこの部分は、周顒が去ってしまったあとの寂しい情景が描かれている。

【補説】

『宣和画譜』巻 7 の李公麟の項目によると、李公麟は、「陶潜歸去來兮圖」及び列子にちなむ「御風真人圖」という絵画を制作している。王安石は、彼の作品を意識して前半の対句を作ったのであろう。また列子の故事には、十五日し

て戻ってきた、とあることから、王安石の李公麟に帰ってきてもらいたいという願いがこめられているのかもしれない。

また同じく『宣和画譜』巻7では、李公麟が鍾山から去るに際し、王安石が四首の詩を作った、との記述がある。この詩は、内容からして、この別れの後に詠まれたものだろう。現存の作品で王安石が李公麟を詠ったものには、他に『李壁注』巻43の「李時叔に示す（示李時叔）二首」がある。

詩題に隠居時の住まい定林庵が出てくることから、熙寧九年(1076)江寧（現在の南京）帰隠以降の作品と考えられる。

（佐野誠子）

王安石-26 「離蔣山」

しょうざん はな
「蔣山を離る」

出谷頻回首

逢人更斷腸

桐郷豈愛我

我自愛桐郷

たに い しき こうべ めぐ
谷を出でて頻りに首を回らし
ひと あ さら だんちょう
人に逢えば更に断腸す
とうきょう あ われ あい
桐郷 豈に 我を愛せん
われおの とうきょう あい
我自ずから桐郷を愛す

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』闕

【押韻】

「腸」「郷」：下平声 10「陽」

【訳】

谷を出て旅立とうとするこの時、いくども後ろを振り返り、顔見知りに出会えば、つらさに胸張り裂ける。

桐郷の人々はわたしを、いとおしんでくれるだろうか、

わたしは、この桐郷に心をのこすばかりなのだが。

【注】

○ 蔣山：桐郷にあった山と思われるが未詳。江寧（現在の南京）の蔣山（鍾山）

とは異なる。

- 出谷：文字通りには谷を出て里に下りることだが、『詩経』小雅「伐木」に「幽谷自り出で、喬木に遷る」とあるのを踏まえ、しばしば人の昇進・栄転をいう。たとえば北宋・王禹偁「太常晁丞の寄せらるるに酬ゆ（酬太常晁丞見寄）」（『小畜集』巻 11）に「当年 布素〔低い身分で〕交情を定むるも、恨むらくは同^{とも}に出谷の鶯と為らざりしを」と。王安石はこのとき舒州^{じょしゅう}での任を終え、みやこ開封に向かうところであった。補説参照。李壁は官のため愛着のある場所を離れることを詠う唐・白居易「草堂に別る三絶句（別草堂三絶句）」其二（『全唐詩』巻 440）の「久しく褐被〔粗末な布団〕に眠りて居士と為るも、忽ち緋袍〔官服〕を掛けて使君と作る。身は草堂を出ずるも心は出でず、廬山 未だ移文を勸するを要せず」を引く。
- 桐郷・我自二句：桐郷は地名。王安石の任地、舒州に属する。現在の安徽省桐城県。前漢の朱邑は、若いころ桐郷の役人として清廉公平な善政をおこなった。その朱邑の遺言に「我故^{もと}桐郷の吏と為る。其の民 我を愛す。必ず我を桐郷に葬れ」（『漢書』循吏伝・朱邑）とあった。二句はこれを踏まえる。

【補説】

皇祐三年（1051）三十一歳の王安石は舒州（現在の安徽省懷寧県）の通判（副知事格）となり、至和元年（1054、三十四歳）任満ちて入朝し郡牧司判官となるまで舒州の地にあった。「桐郷」はその舒州の地名。任地を桐郷の語をもって呼ぶのは、注に引いた漢・朱邑の故事を意識するものであろう。

王安石はのちに、舒州に帰る人を見送る「遜師の舒州に帰るを送る（送遜師歸舒州）」（『李壁注』巻 32）に「亦桐郷の諸父老に見ゆれば、為に伝えよ衰颯して春風に病むと」と詠じ、また元豊元年（1078）舒国公に封ぜられた際には、その「舒国公に封ぜらる三絶（封舒國公三絶）」其二（『李壁注』巻 42）に「桐郷 山遠く復た川長し、紫翠は城に連なり碧は隍に満つ。今日 桐郷 誰か我を愛せん、当時 我自ずから桐郷を愛せしに」と詠っている。桐郷は、若き日の任官地として特別の愛着ある土地であったと思われる。

上に挙げた二つの詩のうち後者の後半部分の原文を示せば、「今日桐郷誰愛我、当時我自愛桐郷」。「今日」「当時」の二字を加え、「豈」が「誰」に改めら

れている以外は、本詩の語をそのまま用いている。そこでは「今日」と「当時」の対比によって時間の経過がもたらした断絶が強調されており、「誰か我を愛せん」には明らかに反語の語気が認められる。一方、本詩の「桐郷 豈に 我を愛せん」の「豈」には、反語の語気のなかにも、疑問あるいはかくあってほしいという願望がささやかに込められているようにも思われる。また「自」字は、他の条件には関わりなく「たとえそうであったとしても」という強調の語気を示すものだが、それはひるがえって第三句の「豈」字に込められた不安・期待を浮かび上がらせてもいるだろう。対となる二句のなか「我」と「桐郷」を対比し、主と客とを入れ替えながら「愛」で結ぶという一見単純な表現ではあるが、「豈」字と「自」字がもたらす意味の揺れが、直截な物言いのなかに微妙な陰影を添えている。

(和田英信)

王安石-27 「江上」

こうじょう
「江上」

江水漾西風

江花脱晚紅

離情被横笛

吹過亂山東

こうすい せいふう ただよ
江水 西風に 漾い

こうか ばんこう お
江花 晩紅 脱つ

りじょう おうてき こうむ
離情 横笛を 被り

ふ す らんざん ひがし
吹き過ぐ 乱山の 東

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 71

【校異】

題、『王文公文集』は「江上五首」其三に作る。

【押韻】

「風」「紅」「東」：上平声 1「東」

【訳】

秋の西風が水面に波紋を広げ、

岸辺の花が散り残る紅の花びらを落とすころ。
 私の思いは横笛の音に乗って、
 高く低くつらなる山々の東まで吹かれてゆく。

【注】

- 西風：秋風。唐・白居易「南浦の別れ（南浦別）」（『全唐詩』巻 441）に「南浦 淒淒として別れ、西風 嫋嫋として秋なり」。
- 江花：水辺あるいは岸辺に咲く花。ここでは蓮のことか。
- 晚紅：季節の終わりの花、盛りを過ぎても名残りの紅をとどめる花びら。唐・呂温「道州途中即事」（『全唐詩』巻 371）に「戯鳥は余翠を留め、幽花は晚紅を吝しむ」。
- 脱：落ちる。劉宋・謝荘「月賦」（『文選』巻 13）に「洞庭始めて波だち、木葉 微く脱つ」。ここでは花びらが静かに散ること。
- 離情：別離の情。梁・任昉「郡を出でて伝舎にて范僕射を哭す（出郡傳舎哭范僕射）」（『文選』巻 23）に「將に乖かんとして別るるに忍びず、以て離情を遣らんと欲す」。
- 乱山：高く低く連なる多くの山々。唐・孟浩然「歳除の夜 懐い有り（歳除夜有懐）」（『全唐詩』巻 160）に「乱山 残雪の夜、孤燭 異郷の人」。

【補説】

秋の物思いをひとつの情景として描いたもの。前半二句は眼前の風景ではなく、心に描かれたものとして書かれたものではないか。主人公がいるとして、彼もしくは彼女はどこかで秋の風を感じながら、その風が水面に静かに波紋を広げているだろうこと、咲き残っていた最後の花びらをしずかに散らせているだろうことを思う。秋の水辺の紅の花は、先人の句に「風蓮 故萼墜つ」（唐・劉禹錫「秋晚 湖城驛の池上亭に題す（秋晚題湖城驛池上亭）」、『全唐詩』巻 354）、「水は紅衣を泛かぶ 白露の秋」（唐・許渾「秋晚 雲陽驛西亭の蓮池（秋晚雲陽驛西亭蓮池）」、同巻 533）などとあるようにハスの花だろうか。いずれにしても、静かに散るその花はひとつの心象風景なのであろう。

後半二句では、その「西風」にのって、花びらが、笛の音が、物思いが、「乱山の東」まで飛んでいく。笛の音が人の思いをかき立てる趣向は唐詩にしばし

ば見られるもので、私たちはたとえば李白の「春夜洛城に笛を聞く（春夜洛城聞笛）」（『全唐詩』巻184）の「誰が家の玉笛ぞ暗に声を飛ばす、散じて春風に入りて洛城に満つ。此の夜曲中に折柳を聞けば、何人か起さざらん故園の情を」を思い起こすことができる。ここでも「横笛」の音は、川面を揺らす西風に吹かれて広がり、物思ふ人の耳に届くのであろう。「離情」は「私の思い」とだけ訳出したが、遠い友人や恋人と別れゆく悲しみとも、なつかしい土地を想う気持ちとも読めるだろう。むしろあまり特定せずに読むほうが作意に適っているように思われる。唐・姚合はこの「離情」を「離情 落葉に同じ、晩に向かいて更に紛紛たり」（「宋慎言を送る（送宋慎言）」、『全唐詩』巻496）と散りゆく落ち葉にたとえ、また許渾は、秋風とともに一つの情緒がしっとりと空間をみたしていくさまを「西風に帆勢軽く、南浦に離情遍し」（「同年崔先輩を送る（送同年崔先輩）」、同巻528）とうたった。王安石の結びの一句は、笛の音にかきたてられた「離情」が風に吹かれて行くことを言いながら、風に乗って飛んでゆく「晩紅」の花びらの幻想を眼前に見せて印象的。

（水津有理）

王安石-28 「春雨」

「春雨」

苦霧藏春色

くむ しゆんしよく かく
苦霧 春色を蔵し

愁霖病物華

しゅうりん ぶつか や
愁霖 物華を病ましむ

幽奇無可奈

ゆうき いかん な
幽奇 奈ともすべき無く

強醺一杯霞

し のみほ いっぱい かすみ
強いて 醺す 一杯の霞

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻72

【校異】

題、『王文公文集』は「春雨二首」其二に作る。

【押韻】

「華」「霞」：下平声 9「麻」

【訳】

深い霧は鮮やかな明るい春の彩りをおおい隠し、
鬱々とした長雨が爛漫の春を駄目にしてしまう。
朧にくすんだ趣をどうしてくれようと思ってはみるものの、
せいぜいこの盃いっぱい霞を飲み干すことしかできはしない。

【注】

- 苦霧：霧が深いこと。劉宋・鮑照「舞鶴賦」（『文選』巻 14）に「巖巖たり苦霧、皎皎たり悲泉」とあり、五臣注は、冷たい霧が万物を損なうので「苦」というのだと説明している。これは『春秋左氏伝』昭公四年の伝「春に凄風無く、秋に苦雨無し」に対する晋・杜預の注に「長雨は人を苦しませるものである」とあることを下敷きにした注であろう。さらに唐・孔穎達の正義には「味に甘い苦いの区別はないが、万物を養い育めば甘雨であり、万物を害し損なえば苦雨なのである」とある。王安石の詩でも「苦霧」は生命力に溢れた鮮やかな春の景物を損なうものとして用いられている。
- 春色：春の景物。花や新緑など、生命力に溢れる鮮やかな色彩が連想される。唐・李白「檣を詠ず（詠檣）」（『全唐詩』巻 183）に「園花芳年に笑き、池草春色に艶たり」とある。
- 愁霖：いつまでも降り続き、憂鬱な気持ちにさせるような長雨。多くは秋の長雨を指すがここでは春の長雨。魏・曹丕（『全魏文』巻 4）、魏・曹植（『全魏文』巻 13）、後漢・応瑒（『全後漢文』巻 42）には晩秋の長雨の中での行軍を描く「愁霖賦」がある。
- 病：しおれる、かれる。そこなう。
- 物華：美しい景色。唐・孟浩然「清明の日 梅道士の房に宴す（清明日宴梅道士房）」（『全唐詩』巻 160）に「林に臥して愁春尽き、軒を開きて物華を覧る」とある。
- 幽奇：静かで趣き深い美しさがあること。ここでは、鮮やかで生き生きとした春の景物が霧や霖に閉ざされて、朧に霞んで見えることをいう。唐・皮日休「陳先輩故居」（『全唐詩』巻 613）に「襄陽無限煙霞の地、幽奇の此の似く殊なるを覓め難し」とある。

- 無可奈：いかに処置することもできない。
- 霞：霞は仙人の食べ物とされる。唐・孟浩然「王昌齡と王道士の房に宴す（與王昌齡宴王道士房）」（『全唐詩』巻 159）に「霞を酌みて復た此に対すれば、宛も蓬壺に入るに似る」とある。補説参照。
- 醞：のみほす、飲みつくす。

【補説】

校異に示した通り、『王文公文集』では「春雨二首」其二に作る。其一は『李壁注』巻 44 所収の七絶「春雨」。

「苦霧」「愁霖」は秋や冬の詩賦に多く見られるモチーフであり、寒々しい景物、冷たく湿った空気の感触などをまざまざと呼び起こす語である。だが、王安石は爛漫の春を閉じこめるものとして用いている。そこには身を切るような寒さはない。ただ、詩人は、眼前に広がっているはずの色鮮やかな生命力に満ちた春の景物を想像しながら、もどかしい思いに囚われている。

ここに生きてくるのが結句の「霞」である。「霧」「霖」という文字からの連想として違和感なく用いられるこの文字は、仙人の食べ物としても知られている。その霞を食らいつくしてしまえば、霧に閉ざされた春の景色を取り返すことができる。だが、詩人にはそんなことはできるはずがない。できるとすればせいぜい「一杯霞」を飲み干す程度である。この霞とは具体的には酒を指すのであろう。白く濁った酒は霞を連想させる。李壁注が「一杯霞とは酒のことである。流霞九醞という酒がある」と解説しているように、実際に「霞」という文字を冠した酒は当時広く知られていたようである。しかしその酒を飲み干したところで、霞が晴れるわけでもない。愁いが晴れるわけでもない。詩人はそのもどかしさを心のどこかで楽しみながら、霧雨の向こうに霞む春の爛漫たる景色を想像し、一人、霞を飲み干していたのではないだろうか。

(高芝麻子)

王安石-29 「歸燕」

「歸燕」

馬上逢歸燕
知從何處來
貪尋舊巢去
不帶錦書回

ばじょう きえん あ
馬上 歸燕に逢う
し いず ところ き
知んぬ 何れの 処より来たるかを
むさば きゆうそう たず さ
貪りて旧巢を尋ねんとて去り
きんしよ お かえ
錦書を帯びて回らず

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 77

【校異】

「回」、『臨川先生文集』は「廻」に作る。

【押韻】

「来」：上平声 16「咍」、「回」：上平声 15「灰」（同用）

【訳】

旅の馬上で、この地に帰って来た燕と出逢った。
いったいどこから帰ってきたのであろうか。
自分の旧巢を一心に探しているその燕は、
家族からの手紙をわたしに届けてはくれなかった。

【注】

- 馬上：多く旅の途中にあることを指す。唐・岑参「京に入る使いに逢う（逢入京使）」（『全唐詩』巻 201）に「馬上相逢うも紙筆無く、君に憑りて語を伝えん 平安を報ぜよ」とある。
- 歸燕：南の地から、または北の地から帰ってきた燕。燕や雁などの渡り鳥は、多く遠くにいる人へ手紙を運ぶ使者として詩の中に使われている。唐・顧況「悲歌六首」其二（『全唐詩』巻 265）に「紫燕 西に飛びて書を寄せんと欲するも、白雲何れの処にか客に逢い来たらん」とある。
- 錦書：錦字書。離れた地にいる夫婦が相手に送る手紙。前秦の竇滔の妻蘇氏が、遠方の任地にいる夫を思い、錦に文字を織り込んで手紙を送ったことに

由来する（『晋書』列女伝・竇滔妻蘇氏）。

【補説】

旅の途中にある主人公とは逆に、自分の古巣の地へと帰ってきた燕。その燕を見て故郷へと思いをよせる主人公と、一方で彼には目もくれずにいなくなってしまった燕が対比される。二者の鮮やかな対比が、「錦書を届けてくれなかった」と燕に恨み言をいう主人公の気持ちを後押しする。

李壁は、この詩は北宋・鄭毅夫（1022-1072）の作との説もあると指摘する。

（大戸温子）

王安石-30 「和惠思波上鷗」

「えし はじょう かもめ わ惠思の波上の鷗に和す」

翩翩白鷗鷗	<small>へんべん</small> 翩翩 <small>はくふおう</small> たり白鷗鷗
汎汎水中游	<small>はんはん</small> 汎汎 <small>すいちゆう</small> として <small>あそ</small> 水中に遊ぶ
西來久不見	<small>にし き</small> 西に <small>ひさ</small> 来たりて <small>み</small> 久しく見ず
夢想在滄洲	<small>ゆめ おも</small> 夢に <small>そうしゆう</small> 想う <small>あ</small> 滄洲に在るを

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 77

【押韻】

「游」「洲」：下平声 18「尤」

【訳】

パタパタと翼をはためかせながら空を飛ぶ白い野鴨や鷗たち。

プカプカと川で遊んでいる。

西の方から来てからというもの、長らくお会いしていませんが、

俗塵を離れた水辺におられるあなたを、夢に見るほど懐かしく思っています。

【注】

○ 惠思：僧侶の名。補説参照。

○ 翩翩・汎汎二句：「翩翩」は鳥が羽をはばたかせて飛ぶさま。「汎汎」は水に

浮かび漂うさま。「鳧鷖」はカモとカモメ。「鳧」はカモ、野鴨。いずれも水辺に生息する白い鳥。補説参照。

- 滄洲：水辺。また、隠者の住む場所。東の海にあると言われた仙境のこととも言う。晋・阮籍「鄭沖の為に晋王に勧むるの牋（爲鄭沖勸晋王牋）」（『文選』巻40）「今大魏の徳、唐虞より光^{かが}やき、明公の盛勲、桓文を超ゆ。然る後滄洲に臨みて支伯に謝し、箕山に登りて許由を揖すれば、豈に盛んならずや」。

【補説】

詩題にいう恵思は余杭の人で、詩文をよくした僧侶。同門の恵勤^{えごん}和尚は歐陽脩と長年に及ぶ交わりがあった。恵思、恵勤ともに王安石、蘇軾・蘇轍兄弟ほか、司馬光、梅堯臣といった詩人たちと親交を結んでいたらしい。『全宋詩』には、二人に関した詩が二十首ほど採録されており、うち六首が王安石、五首が蘇軾・蘇轍兄弟の作品である。王安石に「僧恵思の銭塘に帰るを送る（送僧恵思歸銭塘）」（『李壁注』巻48）、蘇軾に「臘日孤山に遊びて恵勤・恵思の二僧を訪う（臘日游孤山訪恵勤恵思二僧）」（『合注』巻7）の詩があり、恵勤と恵思は杭州孤山に住んでいたこと、二僧は杭州と金陵を行き来していたらしいことがわかる。王安石も恵思の住まいを訪れたことがあったに違いない。この詩では恵思の住まいを仙境にたとえ、清らかな生活へのあこがれを述べる。

一、二句、水辺の鳥を描写して、世俗を超えた世界を提示する。『楚辞』「卜居」は「將た汜汜として水中の鳧の若く、波と上下して、偷^{いやし}くも以て吾が軀^みを全うせんか」と、水鳥の姿に水（世俗）に逆らわない生き方を暗示するが、『列子』黄帝では、カモメは人の心を敏感に察知して、邪悪な心を抱いた人間のそばには寄って来ない。何物にも束縛されない自由な境地を象徴する。四句目の「滄洲」は、水辺によって導かれる。滄洲には有徳の隠者が住むといい、注に挙げた晋・阮籍の「爲鄭沖勸晋王牋」に「滄洲に臨みて支伯に謝す」とある。支伯とは聖王・堯が位を譲ろうとした人物で、「心の病い」を理由に禅譲を断ったという（『莊子』讓王）。

王安石が古の隠者に比した恵思について、蘇轍にもその人物を評した詩がある。蘇轍の「張惕山人は即ち昔の所謂恵思師なり 余旧之を京師に識る 忽ち来

たりて相訪なうに茫然として復た省しらず 徐ろに自ら其の故を言う 戯れに二小詩を作りて之に贈る（張惕山人即昔所謂惠思師也余舊識之於京師忽來相訪茫然不復省徐自言其故戲作二小詩贈之）二首」（『欒城集』卷 14）では、其一で「昔日の高僧今白衣、人生の変化定めて知り難し」と詠い、其二で「酔吟して清湖水を揮弄す、誰か信ぜん従前戒律の人なるを」と詠う。ここから、惠思が僧侶から道人に転籍した、物事にとらわれない人物であったことがわかる。惠思の自由闊達な生き方、世俗を離れた生活は、王安石が敬愛するところであったのだろう。

王安石にはまた、絵画の名手として有名な僧侶・惠崇の絵に題した「純甫 僧惠崇の画を出して予に詩を作るを要む（純甫出僧惠崇畫要予作詩）」（『李壁注』卷 1）の「鳧雁静かに立ち儔ちゅうりよ侶ひきいを将る」や、王安石-54「惠崇畫」の「滄洲の趣を断取す」などがあり、あるいは惠崇の絵がこの詩のイメージであるかもしれない。

（三瓶はるみ）

王安石-31 「秣陵道中口占二首」其一

まつりょうどうちゅう こうせん
「秣陵道中 口占」

經世才難就	けいせい さいな がた 経世 才就し難く
田園路欲迷	でんえん みちまよ ほつ 田園 路迷わんと欲す
慙慙將白髮	いんぎん はくはつ も 慙慙に白髮を將ちて
下馬照清溪	うま お せいけい て 馬より下りて清溪に照らす

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』卷 74

【校異】

「清」、『臨川先生文集』は「青」に作る。

【押韻】

「迷」「溪」：上平声 12「齊」

【訳】

世を治めるには才に乏しく、
 田園では路を見失いがち。
 しみじみとこの白髪を、
 馬からおりて澄んだ水辺に映しみる。

【注】

- 秣陵：江寧（現在の南京）のこと。
- 口占：口をついて出るまま即興で詩文を作ること、またその作。
- 経世：世を治める。唐・陳子昂「感遇詩三十八首」其十一（『全唐詩』巻 83）に「経世の道を囊括し、身を遺てて白雲に在り」。
- 田園：いなか、あるいは故園。補説参照。
- 慇懃：心をこめる。丁寧なさま。韻の語で、慇懃・殷勤に同じ。魏・曹植「白馬王彪に贈る（贈白馬王彪）」（『文選』巻 24）に「何ぞ必ずしも衾幃きんちゆうを同ともにして、然る後に慇懃を展べんや」。
- 下馬：馬を下りる。行程の終了、あるいは次の動作に移る前の停頓を表す。唐・王維「送別」（『全唐詩』巻 125）に「馬より下りて君の酒を飲み、君に問う何所いづくにか之ゆく」。

【補説】

「秣陵」は、注にも挙げたように江寧（現在の南京）のこと。ほかの地での職務を終えて帰るときのことではなく、江寧にて官にあったある日の帰路を詠ったものとひとまずとる。王安石は、嘉祐八年（1063、四十三歳）より服喪のためこの地にあり、その後、治平四年（1067）知江寧府に除せられ、熙寧元年（1068）にいたって上京するまで江寧にとどまる。また熙寧七年（1074、五十四歳）宰相を一時辞して知江寧府として着任する。制作時期はそのいずれかであろう。

「経世」と「田園」、「白髪」と「清溪」。コントラストが詩を組み立てる。「田園路」は今たどりつつある家路であると同時に、郷野での隠棲へと主人公を導く路でもあるだろう。劉宋・陶淵明「歸去來辭」（『文選』巻 45）に「帰りなんいざ、田園將あに蕪れなんとす、胡なんぞ帰らざる」と。しかし「経世」と「田園」と

いうこの一見分かりやすいコントラストは、その単純な対比を描こうとするものではなく、両者のあいだに揺れる複雑な心理・境涯をいうものとしてある。

詩人は官界における自己に満足出来ないのだが、かといってそれを捨て隠棲するという方途にも踏み出せない。一方を肯定し他方を否定するというすっきりとした抒情ではない、宙吊りの、それ故に深く重い思いを、直接のことばではなく、「清溪」にみずからの「白髪」を映すという仕草のなかに投影する（あえて読みこめば、「清溪」は「田園」での隠棲を象徴し、また「白髪」は官途における疲弊を物語るものであろう）。末句「下馬」は行程の終了もしくは中断。ここでは後者。あらたまった思い入れを表す動作であり、第三句の副詞「慙慙」と呼応する。

(和田英信)

王安石-32 「秣陵道中口占二首」其二

まつりょうどうちゆう こうせん
「秣陵道中口占」

歳熟田家樂

秋風客自悲

茫茫曲城路

歸馬日斜時

さいじゆく でんかたの
歳熟 田家樂しみ
しゅうふう きやくみずか かな
秋風 客 自ら悲しむ
ぼうぼう きよくじょう みち
茫茫たり 曲城の路
きば ひなな ととき
歸馬 日斜めなる時

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻74

【押韻】

「悲」：上平声6「脂」、「時」：上平声7「之」（同用）

【訳】

秋の実りに農民たちは喜び、
秋の風に旅人の心には覚えぬ悲しみが生まれる。
ぼんやりとはるかに続く曲城へのみち。
馬に乗って帰り行くこの斜陽のとき。

【注】

- 歳熟：その年の穀物などが実ること。秋の実り。唐・白居易「正月十五日夜月」（『全唐詩』巻 443）に「歳熟人心楽しみ、朝遊復た夜遊」とある。
- 田家：田舎家。農家。
- 茫茫：ぼんやりとしていること。唐・貫休「洛陽の塵（洛陽塵）」（『全唐詩』巻 826）に「昔時昔時洛城の人、今は作す茫茫洛城の塵」とある。
- 曲城：李壁は秣陵にある地名であるとする。また『李壁注』巻 33 にみえる「山を過ぎる 即事（過山即事）」にも「曲城の丘墓に心は空しく折れ、塩歩の庭闌に眼は穿たんと欲す」とあり、これも南京を描く詩であるが、李壁は曲城を王安石の墓所としている。

【補説】

詩人は其一にみえたように、隠遁に心惹かれつつ官に在る疎外感に複雑な想いを抱いている。そんな詩人の所在のなさを表した語が「客」という自己言及であろう。「客」である彼の悲しみは、秋風によってより深く自覚される。まして収穫の喜びに満ちた農村を前にすれば、ますますその孤独は募るに違いない。詩人は、いかんともしがたいその想いを抱いて帰路を行く。眼前に広がるのは、曲城に続く道である。「茫茫」との語から喚起される、広大で掴み所なくぼんやりとしたイメージは、「曲」という文字と相まって、やるせなさを募らせる。李壁の注にみえる通り、曲城が王安石（あるいはその親族）の墓所であるのだとすれば、曲城に続く道は、己の人生そのものに重なってくるのかもしれない。馬に乗って帰って行く場所はもちろん彼の家である。だが、己の人生の夕暮れに馬の背に揺られながら、これからの人生の旅路、そしてその旅の終焉を心に思わずにはいられなかったのではないだろうか。其一にもみえた老いの気配と、この詩にみえる墓地へと通じる道とは響きあうものであろう。そしてそれらは生命力に溢れた秋の農村の喜びと鮮明なコントラストをなしている。

制作時期については其一の補説参照。

（高芝麻子）

王安石-33 「次青陽」

「青陽に次る」

十載九華邊

歸期尚眇然

秋風一乘傳

更覺負林泉

じっさい きゅうか へん
十載 九華の辺
き き な びようぜん
歸期 尚お眇然たり
しゅうふう ひと でん の
秋風 一たび伝に乗らば
さら おぼ りんせん そむ
更に覚ゆ 林泉に負くを

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 72

【校異】

題、『王文公文集』では「次青春」に作る。

【押韻】

「辺」：下平声 1 「先」、「然」「泉」：下平声 2 「仙」（同用）

【訳】

九華山のふもとで仕事に携わって、もう十年。

いつになったら故郷に帰れることやら。

秋風に追われるように、また馱馬に乗って次の任地へと旅立ってしまえば、ますます隠遁生活から遠のいてしまう。

【注】

- 青陽：青陽は現在の安徽省池州市青陽県。
- 九華：九華山のこと。安徽省池州市青陽県にある。地藏菩薩の霊場として知られ、峨眉山（普賢菩薩）、五台山（文殊菩薩）、普陀山（観音菩薩）とともに中国四大仏教聖地の一つ。古くは九子山と称した。九つの峰を蓮の花弁（蓮華）に見立てたことから「九華」の名がついたという。
- 歸期：帰る日。多くは故郷に帰る日を指す。ここでは故郷に帰って隠棲すること。唐・岑参「安西館中にて長安を思う（安西館中思長安）」（『全唐詩』巻 198）「家 日の出ずる処に在り、朝来たれば東風起つ。風 帝郷従り来たる、家信の通と異ならず。……郷路は天外に眇たり、歸期は夢中の如し。遙かに

長房の術に憑り、天山の東を縮めんと為さん」。

- 乗伝：馭馬に乗ること。「伝」は古代の馭馬車（四頭仕立ての馬車）。広く使用者が乗る車を指す。五代・韋莊「関に入るを夢む（夢入関）」（『全唐詩』巻 697）「夢中伝に乗りて関亭を過ぎ、南のかた蓮峰を望めば簇簇として青し。馬上正に吟ず帰り去る好しを、覚め来たらば江月 前庭に満つ」。
- 林泉：山林と泉石の意で、隠遁の場所を指す。『旧唐書』隱逸伝・田遊巖の伝に「林泉の意に会うにかな遇う毎に、輒ち留連して去る能わず」とある。また、「林泉約」「林泉計」は隠遁の心積もりをいう。唐・白居易「歳暮」（『全唐詩』巻 430）「名宦の意〔名声と出世への欲〕已みぬ、林泉の計何い如せん。東林寺の近く、溪辺に一廬を結ばんと擬す」。

【補説】

王安石は皇祐三年（1051）舒州通判に任じ、至和元年（1054）に京師に上り、嘉祐二年（1057）に知常州となっている。嘉祐三年（1058）二月に江東刑獄に転じ、その年十月に朝廷に召されており、この間南と北を行き来しつつ現在の安徽省・江蘇省のあたりで過ごした。ちょうど、九華山をはさんで舒州（現在の安徽省懷寧県）は西側、常州（現在の江蘇省常州市）は東側にあたる。「十載」とは、十年近い歳月を九華山の付近で過ごしたことによるものであろう。この詩が作られたのが朝廷に召し出された頃であるとすれば、嘉祐三年の秋頃となる。

「十載」は十年の意であるが、ここでは時間の長さを強調し、作者が長引く役人生活に倦み疲れていることを暗示する。「秋風」は漢・武帝「秋風辭」（『文選』巻 45）以来、自然の移ろいと人間の衰退（老い）の表現として繰り返し用いられてきた。この詩でも、「秋風が吹く季節」と、「老いが近づく時期」の、双方に掛かるものであろう。「一」は「いったん……すると」の意。ひとたび朝廷から転任の命が下れば、すぐまた新たな任地へと赴かなければならない。「十」「九」「一」と配された数字が、命ぜられるままに各地を転任する役人生活のやるせなさを効果的に表している。

（三瓶はるみ）

王安石-34 「代陳景初書于太一宮道院壁」

「陳景初に代わりて太一宮道院壁に書す」
官身有吏責 官身 吏責有り
觸事遇嫌猜 觸事 嫌猜に遇う
野性豈堪此 野性 豈に 此れに堪えん
廬山歸去來 廬山歸去來

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 76

【校異】

題、『李壁注』には「初」字の下に「一作元」とある。

題、『臨川先生文集』では「代陳景元書于太一宮道院壁」に作る。

題、『王文公文集』では「代陳景文書」に作る。

【押韻】

「猜」「来」：上平声 16「哈」

【訳】

官として仕える身は責任重大で、
仕事のたびに疑いやら嫉みに遇う。
野を愛するわたしはこの任には堪えぬ、
帰ろうではないか廬山へ。

【注】

- 陳景初：人名。陳景元の誤りである可能性がある。補説参照。
- 太一宮：太一神を祀る宮殿。『続資治通鑑』熙寧六年(1073)四月の項によれば、陳景元は中太一宮の宮主となったという。
- 吏責：官吏としての責任。王安石「玉補之に寄す(寄王補之)」(『李壁注』巻 25)にも「吏責は真に塞ぎ難く、聊か泮水の游を為す」として、「吏責」の語がみえる。「責を塞ぐ」とは責任を果たすこと。
- 觸事：折に触れる。または職務を担うこと。

- 嫌猜：嫌疑。
- 野性：自然や、田野での生活を愛する心。唐・錢起「幽居して春暮に懷を書す（幽居春暮書懷）」（『全唐詩』卷 239）に「自ら晒う鄙夫野性多しと、貧居数畝にして半ば湍に臨む」とある。
- 廬山：山の名。現在の江西省にある。劉宋・陶淵明が隱遁した場所としても知られる。

【補説】

校異に挙げたように、詩題の人名はテキスト毎に異なっている。清代の注釈者である沈欽韓は、この詩に出てくるのは道士であることから、陳景元に作るべきであるとしている。『宣和書譜』や北宋・楊傑「歸來堂賦」（『無為集』卷 1）などからも、沈欽韓の指摘通り、陳景元に作るのが妥当であろうと思われる。この陳景初、陳景文の経歴などは未詳であるが、陳景初については、王安石には他に「陳景初を送る（送陳景初）」との詩が二首あり（『李壁注』卷 40〔すなわち王安石-45〕と卷 47）、陳景初という名の医者と親交があったことが伺える（王安石-45「送陳景初」参照）。

陳景元は、北宋の道士で字は太虚。自ら碧虚子と名乗る。神宗に厚遇され、真人の号を賜る。

『宣和書譜』卷 6 杜衍詩の項によれば、北宋の道士陳景元が廬山に帰るにあたり、王安石に「わたしはもともと田舎者であるが、今は役所勤めをしていて官吏としての責任もあり、仕事のたびに疑われたり妬まれたりしている。廬山に帰るに越したことはない（本野人、而今爲 官身有吏責、觸事遇嫌猜、不若歸廬山爲佳耳）」と語り、王安石はその言葉を聞いてこの詩を作ったという。

この詩の面白味は、陳景元が口にした言葉をそっくり使っている点である。「吏責」という語は『全唐詩』にはみえず、北宋以降、詩での用例がみえ始めるので、詩語としては比較的新しいものではないかと思われる。陳景元の言葉から「官身吏責有り、触事嫌猜に遇う」の二句をそっくり詩の中に取り込むことは、単に発想の斬新さだけでなく、詩的でない日常的な言い回しを詩に作り為してしまう王安石の手腕をも、当時の人々に印象づけたに違いない。

話し言葉を詩へと変化させる原動力は、陳景元が「廬山に帰るを佳と為すに

し
若かざるのみ」と述べた結びの一言を、「廬山歸去來」と作り変えた点であろう。劉宋・陶淵明「歸去來辭」（『文選』巻45）には「帰ろうではないか。田園は荒れ果てようとしている。なぜ帰らないのか」と、故郷の廬山に帰ってゆくことが歌われている。陶淵明の辞の題及び冒頭句、そして、陶淵明ゆかりの廬山という地名を踏まえて、王安石はこの「歸去來」との詩句を用い、詩の結びとしたのだろう。「本野人」と述べていた陳景元の謙遜が、宮仕えに閉口して職を辞した陶淵明に重ね合わされて、「野性豈堪此」という転句となり、そこから自然に「歸去來辭」に結びつく。それにより陳景元の言葉が詩として立ち現れてくるのである。

さらに、北宋・楊傑（号は無為子。陳景元の友人）「歸來堂賦」（『無為集』巻1）の序にも、王安石が陳景元の言葉から詩を作ったとのエピソードとともにこの詩を引く。楊傑はその詩について「陶淵明が『歸去來辭』を作って廬山に帰って以来、八百年が経ったが、その辞もその精神も引き継がれている云々」と感嘆し、「歸來堂賦」を作り陳景元に贈ったという。この序文から、楊傑が王安石の詩を踏まえ、陳景元を陶淵明になぞらえてこの賦を作ったことが分かる（ただし、楊傑の序文では陳景元は廬山に帰ることを許されなかったとされている）。この賦は「君はどうして大丞相（王安石）の作った詩を歌わないのか。役人の重責から逃れ出て、廬山に帰り去ることに何の疑問があらう」と結んでおり、王安石の詩に完全に寄りかかった作品であると言える。王安石の詩と楊傑の賦とは、陶淵明の辞、陳景元の言を踏まえて、文体を越えて作り為された、興味深い言語遊戯であると言えよう。

なお、王安石詩の成立年については、『宣和書譜』が陳景元の廬山に帰った年を己卯としているのに従えば、王安石十八歳当時（宝元二年、1039）の詩ということになる。だが、陳景元が神宗（在位1068-1085）に重く用いられ、また中太一宮主になったのが熙寧六年（1073）であること、王安石が楊傑に大丞相と呼ばれていることから（王安石が宰相であるのは熙寧二年から熙寧九年）、己卯は誤伝であろう。あるいは乙卯（熙寧八年）の誤りかもしれない。熙寧七年春、王安石はひとたび江寧府（現在の南京）に出たが、熙寧八年二月に宰相に復職する。しかし熙寧九年には政治闘争に疲れ、また息子の死に打ちのめさ

れて、彼は完全に政界を引退する。その宰相への復職時期である乙卯の年に当該詩が詠まれたのであれば、王安石の陳景元への共感は一層深かったに違いない。

(高芝麻子)

王安石-35 「山雞」

さんけい
「山雞」

山雞照淥水
自愛一何愚
文采爲世用
適足累形軀

さんけい ろくすい て
山雞 淥水に照らす
みづか あい いつ なん おろ
自ら愛するは一に何ぞ愚かなる
ぶんさい よ もち
文采 世に用いらるれば
ただ けいく るい た
適 形軀を累するに足るのみ

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 64

【校異】

題、『王文公文集』は「金陵絶句四首」其四に作る。

【押韻】

「愚」「軀」：上平声 10「虞」

【訳】

山雞は自らの姿を清らかな水に映す、
うっとりしちゃって、本当におばかさんだね。
その美しい羽模様が用いられても、
からだを損なうだけだよ。

【注】

- 山雞：姿がニワトリに似た鳥。羽の模様が美しい。
- 淥水：澄んだ水。唐・李白「秋浦歌十七首」其三（『全唐詩』巻 167）「秋浦錦駝の鳥、人間天上稀なり、山雞淥水に羞じ、敢えて毛衣を照らさず」の表現を意識している。

- 自愛：ここでは、山鶏が自分の羽の美しさを愛でるために、姿を水に映すこと。晋・張華『博物志』巻4の「山鶏美毛有り、自ら其の色を愛す。終日水に映し、目眩^{くら}みて則ち溺れ死す」との記述をふまえる。
- 文采：模様。転じて詩文の才の比喻にも用いられる。王安石「信陵坊に籠山樂官有り（信陵坊有籠山樂官）」（『李壁注』闕、『臨川先生文集』巻12）では、籠に入れられた鳥を詠い「都門市井の児、誰か汝の文采を翫^めでん」とある。
- 世用：世の中でよく使われること。
- 累形軀：体を疲れさせる、そこなうこと。唐・韓愈「張僕射に上す第二書（上張僕射第二書）」（『韓昌黎文集』巻3）に、「小なる者は面目を傷^{やぶ}り、大なる者は形軀を^{そこな}残う」との表現がある。王安石「老嫌」（『李壁注』巻41）は「老嫌智巧にして形軀を累し、田翁に就かんと欲するも破除を学ぶ」とある。

【補説】

山鶏を題材とした詠物詩である。その根底にあるのは注にあげた『博物志』の山鶏がその姿を水面に映し出したあげく、溺れ死んでしまったという説明である。同じく注にあげた李白の詩も『博物志』を踏まえているが、李白詩では、山鶏が秋浦錦駝の鳥よりも模様が劣ることで、水に姿を映さないとしているのにたいし、王安石は、『博物志』と同方向に、自らの姿にうっとりするナルシズムを詠み上げ、後半で嫌みたっぷりの皮肉を言う。

詩の文字上の内容は山鶏の羽の模様についてであるが、「文采」の語は、文章の彩の意味も込め、才気を代表させているかもしれない。その場合、才気をひけらかして目立っても、それによっていいことはあまりない、才故に身を損なうこともある、という若い人への警告とも読める。あるいは、名文家でありながら、政治的には浮き沈みの激しかった王安石自身について自虐的に詠っているのかもしれない。

『王文公文集』では「金陵絶句四首」のうちの一首としてとられているが、他の三首は七言絶句であり、「山雞」は、形式・内容ともに他三首と異なる。「金陵絶句」に取られていることが確かであるのならば、江寧（現在の南京）隠棲後、熙寧九年（1076）以降の作品と考えられる。そうでなければ、内容面から若い時の作品ではないように思えるが、制作時期を推定するのは難しい。

(佐野誠子)

王安石-36 「雑詠四首」 其一

ぎつえいよんしゅ
「雑詠四首」

故畦抛汝水

新壟寄鍾山

爲問揚州月

何時照我還

こけい じよすい なげう
故畦 汝水に 抛 ち
しんろう しょうざん よ
新壟 鍾山に 寄す
ため と ようしゅう つき
為に問う 揚州の月
いず と き われ かえ て
何れの時か 我の還るを 照らさん

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 75

【校異】

題、『王文公文集』は「雑詠絶句十五首」其十一に作る。

【押韻】

「山」：上平声 28 「山」、「還」：上平声 27 「刪」（同用）

【訳】

汝水のほとりのもとのふるさとを出て、

鍾山のかたわらを新たなすみかとした。

揚州の空に輝く月よ、おまえにたずねよう、

私が再びその光に照らされて故郷に帰る道を行くのはいつの時だろうか。

【注】

- 故畦：もとの畑、もとのふるさと。唐・岑参「許拾遺恩の江寧に帰りて親に 拝すを送る（送許拾遺恩歸江寧拜親）」（『全唐詩』巻 198）に「菓を種うるに 故畦わかを疏ち、魚を釣るに旧鉤きゆうこうを垂る」。補説参照。
- 汝水：江西省臨川を流れる川の名。南宋・祝穆『方輿勝覽』巻 21 によれば 汝水は「臨川の東北六里に在る」という。
- 新壟：新しい畑、新しいふるさと。補説参照。
- 鍾山：江寧（現在の南京）郊外にある山の名。王安石は晩年この地に隠棲した。

【補説】

王安石にとって、本籍地・撫州臨川県（現在の江西省臨川県）と江寧府は、ともに故郷と言うべき場所であった。ことに後者は、父・王益の赴任に伴い十七歳で移り住んで以来、人生の多くの時間を過ごした土地。晩年、隱棲の地として選んでいることからわかるように、詩人にとってより親しい場所、自ら帰るべき場所として意識する土地であったといえよう。前半二句で詩人はそうした自分の来し方を臨川の東を流れる「汝水」、江寧の自宅から望むことができる「鍾山」の二つをとって表現する。「故畦」と「新壟」の「畦」「壟」はともに田畑の意があり、「もとの畑」「新しい畑」すなわち、もとのふるさとと、新しいふるさとと解することができる。「故畦」は、古くは『列子』天瑞に「遺穂^{いすい}を故畦に拾う」とみえることばで、晋・張湛の注によれば「刈り取りのすんだ田」の意。唐・杜甫「溪に泛かぶ（泛溪）」（『全唐詩』巻219）の「衣上 新月を見、霜中 故畦に登る」もまたその意で用いたものだろう。ここでは同じ語を用いながらその意を取らず、字義を表に返して「故い畦」（もとのあぜみち、もとの田畑）として用いたのである。一方の「新壟」は、「空山 寂寂として新壟を開き、喬木 蒼蒼として旧門を掩^{おほ}う」（唐・劉長卿「陳歙州を哭す（哭陳歙州）」、『全唐詩』巻151）などの例にみられるように、新しくできたばかりの墓の意で用いられることが多い。こちらは「新たな壟」（新しい田畑）と読ませるとともに、詩人が父母を江寧に葬り、一家の新しい墓所としたことを含意したものであろう。もとの場所を「抛」ち、新しい場所に身を「寄」せるという対は、唐・白居易の「生涯 共に寄す滄江の上、郷国 俱に抛つ白日の辺」（「十年三月三十日 微之に澧上に別る……（十年三月三十日別微之於澧上……）」、『全唐詩』巻440）から学んだものではないだろうか。「抛」からは、ただそこを離れたというだけでなく「遠くに置いてきた」という思いが、また「寄」からは寄る辺なき人生においてその身をあずけ、ささやかな居場所とする、というような感触が読み取れよう。

続く後半二句で詩人は「揚州の月」に問いかける。「おまえが故郷に帰る私を照らしてくれるのはいつなのだろうか」と。李壁がいみじくも「今 揚州の月を言うは、則ち公の意は止だ江寧に在り、復た故畦を回首せざるなり」と指摘する通り、詩人にとって帰るべき場所とはもはや臨川ではなく、江寧の地な

のである。

この作品の制作年は未詳だが、王安石が隠棲の地を江寧と定めたのち、よんどころない事情で再びその地を離れた時期、具体的には、熙寧八年(1075)から熙寧九年(1076)ごろ、王安石が一旦宰相を辞して江寧に帰ってのち、再び召されて都にあったころの作ではないか。江寧から長江を東に下ると南北を結ぶ大運河と長江がまじわる要所があり、そこから運河を北へ少し遡れば揚州である。そして揚州を越えれば、いよいよ江南の地を離れて北へ向かう。詩人はこの月を思い起こしつつ、再び江寧に帰る日はいつだろうかと詠んだのであろう。王安石には他にも「公と与にす 京口 水雲の間、月に問う 何れの時か我の還るを照らさんと」(「宝覺と与に龍華院に宿す三絶(與寶覺宿龍華院三絶)」其三、『李壁注』巻42)「春風 自^{おの}ずから江南の岸を緑にす、明月 何れの時か我の還るを照らさん」(「船を瓜洲に泊す(泊船瓜洲)」、同巻43)など同様の表現がある。どこか即興的で軽妙な響きをもつこの表現は、彼の口に馴染んだものであったのかもしれない。

(水津有理)

王安石-37 「雑詠四首」其二

ぎつえいよんしゅ
「雑詠四首」

已作湖陰客
如何更遠游
漳江昨夜月
送我到揚州

すで こいん きやく な
已に湖陰の客と作る
いかん さら えんゆう
如何ぞ更に遠游する
しょうこう さくや つぎ
漳江 昨夜の月
われ おく ようしゅう いた
我を送りて揚州に到る

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻75

【校異】

「漳」、『臨川先生文集』は「章」に作る。

「揚」、『臨川先生文集』では「揚」に作る。

題、『王文公文集』は「雜詠絶句十五首」其十二に作る。

【押韻】

「游」「州」：下平声 18「尤」

【訳】

もはや江寧に客偶する身となっていたのに、
どうして再び遠くに行くことになってしまったのだろう。
漳江でみた昨夜の月が、
私を揚州まで護り送ってくれた。

【注】

- 湖陰：湖の南の地。ここでは江寧府を指す。李壁注に「湖陰は公の金陵の居る所の旁近に在り」とある。
- 遠游：遠い地を転々とする事。『楚辞』「遠游」に「時俗の迫阨を悲しみ、輕拳して遠遊せんことを願えども」とある。
- 漳江：河川の名。詳細は不明。補説参照。
- 揚州：揚州。

【補説】

王安石は熙寧七年(1074)に宰相職を辞して知江寧府に就任し、代わりに呂惠卿が宰相に就く。その後熙寧八年(1075)、呂に代わり再度王安石が宰相位に復歸する。この作品の制作年は未詳だが、王安石-36「雜詠四首」其一と同じく、宰相位に復歸し江寧から揚州へ行く時に作られた作ではないだろうか。揚州を越えればいよいよ北の地へ入る。自分を揚州まで送ってくれたと表現する「昨夜月」には、王安石の江寧への思いが伺えるようだ。漳江について、北宋・沈括『夢溪筆談』卷3に「河川には漳と名のつくものが一番多い」とし、「漳は文のことであり、清流と濁流が混じり流れる川は漳と呼ばれていた」と解説する。「趙と晋の間を流れる清漳水と濁漳水」「当陽の漳水」「瀨上流の漳水」「鄆州の漳江」「漳州の漳浦」「亳州の漳水」「安州の漳水」を例として挙げる。金陵、揚州付近に漳江があったとの記録は管見の限り見つけられないが、おそらく金陵と揚州を結ぶ流れに漳江と呼ばれる川があったのではないかと思われる。

(大戸温子)

王安石-38 「雑詠四首」其三

ぎつえいよんしゆ
「雑詠四首」

證聖南朝寺

三年到百回

不知牆下路

今日幾荷開

しょうせい なんちよう てら
証 聖 南 朝 の 寺

さんねん ひゃっかいいた
三 年 百 回 到 る

し しょうか みち
知 ら ず 牆 下 の 路

こんにち いく はす ひら
今 日 幾 ば く の 荷 が 開 く

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 75

【校異】

題、『王文公文集』では「雑詠絶句十五首」其十三に作る。

【押韻】

「回」：上平 15「灰」、「開」：上平 16「哈」（同用）

【訳】

証聖は南朝の寺、

三年間に百回は訪れた。

塀に沿ったあの小道、

いま、どれくらいの蓮の花が開いているのだろうか。

【注】

- 証聖：証聖寺のこと。江寧（現在の南京）にある。南宋・周応合『景定建康志』巻 46 に「証聖寺、行宮の後に在り。南唐保大中、木平和尚 此の寺に居り。故に里俗 今に至るも呼びて木平寺と為す。寺の東 溝 有りて迤邐たり、西北 運瀆に接す」とある。
- 南朝寺：南朝のころ、今の南京に建てられた寺院を指す。南朝は、420 年から 589 年までに、南京を都とした宋、齊、梁、陳の四王朝をさす。中でも、梁・武帝の崇仏、及び造寺事業が有名で、多くの寺院が建てられたことは、唐・杜牧「江南の春 絶句（江南春絶句）」（『全唐詩』巻 522）の有名な句「南

朝 四百八十寺、多少の樓台 煙雨の中」からも窺える。

【補説】

証聖寺の建立時期は未詳。『景定建康志』では南唐まで遡れるものの、それ以前の記述はない。詩の本文に「南朝の寺」とあることから、あるいは南朝のころから続く寺院か。ここに足しげく通った「三年」を事実即した数字ととれば、江寧に戻り母の喪に服していた三年間を指すと考えられる。王安石の母は嘉祐八年(1063)八月に、開封で亡くなり、江寧近くの鍾山に葬られた。ここに、彼の父・益も眠っている。

注にも挙げたように、証聖寺の東側には西北に向かってクリークが伸びている。詩に詠われた蓮花はこのクリークに咲いていたものか。王安石には同じく証聖寺を詠んだ「証聖寺 杏 梅に接ぎて花 未だ開かず(証聖寺杏接梅花未開)」(『李壁注』巻46)一首があり、詩題から境内には梅や杏の木などが植えられていたことがわかる。冬には梅、続いて杏、初夏には蓮というように、季節折々の花が咲き、そのいずれも王安石が好んで詩に詠んだ風物である。「三年」に「百回」とはいささかおおげさな表現ではあるが、証聖寺のこうした自然が彼を惹きつけたのだろう。初夏、蓮花を楽しめる「牆下の路」での散策は、母を亡くした彼にとってひと時の心の安らぎだったに違いない。

母の喪が明けると、王安石は中央に戻り、政治家としての多忙な生活が始まる。証聖寺に繰り返し足を運んだ日々の余裕はそこにはない。江寧での三年間を懐かしみ、蓮を愛でながらゆったりと歩いたあのころの緩やかな時間を思い出しながら詩を詠んだのかもしれない。

制作年代は不明だが、右に述べたように、詩中の「三年」を母の喪に服した時ととれば、詩は喪が明けた治平二年(1065)の作か。

(鄭月超)

王安石-39 「雑詠四首」 其四

ぎつえいよんしゅ
「雑詠四首」

桃李白城塢	とうり はくじょう 桃李 白城塢
餉田三月時	た おく さんがつ とし 田に餉る 三月の時
柴荆常自閉	さいけい つね と 柴荆 常自に閉じ
花發少人知	はなひら ひと し まれ 花發けども 人の知ること少なり

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 75

【校異】

題、『王文公文集』は「雜詠絶句十五首」其十四に作る。

「白城塢」、『臨川先生文集』『王文公文集』はともに「石城塢」に作る。補説参照。

【押韻】

「時」：上平声 7「之」、「知」：上平声 5「支」（同用）

【訳】

桃や李の花が咲き乱れる白城村、
春三月、野良仕事に精出す人に、弁当を届ける。
周囲は活気にあふれているのに、このあばら家の門は閉じたまま。
庭の花は鑑賞してくれる人も無いままに、今を盛りと咲き誇っている。

【注】

- 白城塢：白城は村の名。「塢」は土手、中央が低い丘。また、土手で囲われた村のこと。
- 餉：旅人または田野などで働く人に食べ物を送ること。

【補説】

春の活気にあふれた農村の風景と、訪れる人のない静かな我が家の庭を対比する。一、二句は家の周囲の様子。桃李は春の代表的な花であり、桃の花は生命力の強さを示す。春の農繁期、農家では家でご飯を食べる暇を惜しんで、野良仕事に精を出す。この場面は唐・崔道融の「春墅」（『全唐詩』巻 714）「蛙声近くして社を過ぎ、農事忽ち已に忙なり。隣婦は田に餉りて帰り、百花の芳しきを見ず」を想起させる。

三・四句は家の庭のようす。来者を拒むように閉じたままの芝折戸も、春だけは乗り越えて入って来るのである。「爰」の字が、閉塞した空間を押し開けるような春の気配を象徴している。

この詩は四首連作の四首目であり、前の三首が離れた場所から故郷を想う内容であったことから、あるいはこの詩も故郷を懐かしむものであるかもしれない。春の農村のにぎやかさとは対照的に、主人のいない庭に訪れる者もない。しかし春だけは、我が家の庭を見捨てることなくやって来ているのだろう、と。

なお、この詩にいう「白城塙」という村は、李壁が指摘するように「石城塙」とするテキストもある。王安石の「金陵」（『李壁注』巻44）では「石城塙」に作り、「金陵の陳跡 苳苔古い、南北の游人 自ずから往来す。最も憶う 春風 石城塙、家家の桃李 牆を過して開く」という。おそらく「白城塙」とは「石城塙」のことであろう。「金陵」も「雑詠」も同じ場面をうたっており、王安石が深く愛した風景であったことが感じられる。

（三瓶はるみ）

王安石-40 「臥聞」

「^ふ臥^きして聞く」

臥聞黄栗留

起見白符鳩

坐引魚兒戲

行將鹿女游

^ふ臥^{こうりつりゆう}して黄栗留^きを聞き
^たちて^{はくふぎゆう}白符鳩^みを見る
^ざして^{ぎよじ}魚兒^ひを引^{たわむ}きて戯^{むれ}むれ
^ゆきて^{ろくじよ}鹿女^{とも}と將^{あそ}に游ぶ

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』闕

【押韻】

「留」「鳩」「游」：下平声 18「尤」

【訳】

身を横たえて黄栗留の啼く音を聞き、

身を起こして白符鳩のすがたを見る。

腰をおろして魚を誘って戯れ、

出かけては鹿といっしょに遊ぶ。

【注】

- 臥・起・坐・行：ねる、おきる、すわる、いく。生活の挙措動作。行住坐臥に同じ。もと仏教語。唐・王維「終南別業」（『全唐詩』巻 126）に「行きて到る 水の窮まる処、坐して見る 雲の起こる時」。また唐・孟浩然「永嘉江に宿し山陰の崔少府国輔に寄す（宿永嘉江寄山陰崔少府国輔）」（『全唐詩』巻 160）に「臥して聞く 海潮の至るを、起ちて視る 江月の斜なるを」。
- 黄栗留：鳥の名。麦や桑の実の熟する時を告げるといふ。呉・陸璣『毛詩草木鳥獸虫魚疏』巻下「黄鳥于飛」に、「黄鳥は黄鸝（黄鸝）なり。或いは之を黄栗留と謂う。……^{くわのみ} 葦の熟する時に当たり、来たりて桑間に在り。故に里語に曰く『黄栗留を看れば、我が麦 黄にして葦 熟せり』と。亦是れ節に応じ時に趨むくの鳥なり」。
- 白符鳩：鳥の名。語は『晋書』楽志下に弘舞の歌詞の一篇として「白鳩篇」を挙げ、「弘舞は江左自り出ず。旧は呉舞と云うも、其の歌を検するに呉辞に非ざるなり。亦殿庭に陳す。楊泓序に云う『江南に到りて自り、白符舞を見る。或いは白鳧鳩舞と言う。此れ有りてこのかた数十年なりと云う。其の辞旨を察るに、乃ち是れ呉人、孫皓の虐政を患い、晋に属せんことを思うなり』と説く箇所に見える。「白鳩篇」の歌詞に「翩翩たる白鳩、再び飛び再び鳴く」とあるように、「白鳩」「白符」「白鳧鳩」はいずれも鳥の名。また呉・孫策が張紘に命じて書かせて袁紹に与えた書（『三国志』呉志・孫策伝の裴松之注に引く『呉録』ほか）に「殷湯に白鳩の祥有り」とあるのをみれば、古くは祥鳥と目されたとおぼしい。王安石は「舒州の山水を懐いて昌叔に呈す（懐舒州山水呈昌叔）」（『李壁注』巻 34）にも「山下に飛び鳴く黄栗留、溪辺に飲み啄む白符鳩」と詠っている。
- 魚兒：さかな。唐・杜甫「水檻遣心二首」其一（『全唐詩』巻 227）に「細雨に魚兒出で、微風に燕子斜なり」。
- 鹿女：唐・玄奘『大唐西域記』巻 7 にみえる神女。深山に隠棲する仙人が清流に舟を浮かべたとき、その水を飲んだ鹿が生んだ女。容貌は人にすぐれて

美しかったが足が鹿に似ており、その足跡には蓮華が花開いたという。ここではその語を借りて、いわゆる「麋鹿を友とす」、山中の隠棲の友としての鹿をいうのであろう。唐・王維「化感寺に遊ぶ（遊化感寺）」（『全唐詩』巻127）に「雁王 果を銜みて献じ、鹿女 花を踏みて行く」。また唐・白居易「元八郎中 楊十二博士に答う（答元八郎中楊十二博士）」（『全唐詩』巻440）に「尽日 魚を観て澗に臨んで坐し、時有りて鹿に随い山に上りて行く」。

【補説】

初句から結句に至るまで、内容にさほどの展開はみられない。かりに「臥」「起」「坐」「行」という流れに、休息から行動（ねる、おきる、すわる、いく）というシークエンスを読み取るにしても、それは朝から日中への時間の推移と、とりたてて起伏のない日常の一齣の羅列に他ならない。内容の展開のかわりに喚起されるのは、行為の反復である。描かれるのは主人公と小動物の交流。詩人のみが身を置く完結した世界で、日々くりかえされるささやかな営み。畸形的なまでに巧緻で構成的な文字の配置と、そこに描かれる穏やかで小さな世界は、王安石絶句の特色のひとつである。江寧（現在の南京）帰隠後の作であろう。

（和田英信）

王安石-41 「秋興有感」

「秋興 感有り」

宿雨清畿甸

宿雨 畿甸を清め

朝陽麗帝城

朝陽 帝城を麗しくす

豊年人樂業

豊年 人 業を楽しみ

隴上踏歌聲

隴上 踏歌の聲

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』闕

【押韻】

「城」「声」：下平声 14「清」

【訳】

夜通し降った雨が都を洗い清め、
朝の光が王城を美しく輝かせる。
この豊作の年、人々は仕事を楽しみ、
畑のあたりでは足を踏み鳴らして楽しげに歌い祝う声が響く。

【注】

- 宿雨：昨夜からの雨、夜通し降った雨。唐・崔湜「総持寺の閣に登る（登總持寺閣）」（『全唐詩』巻 54）に「宿雨 龍界を清め、晨暉 鳳城に満つ」。
- 畿甸：都のこと。「畿」も「甸」もともに王城から五百里以内の土地で天子の直轄地。
- 麗：美しくする。補説参照。
- 楽業：仕事、生業を楽しむ。唐・白居易「東遊を想う 五十韻（想東遊五十韻）」（『全唐詩』巻 450）に「海内 時に事無く、江南 歳に秋有り。生民 皆業を楽しみ、地主 尽く賢侯なり」。
- 隴上：畑の畝の辺り。
- 踏歌声：足を踏み鳴らしながら歌う声。ここでは豊作の祝いの様子を指す。唐・李白「汪倫に贈る（贈汪倫）」（『全唐詩』巻 171）に「李白 舟に乗りて 将に行かんと欲し、忽ち聞く岸上踏歌の声」。

【補説】

君主の善政とその結果である豊年を寿いだ作品。前半二句は、雨に潤い、朝日のもとで美しく輝くみやこをいい、君主の住まうみやこが天の恩寵のもとにあることをいったもの。二句目の「麗」について李壁は齊・謝朓「暫く下都に使いし夜新林を発して京邑に至らんとして西府の同僚に贈る（暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚）」（『文選』巻 26）の「金波は鵷鵠に麗く（月光が宮殿に連なる）」を挙げるが、ここでは一句目「（夜通しの雨が）清める」と対を成すと考えて「（朝日が）美しく輝かせる」と理解した。類似した表現に、「春暉 芳甸に発し、佳気 層城に満つ」（唐・許敬宗「初春登樓即目に和し奉る 応詔（奉和初春登樓即目應詔）」、『全唐詩』巻 35）、「麗日 芳甸に開き、佳気 神京に積む」

(唐・張大安「越王に別るるに和し奉る(奉和別越王)」、同巻44)などがあり、いずれもめでたさを感じさせる儀礼的な表現である。後半二句は、豊作の喜びにわく農村を描き、それによって君主の善政を称えたもの。

王安石は「後元豊行」(『李壁注』巻1)と題する作品の中でも豊作ににぎわう田園の様子を「社日に非ずと雖も長く鼓を聞く」、「吳児の踏歌に女は起ちて舞い、但だ快樂を道いて苦しむところ無し」とうたう。李壁注はこれを熙寧七年(1074)に王安石が宰相をやめて鍾山に隠棲した後の作とするが、本作もまた同時期の作品であろう。

李壁はまた「後元豊行」について「宰相に復歸したいという気持ちから書かれたものだという人がいる」と述べるが、清・蔡上翔は『王荊国文公年譜考略』元豊四年(1081)の条で「臣下たるもの、政界を辞して故郷に帰ったからには、君主の徳をほめたたえるのは分を心得た行為というべきであり、それが(誇張などではなく)事実となればなおさらである」と擁護している。

(水津有理)

王安石-42 「題八功德水」

はちくどくすい だい
「八功德水に題す」

欲尋阿練若	あれんにや たず 阿練若を尋ねんとして
曳屣出東岡	くつ ひ どうこう い 屣を曳きて東岡に出ず
澗谷芳菲少	かんこく ほうひすく 澗谷に芳菲少なく
春風著野桑	しゅんふう やそう つ 春風 野桑に著く

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』闕

【押韻】

「岡」「桑」：下平声 11「唐」

【訳】

あれんにや
阿練若を訪ねようと、
くつを引きずってのんびりと東の岡へと赴く。

谷川には花々はほとんどなくて、
春風が野の桑の花芽を綻ばせているばかり。

【注】

- 八功德水：泉の名。南宋・周応合『景定建康志』巻 19 によれば「八功德水は蔣山に在り」とあり、江寧府（現在の南京）の東の鍾山（蔣山）にあったことが分かる。また、同書の引く『天聖記』の記述によれば、清、冷、香、柔、甘、淨、不饑、^{しよくか}觸疴の八つの功德が有るとされる。また、『称讚浄土仏摂受経』（『大蔵経』12 巻）によれば極楽浄土に八功德水があるとされるなど、仏典にも「八功德水」の名は頻出するが、八種類の功德については諸説あり、定まらない。
- 阿練若：仏教語。サンスクリット語 aranna/aranya の音訳で、王安石-51「朱朝議移法雲蘭」にみえる「阿蘭若」と同じ。静かな場所という意味で、修行の場、多く寺院を指す。「阿練若」「阿蘭若」ともに王安石以前の詩には用例がみえないが、王安石は当該詩の他に、「阿蘭若」を詩に三例用いている。
- 曳屐：靴を引きずって歩く様、のんびりとした様。
- 東岡：地名ではなく、王安石の住まいの東側にある岡という意味。『李壁注』巻 41 に「東岡」と題する詩があるなど、江寧府での作品にしばしばみえる。
- 著：風がまとわりつく、あるいは花をつける。唐・玄宗皇帝「初めて秦川路に入り寒食に逢う（初入秦川路逢寒食）」（『全唐詩』巻 29）に「去年閏余りて今春早く、曙色和風 花草に著く」、唐・顧夔「浣溪沙」（『全唐詩』巻 894）に「細風輕露 梨花に著く」などとあることから、春風が草木に著く（草木を揺らす）という表面上の意味に、春風が花を著けさせるとのイメージが付随しているものとして解釈した。
- 野桑：野生の桑。うす緑色の花を付ける。

【補説】

八功德水は仏典にちなんだ泉の名であり、仏教寺院（阿練若）を尋ねようと述べられてはいるが、仏教思想や僧侶との交流を前面に押し出した詩ではない。『景定建康志』によれば、宋代には梅摯「八功德水記」や趙師縉「八功德水亭記」などの題を持つ文も書かれており、本文は残っていないようだが、山水

游记の類だったと考えられる。また、王安石自身にも「題八功德水」の他に、八功德水を描いた詩は四首みえる。八功德水は仏教的なイメージを備えた地名でありつつも、穏やかな（仏教めかして言えば「阿練若」と呼ぶに相応しい）佇まいを見せる名勝の地として、宋人に意識されていたと考えられる。

そのような中で、本作において、王安石が鍾山（あるいは八功德水のある鍾山の一部）を「東岡」と称していることは、注目に値する。名もなき小さな岡を「東岡」と称しているのではない。八功德水という名勝地を有する岡だと詩中に明示されているのであるから、これは間違いなく鍾山を指していると読者は理解する。だが、そこで王安石は敢えて「我が家の東側にある岡」と呼んでみせているのである。王安石が訪れた日の八功德水には、格段に目を惹くような景物はない。花は少なく、ようやく綻び始めたのも薄緑色の桑の花だけ。しかし王安石はむしろ諸人がありがたがらぬような地味な光景に満足感を覚え、そんな鍾山を我が庭とすることへの密やかな優越感を嘯み締めているようにみえる。

制作時期は江寧府に隠遁した熙寧九年（1076）以降と考えられる。

（高芝麻子）

王安石-43 「口占示禪師」

こうせん ぜんじ しめ
「口占 禪師に示す」

去歲別南嶽	きよさい なんがく わか 去歲 南嶽に別れ
前年返泐潭	ぜんねん ろくたん かえ 前年 泐潭に返る
臨機一句子	き のぞ いちくし 機に臨む一句子
今日遇同參	こんにち どうさん あ 今日 同參に遇う

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻69

【校異】

題、『臨川先生文集』では「口占」に作る。

【押韻】

「潭」「参」：下平声 22「覃」

【訳】

昔、南嶽で別れました。
以前、泐潭に戻って行きました。
そして今ここで一句、
「今日、その同学に遇いました」。

【注】

- 口占：腹案した文辞を口ずさんで人に授ける。また詩に草稿をつくらず直ちに口ずさむこと。
- 去歳：昨年、または以前。ここでは後者。唐・白居易「歎老三首」其三（『全唐詩』巻 433）に「去歳 新嬰兒、今年 己に歩を学ぶ」とある。
- 南嶽：衡山。五岳の一。湖南省中部にある。
- 泐潭：潭の名。江西省宣宝県の洞山寺内にある。李壁注に「南嶽は衡州に属し、泐潭は洪州に属す。皆大禅林なり」とある。
- 臨機一句：この機に臨んで一句。禅問答で使われた言葉。北宋・道原『景德伝灯録』巻 13 に「僧、延昭に問う、如何ぞ是れ臨機一句。師曰く、風に因りて火を吹けば、力用うること多からず」とある。
- 同参：同一の師に参学すること。北宋・道原『景德伝灯録』巻 15 に「慧勤、令遵に語りて曰く、吾老いて提誘に倦む、汝、翠微に往き謁すべし、彼即ち吾が同参なり」とある。

【補説】

南嶽、泐潭は、どちらも禅の道場。以前共に学んだ禅師と再会した、その喜びを即興で口にした作であろう。

一首の中に、「去歳」「前年」「今日」と三つの時を示す語を句の頭に置く。作者の心に、時の経過と巡り合わせを思う感動のあったことがうかがわれる。また、「南嶽」「泐潭」という二つの固有名詞は、おそらく相手の禅師と共有する思い出の地であったのだろう。固有名詞を出すことにより、二人にとってより思いを共有することのできる作となったのではないかと推測する。

王安石-44 「偶書」

「偶書」

雄也營身足

聃兮悞汝多

捐書知聖已

絕學奈禽何

ゆう み いとな た
雄や身を營むに足り
たん なんじ あやま おお
聃や汝を悞ること多し
しよ す せい し
書を捐つれば聖を知るのみ
がく た きん いかん
学を絶てば禽を奈何せん

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 73

【校異】

題、『王文公文集』は「雄聃」に作る。

「悞」、『王文公文集』は「誤」に作る。

【押韻】

「多」「何」：下平声 7「歌」

【訳】

揚雄を学べば人としての教養が十分身につき、
老子を読めば往々にして間違った方向へと導かれる。
書物を捨てれば、聖人の存在を知っているだけの人間となり、
学びを絶てば、禽獣といった何の違ひがあろうか。

【注】

- 偶書：意図せずして出来上がったことをいう。
- 雄：前漢の揚雄。儒家。
- 營身：人としてあるべき方向に導くこと。
- 聃：老子の字。道家。
- 悞汝：人を間違った方向に導くこと。「悞」は「誤」に通ずる。
- 捐書：学ぶことをやめ、書物を捨てること。『莊子』にみえる語。『莊子』山木に、子桑暈しそうこうという人が、利害打算のない「天を以て属がる」つな 關係こそ真の

交わりである、と孔子に諭し、それを聞いた孔子は家に帰り「学を絶ち書を捐つ」、と学問をやめて書物を捨てたとある。

- 知聖：聖人の存在を知りながらも、それを登用して世の中に役立てられないことをいう。揚雄『法言』にみえる語。『法言』五百に、孔子が生きていたとき、諸侯が孔子を登用しなかったことについて、「聖なるを知りて用うる能わざるや、得て聞くべきか（聖人と知っていながら用いなかったことについて、どうしてか聞かせていただけませんか）」とある。
- 絶学：学ぶことをやめる。『老子』にみえる語。第 20 章に「学を絶てば憂い無し。唯と阿と、相去ること幾何ぞ。善と悪と、相去ること若何」と学ぶことを止めれば、憂いはなくなる。礼に沿った「唯」という返事の仕方と、そうでない「阿」との間にどのような違いがあるのだろうか。善と悪、両者はどれほどの違いがあるというのか、とある。
- 奈禽何：禽獣との区別がなくなることをいう。揚雄『法言』にみえる語。『法言』学行に「人にして学ばざれば、憂い無しと雖も、禽を若何」と人として学ばなければ、憂いを知ることもないが、それでは禽獣とは変わらない、とある。

【補説】

礼学と老荘思想の勉学に対する立場を対比させた詩。前半二句では、揚雄と老子を具体的な人物として挙げ、前者を勧め、後者を退ける。礼学側に揚雄を挙げたことに王安石の彼に対する評価の高さが窺えよう。「揚雄三首」其一（『李壁注』巻 12）では、揚雄について、儒者として孔子、孟子と系譜を同じくし、文才があり、政治家として政権におもねることなく、身の処し方に柔軟性があり、飄々とした人生であったと述べた上で、最後に「往者 或いは返るべくんば、吾 将に斯の人とともにせんとす」と詩を締めくくる。一方、老子については、とりわけその学を廃すべきだという主張に賛同しなかったようである。「老子」（『臨川先生文集』巻 68）では、「是れ理を察せずして高きに務むるの過ちなり」とその主張を短見であると批評する。ここにみえる礼学、老荘に対する考え方は本詩と重なるものである。

後半二句は、『老子』『莊子』及び揚雄『法言』の本文中の語を切り貼りして

作られたもの。「捐書」は『莊子』、「知聖」は『法言』にみえる語。ここでは、書物を捨て、学ぶことを辞めれば、世の中に役立たない人間になってしまうことをいう。第四句の「絶学」は『老子』、「奈禽何」は『法言』の語。両句ともに揚雄の言葉を借りて老荘の主張を否定する。王安石はこうした言葉遊びとも思える句作りの中でしっかりと自分の立場を詠み出しているのである。

(鄭月超)

王安石-45 「送陳景初」

ちんけいしょ おく
「陳景初を送る」

舉族貧兼病

煩君藥石功

長安何日到

一一問歸鴻

ぞく あ ひん やまい か
族を挙げて貧に病を兼ね
きみ やくせき こう わずら
君が藥石の功を煩わす
ちょうあん いず ひ いた
長安何れの日にか到る
いちいち きこう と
一一 歸鴻に問う

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 58

【押韻】

「功」「鴻」：上平声 1「東」

【校異】

題、『臨川先生文集』は「送陳景初金陵持服舉族貧病煩君藥石之功」とし、『王文公文集』は「送陳景初金陵持服舉族貧病煩君藥石之功小詩二首」其一に作る。補説参照。

【訳】

一族こぞって貧乏の上に病に苦しみ、
あなたの効果ある施薬に頼ってきました。
(これから出発するあなたは)長安にいつ到着しますか。
帰って来た雁を見ては問いかけることでしょう。

【注】

- 陳景初：王安石一族が世話になった医者。伝は未詳。王安石には他にも「陳君景初に贈る（贈陳君景初）」（『李壁注』巻 8）、「陳景初を送る（送陳景初）」（同巻 47、七言詩）の詩がある。補説参照。
- 挙族：一族を挙げて。一族こぞって。
- 貧兼病：貧乏と病気にさいなまれる。唐・包佶「嶺下にて疾に臥し 劉長卿員外に寄す（嶺下臥疾 寄劉長卿員外）」（『全唐詩』巻 205）に、「唯だ貧に病を兼ぬる有りて、能く親愛をして疏んぜしむ」と嘆いている。
- 藥石之効：藥石は藥と石鍼。転じて病気の治療をいう。
- 帰鴻：帰雁のこと。秋には北から南へ渡ってくることから、ここでは北の地の情報を知らせてくれる存在と考えている。

【補説】

本詩について、李壁は「時に公 金陵に在りて母の喪に持す」との題下注を附す。また『臨川先生文集』および『王文公文集』は更に詳しく、詩題を「陳景初を送る、金陵に持服するに、族を挙げて貧病たり、君が藥石の功を煩す」とする。曰く、当時王安石は金陵（江寧府・現在の南京）にて亡き母・呉氏の喪に服しており（持服）、その際に一族みなが貧困と病に苦しんでいたのを、医師である陳景初に救われた、と。

王安石は、手を尽くして治療してくれた陳景初の厚誼に感謝し、この送別の詩を詠んだ。陳景初の目的地は遥か遠い長安（現在の陝西省西安市）。無事の到着を願い、北から飛来した渡り鳥に長安で見かけたか、尋ねたいという。詩人の細やかな心遣いが読み取れる。

王安石は他にも陳景初に詩を贈っている。「陳君景初に贈る（贈陳君景初）」（『李壁注』巻 8）に「堂堂たりえいせん潁川の士」とあることから、陳景初は潁川（現在の安徽省阜陽市）の出と考えられる。王安石はその医療技術を高く評価し、名医の故事を引用しつつ詩で称えた。例えば、上述の「贈陳君景初」では古の名医・華佗かだになぞらえ、その技を「攀足れんそく〔あしなえ〕四五年、針を下し之を走らしむ（攀足四五年、下針使之走）」と述べている。

制作時期は、王安石が江寧府にて母親の喪に服していた時期、嘉祐八年（1063）の頃と推察される。

王安石-46 「泊姚江」

「姚江に泊す」

軋軋櫓聲急

蒼蒼江日低

吾行有定止

潮汐自東西

あつあつ ろせいきゅう
軋軋と櫓声急に
そうそう こうじつ た
蒼蒼と江日低る
わ たび ていし あ
吾が行 定止有るも
ちようせきおの どうせい
潮汐自ずから東西す

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 70

【校異】

題、『王文公文集』では「泊姚江二首」其二に作る。

【押韻】

「低」「西」：上平声 12「齊」

【訳】

ギーギーと櫓の音も気ぜわしく、
はてなく広がる空のもと、江に落ちかかる夕日。
わが旅に今宵しばしの宿りはあっても、
ただ潮の流れは東へ西へと止まることはない。

【注】

- 軋軋：きしむさま。車輪や舟の櫓をこぐ音を表す。唐・李涉「巴陵に却帰する途中 筆を走らせて唐知言に寄す（卻歸巴陵途中走筆寄唐知言）」（『全唐詩』巻 883）に「櫓声軋軋として揺らぎて前^{すす}まず」。
- 蒼蒼：茫漠として窮まりないさま。唐・韋応物「楽遊廟に登りて作る（登樂遊廟作）」（『全唐詩』巻 192）に「微鐘 何処より来たる、暮色 忽ち蒼蒼たり」。
- 江日：川に沈みゆく太陽。
- 定止：止まること。唐・姚合「客遊旅懷」（『全唐詩』巻 498）に「客行 定止 無し」。下の「東西」注にも引くように「無定止」のかたちでみえることが

多い。

- 潮汐：潮の満ち引き。朝を潮、夜を汐という。
- 東西：東へ西へ、あるいは四方へと行き交うこと。唐・張喬「初上人に贈る（贈初上人）」（『全唐詩』巻 638）に「空門 去住無く、行客 自ずから東西す」。また前蜀・李珣「漁歌子」（『全唐詩』巻 896）に「扁舟 自ずから逍遙の志を得、東西するに任せ、定止無し」。

【補説】

姚江はいまの浙江省寧波と杭州のあいだを結ぶあたりを流れる河川。東海に比較的近いため、潮位の高下が見られるのであろう。王安石が知鄞県として寧波にあった慶暦七年（1047、二十七歳）から皇祐元年（1047、二十九歳）にかけての作品か。

前半二句は聴覚と視覚をそれぞれに一句を分かって詠む。一日の旅も休息へと向かう夕暮れ、宿りに急ぐ櫓の音も気ぜわしく聞こえる頃、江に落ちかかる夕日の向こうに、茫漠と広がる黄昏の空。水行途上の夕暮れの一景として確かなイメージを結ぶ。後半はその際漏らされた小さな感懐。「定止」は詩に用いられる場合、多くは注に挙げたように「無定止」のかたちで現れる。しかし「吾が行 定止有り」と詠うとはいえ、「客行 定止無し」という通念の転覆を意図するような大げさな表現ではあるまい。「無定止」を「有定止」といったんは切り返したうえで、「無定止」の屈託を、吾が意にお構いなしに「東西」する「潮汐」に語らせるのである。たまさか今宵、ここに一夜の宿りを求めたとしても、目の前の江はつねに変わらず東へ西へと潮の流れのまま行き交うのだから。明日はまたその潮路にのって旅立つのである。

（和田英信）

王安石-47 「樓上」

ろうじょう
「樓上」

蕩漾舟中客

とうよう しゅうちゅう きゃく
蕩漾す 舟中の客

徘徊樓上人
滄波浩無主
兩槳邈難親

はいかい ろうじょう ひと
徘徊す 楼上の人
そうは こう しゆ なく
りょうしょう ばく あ がた
兩 槳 邈として親い難し

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』卷 66

【押韻】

「人」「親」：上平声 17「真」

【訳】

(あなたは) ゆらゆらとただよう舟上の旅人、
(私は) 行きまどう楼上の人。
青い波は見渡すかぎりどこまでも広がり、
小船ははるか、手も届かないほどに。

【注】

- 蕩漾：水の揺れ動くさま、ただようさま。暈韻。唐・劉長卿「馬秀才の落第して江南に帰るを送る（送馬秀才落第歸江南）」（『全唐詩』卷 151）に「慙勤なり 斗酒 城陰の暮、蕩漾す 孤舟 楚水の春」。
- 楼上人：高殿の上で帰らぬ人を思う女性。魏・曹植「七哀詩」（『文選』卷 23）に「明月 高楼を照らし、流光 正に徘徊す。上に愁思の婦有り、悲歎して余哀有り。借問す 歎ずる者は誰ぞと、言うは是れ客子の妻なりと」。また唐・邵謁「行人を望む（望行人）」（『全唐詩』卷 605）に「嗟 楼上の人と為り、望み望めども相近づかず」。
- 徘徊：行きつ戻りつさまようさま。暈韻。魏・阮籍「詠懷詩十七首」其一（『文選』卷 23）に「徘徊して将何をか見ん、憂思 独り心を傷ましむ」。
- 浩無主：広々と見渡すかぎり何も無い。唐・李賀「韋仁實兄弟の関に入るを送る（送韋仁實兄弟入關）」（『全唐詩』卷 393）に「野色 浩として主無く、秋明 空曠の間」。
- 兩槳：舟をこぐ二本の櫂、転じてその舟、とくに小船。唐・韓偓「南浦」（『全唐詩』卷 681）に「応に是れ石城の艇子来たるなるべし、兩槳 啞として花塢を過ぎる」。

- 難親：近づけない。会えない。唐・盧綸「春思 李方陵に貽る（春思貽李方陵）」（『全唐詩』巻 278）に「別れ難く復た親い難し」、また唐・羅隱「晩に宿松に泊す（晩泊宿松）」（同巻 665）に「君を仰むれども邈として親い難く、沈思して夜 将に旦けん」とす。

【補説】

舟で旅立って行った「舟中の客」。江のほとりの高樓でかつてその「客」を見送り、その帰りを待つ「楼上の人」。帰らぬ人を待つ女性の果てしない思いを、「蕩漾」「徘徊」「浩無主」「邈難親」などの語の喚起する感覚によって表現した作品。

前半二句の「蕩漾」「徘徊」はそれぞれ、水の揺れ動くさま、行きつ戻りつするさまをいう語。ともに畳韻であるこの二つの語は、韻の繰り返しによるリフレインの効果があり、「舟中の客」「楼上の人」が、いつまでも漂い、終わりなくさまようさまを表現する。三句目は楼上から見える水の果てしない広がりを描いたもの。李壁は、「浩無主」について「浩の一字を用いた点が素晴らしい」と評しているが、この語は目の焦点になるようなものが何もない（＝「無主」）茫漠とした広がりを行ったもの。一首は、その広がりの中に思う人を乗せた小船（＝「両槳」）のすがたを求めても、それはあまりにはるかで会うことはかなわないと結ばれる。

一読して心に残るのは、楼上の人のすがたというより、波間を漂うような感覚そのものである。理屈からいえば、一句目で水上に揺られているのは「舟中の客」であり、彼を乗せた「両槳」なのだが、どこへも行き着けずに揺られているのはその「客」を思う「楼上の人」なのであろう。

高樓の上で帰らぬ人を思う「愁思の婦」の形象は、曹植の「七哀詩」以来繰り返うたわれてきたもの。この作品はその舞台を、送別詩によくみられる江上の樓に移し、みはるかす水の広がりを描くことで心情の表現とした。作品の主題はむしろ、寄る辺なさという感覚そのものであったのではないだろうか。

（水津有理）

王安石-48 「春晴」

はる は
「春晴る」

新春十日雨

雨晴門始開

靜看蒼苔紋

莫上人衣來

しんしゆんとおか あめ
新春十日の雨
あめ はもんはじ ひら
雨晴れて門始めて開く
しず み そうたいもん
静かに看る 蒼苔の紋
じんい のぼ き な
人衣に上り来たる莫し

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 72

【押韻】

「開」「来」：上平声 16「咍」

【訳】

年明けて十日、雨が降り続き、
雨が上がってようやく家の門を開く。
蒼い苔が点々と生えているのを静かに眺めていても、
私の衣には（王維のように）苔が照り映えはしないのだ。

【注】

- 蒼苔紋：「蒼苔」はあおい苔。「紋」とは綾模様をなすこと。ここでは、唐・雍陶「盧岳閑居十韻」（『全唐詩』巻 518）の「錦文の苔は点点として、錢様の菊は斑斑たり」を踏まえ、苔が点々と生えていることを言うとして解釈した。

【補説】

この詩は明らかに唐・王維「事を書す（書事）」（『全唐詩』巻 128）を踏まえている。

輕陰閣小雨

深院晝慵開

坐看蒼苔色

欲上人衣來

輕陰 閣に小雨あり

深院 晝に開くに 慵し

坐ろに看る 蒼苔の色そぞの

人衣に上り来たらんとするを

「開」「来」と次韻しているのみならず、後半二句は十文字のうち七文字までが、

位置を含め一致する。眼目は、そこまで一致させておきながら、「莫」の文字で意味を反転させている点である。詩人は、王維の描き出した境地を踏まえ、同様の景物を描き出しつつ、自分は王維とは異なるのだと述べて結ぶ。苔の色と溶け合うような王維の境地にまで至り得ぬというのが、表向きの意味合いであろう。だが、十日の雨がようやく上がり、萌え出した苔に気づいた詩人は、衣が苔の色に染まらぬかと心のどこかで期待しつつも、王維のようにはなれぬ自身を楽しんでいるように感じられる。なお、李壁は、自明だったためか、注に王維詩を挙げていない。

(高芝麻子)

王安石-49 「浄相寺」

じょうしょうじ
「浄相寺」

浄相前朝寺

荒涼二十秋

曾遭滅劫壞

今遇勝縁修

じょうしょうぜんちよう てら
浄相 前朝の寺
こうりよう にじゅう あき
荒涼 二十の秋
かつ げんこう あ やぶ
曾て 滅劫に遭いて壊れ
いま しょうえん あ おさ
今 勝縁に遇いて修む

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 64

【校異】

「滅」、『王文公文集』では「滅」に作る。

【押韻】

「秋」「修」：下平声 18「尤」

【訳】

浄相寺、かつての王朝の寺。

荒涼のなか、二十回の秋を経た。

以前、滅劫の時にあい、滅びたが、

いま良縁にめぐりあい、修復の時を迎えた。

【注】

- 浄相寺：江寧（現在の南京）にある寺の名。李壁注に「俗に呼びて後籬寺と為す。江寧県城、西南六十里に在り。唐天祐十八年に建つ。国朝崇寧中、今額に改む」とある。
- 前朝：前の王朝。浄相寺が唐天祐十八年に建つとあることから、ここでは唐をさすと思われる。
- 減劫：仏教の語。劫には成劫、住劫、壞劫、空劫の四期があり、四劫と呼ばれる。人の寿命は住劫の時より百年に一歳ずつ減る。これを減劫という。補説参照。
- 勝縁：仏教の語。良い縁の意。補説参照。

【補説】

唐・白居易「香山寺を重修し二十二韻を題し畢りて以て之を紀す（重修香山寺畢題二十二韻以紀之）」（『全唐詩』巻 454）に「曾て減劫に随いて壊れ、今勝縁に遇いて修む。再び新金刹を瑩き、重ねて旧石楼を装う。病僧、皆引起き、忙客、亦淹留す」とある。王安石はこの白居易の詩の二句をほぼそのままに使う。浄相寺修復の際に詠まれた詩であろう。

（大戸温子）

王安石-50 「將母」

「母を將う」

將母邗溝上

留家白紵陰

月明聞杜宇

南北總關心

母を將う邗溝の上

家を留む白紵の陰

月明るく杜宇聞こえ

南北総て心に関る

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 75

【校異】

題、『王文公文集』では「雜詠絶句十五首」其十五として収める。

【押韻】

「陰」「心」：下平声 21 「侵」

【訳】

母を養う邗溝のほとり、
 妻をのこす白紵山の北。
 月明るくして、ほととぎすのさえずりを聞き、
 南北に隔たれた者は互いをこころにかける。

【注】

- 将母：母に奉養を尽くす。ここでは任地に同道して養う。
- 邗溝：淮河と長江を結ぶ運河。ここでは揚州を指す。北宋・黄庭堅「莘老に贈らるに和答す（和答莘老見贈）」（『山谷外集詩注』巻 15）「拜公古邗溝」一句の史容注に「邗溝は揚州を謂うなり」とある。
- 家：妻を指す。
- 白紵：白紵山のこと。現在の安徽省当塗県にある。
- 杜宇：ほととぎす。又たの名、杜鵑、子規、不如帰、蜀魂。その鳴き声は「不如帰」と聞こえることから、旅人の郷愁を誘う。唐・戴叔倫「暮春感懷」に（『全唐詩』巻 273）「杜宇声声 客の愁を喚ぶ」とある。

【補説】

「邗溝の上」、すなわち揚州のこと。王安石は慶暦二年（1042、二十二歳）から慶暦五年（1045、二十五歳）まで淮南判官としてこの地に赴任している。妻のいる「白紵の陰」は、江寧（現在の南京）を指すと思われる。江寧は父の転勤に従い、十七歳から住んでいた地である。母を揚州に連れていき、妻を江寧に残してきたというのは、この揚州赴任期間中のことか。妻を故郷に残してきたのは、妊娠、あるいは子供が小さかったためかもしれない。実際、王安石が揚州の任にあった二十四歳のとき、長男の雱が生まれている。

妻とは、一方が「河」のほとり、一方が「山」の北とあるように、なかなか会えないでいることがわかる。月を眺めれば、家族団らんを願い、「不如帰（帰るに如かず）」と鳴くほととぎすの声を聞けば、郷愁の情が沸き起こる。第三

句では、このように遠く離れた家族を思う気持ちが、目にみえるものと耳に聴こえるものによって表されている。いずれも古来より、詩にしばしば詠われてきたモチーフであり、自ずと第四句の家族の情愛へと導かれる。それぞれ飾りのない句だが、かえって余韻を残す。

また、第四句にみえる「南北」は、一つは、南にいる妻と北にいる母ととり、王安石の関心の及ぶところを示すと解釈できる。もう一つは、南にいる妻、北にいる王安石ととり、思い合う両者とすることもできよう。ここでは、後者を読みたい。帰郷を促すほととぎすの声を聞きながら月を眺め、その思いやる先はまず故郷の妻であったのではないだろうか。王安石はきっと、彼女も今ごろ月を見上げ自分のことを思ってくれていると想像したことだろう。唐・杜甫「月夜」(『全唐詩』巻 224)「今夜 鄜州の月、閨中只えにひとり見るならん」に通ずるような、互いを気にかける夫婦の情が思い起こされる。

詩は先に述べたように、揚州在任中の慶暦二年(1042)から慶暦五年(1045)の間に詠まれたものではないか。

(鄭月超)

王安石-51 「朱朝議移法雲蘭」

	しゅちやうぎ ほううん らん うつ
「朱朝議が法雲の蘭を移す」	
幽蘭有佳氣	ゆうらん か き あ
千載閼山阿	せんざい さんあ と
不出阿蘭若	あらんや い
豈遭乾闥婆	あ けんたつば あ

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 77

【押韻】

「阿」：下平声 7「歌」、「婆」：下平声 8「戈」(同用)

【校異】

題、『臨川先生文集』の目次は「朱朝議移法雲院蘭」に作るが、本文の題には「院」の字無し。

【訳】

蘭の花の清らかな香りは、
 千年もの長い間、山あいにはひっそりと封じ込められていた。
 修行の場（法雲寺）から出てこなければ、
 どうして乾闥婆（自分を評価してくれる人物）に出会うことができようか。

【注】

- 朱朝議：「朝議」は官名。朝議郎。文散官名。隋から宋代初期まで置かれた。正六品上。北宋・太平興国元年(976)に廃され、「朝奉郎」に改編された（『宋史』職官志・雜制）。ここでは朱姓の朝奉郎のこと。人物については不詳。
- 法雲蘭：法雲寺の蘭の花。法雲寺は元・張鉉の『至正金陵新志』巻 11 下に、「法雲寺は旧城外東北十里に在り」とある。補説参照。
- 幽蘭：奥深い谷に生ずる蘭。ゆかしく香る蘭。「幽蘭」は『楚辞』「離騷」に「戸ごとに艾よもぎを服して以て要こしに盈みて、幽蘭は其れ佩おぶべからずと謂う」と、すぐれた人物の比喩として使われている。この詩でも世に知られていない逸材をさす。
- 闔：隠す、隠れる。
- 山阿：山の隈くま、山の入り組んだところ。
- 阿蘭若：aranna/aranya。阿練若・阿蘭那などと音写する。修行僧が修行をする場所。町や村から離れておらず、修行をするのに適した場所。転じて、修行僧の住む庵または小房。ここでは法雲寺をさす。
- 乾闥婆：サンスクリット gandharva の音写。香陰こうおん・香神じきこう・食香などと漢訳される。天上の樂神で八部衆の一。南宋・法雲の『翻譯名義集』八部に、「乾闥婆は此れ香陰を曰い、此れ亦陵空の神なり。酒肉を噉わず、唯だ香のみ陰の資とす。」とある。ここでは香りの良し悪しを嗅ぎわけることのできる人をさす。

【補説】

法雲寺は江寧（現在の南京）にあった寺の名。『李壁注』巻 2 「法雲」に引く

『図経』によれば、前身は齊の世祖が建てた集善寺であり、唐代に荒廃したが修復されて法雲院と改称されたという。また、北宋・黄庭堅の「書王荊公騎驢圖」（『山谷内集』巻27）に「金華の兪紫琳清老……荊公の驢を追逐して法雲・定林を往来す」とある。法雲寺は王安石が隠棲した半山寺の付近にあり、好んで散策した場所と思われる。

前半二句は、注に挙げた「離騷」及び、齊・孔稚珪「北山移文」（『文選』巻43）の「尚生（前漢の隠士、尚子平）存せず、仲氏（後漢の仲長統）既に往く。山阿寂寥として、千載誰か賞せん」を踏まえる。北山（鍾山）は齊の周顒しゅうぎょうが隠士であったときに庵を結んだ場所であり、ここでうたわれる蘭の花は高潔な隠士を暗示する。

後半二句にいう「阿蘭若」「乾闥婆」は、仏教寺院（法雲寺）から想起したものであろう。山あいの修行場にあつて人に知られることの無かった蘭も、寺を出ることで初めて目利き（乾闥婆）の知己を得ることができるのだ。王安石は朱朝議が山あいから移植した蘭を「すぐれた人物」に見立て、自分の才能を発揮するためには自分を評価してくれる人物と出会わなければならない、そのためには野に下りてきなさいよ、と戯れているようである。

この詩の成立時期は不明であるが、法雲寺は王安石の隠棲後の住まいに近いことから、熙寧九年（1076）南帰後の作であろう。

（三瓶はるみ）

王安石-52 「晩歸」

ばん かえ
「晩に帰る」

岸廻重重柳

川低渺渺河

不愁南浦暗

歸伴有嫦娥

きし とお ちようちよう やなぎ
岸は廻し 重 重 たる 柳

かわ ひく びようびよう かわ
川は低し 渺 渺 たる 河

うれ なんほ くら
愁えず 南浦の暗きを

きはん こうがあ
歸伴に嫦娥有り

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 76

【校異】

「嫦」、『臨川先生文集』、『王文公文集』は「姮」に作る。

【押韻】

「河」「娥」：上平声 7「歌」

【訳】

川岸ははるか遠くにあり、柳が重なるように生い茂っている、
平野が低くひろがり、その中に川面が渺々と広がっている。
南の水辺が暗くなっても心細くない、
嫦娥と一緒に帰ってくれるから。

【注】

- 重重：幾重にもかさなる。王安石-3「溝港」にも「溝港 重重たる柳」との表現あり。
- 川：川が流れる低地、平野。
- 南浦：南の水辺。王安石-24「南浦」参照。
- 帰伴：一緒に帰る人。唐・韓愈「青龍寺に遊びて崔大補闕に贈る（遊青龍寺贈崔大補闕）」（『全唐詩』巻 339）に「去歳羈帆し湘水明らかなり、霜楓千里帰伴に随う」とある。
- 嫦娥：月にいるとされた女神。「姮娥」とも。弓の達人羿の妻であったが、羿の持っていた不老不死の薬を盗んで月へ行った。

【補説】

王安石-24「南浦」は船遊びをしていて、日が暮れる様子を詠った詩である。「南浦」は起句に「南浦随花去」と「花」字があり、春を想起させる。そして、この「晩帰」には、春に芽吹く柳が詠まれ、かつ、日が暮れた後の帰宅の模様を詠うのは、「南浦」の続きのようにも思われる。

帰りが暗い夜になったときに、月と一緒にいてくれる、という発想はよくみられるものである。たとえば李壁注の指摘によれば、唐・王涯の「春江曲」（『全唐詩』巻 26 及び巻 346、『樂府詩集』巻 77 等は張仲素の作とする）に「帰時に夜を覚えず、浦に出ずれば月 人に随う」という表現がある。

(佐野誠子)

王安石-53 「題舫子」

「舫子に題す」

愛此江邊好

留連至日斜

眠分黃犢草

坐占白鷗沙

こ こうへん よ あい
此の江辺の好きを愛し
りゅうれん ひ なな いた
留連して日の斜めなるに至る
ねむ こうとく くさ わ
眠りて黄犢の草を分かち
ざ はくおう すな し
坐して白鷗の沙を占む

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 68

【押韻】

「斜」「沙」：下平声 9「麻」

【訳】

この川べりが大好きで、
日が傾くまで居続ける。
小牛と草を分かちあって眠り、
鷗たちとともに砂浜に腰を下ろす。

【注】

- 舫子：もやいぶね。他の舟とつなぎとめた舟。あるいは岸边につないだ舟をいう。
- 留連：心ひかれてとどまること。双声の語。
- 黄犢：「犢」は子牛。「黄」は添えて二音節化し詩語を構成する。『列仙伝』巻下に、黄犢を牽いて姿を見せる「犢子」なる仙人の伝記を載せる。
- 白鷗：カモメ。「白」は添えて二音節化すると同時に「黄」と対比をなす。海辺に住まい日頃カモメと遊んでいた男が、父からカモメを捕って来いと言われて翌日海に出かけるとカモメは空から降りて来なかったという『列子』黄帝の逸話を想起させる。唐・李白「江上吟」（『全唐詩』巻 166）が「海客は無心にして白鷗に随う」と詠うように、カモメの遊ぶ浜辺に腰を下ろす主人

公の「無心」のとらわれなさを示す。

【補説】

日だまり、動物。いずれも王安石の愛好するもの、習用のモチーフである。第一句は空間・場所の提示。「此の江辺の好きを愛す」と、無邪気なまでに吐露される心情。しかしそれだけで、水平に流れる川やそれに連なる川岸の、無限定に広がる開放感が十分に伝わる。その空間の広がりを受けて第二句では、一日を存分につかう喜び、時間の拘束からの自由が詠われる。

後半二句は、その喜びの空間・時間の様相が、やや細部に目をとめて詠われる。「眠りて黄犢の草を分かつ」は、一見すると無造作に投げ出されたような表現。しかし南宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』後集卷 11 が、盧仝詩（「山中」、『全唐詩』卷 389）の「陽坡 草軟かく厚きこと織るが如く、因りて鹿麕と相伴いて眠る」の二句が、王安石の本句においてははずか五字によって表出しつくされていると指摘するように、日だまりで小牛が草を食むのどかな光景、そして草の茵しとねに横たわったときの、暖かでこんもりとした心地よい感触がみごとに喚起される。注に触れたように「犢」「鷗」は超俗（あるいは仙界）のイメージを帯びるもの。しかしここでは、ことごとしき、あざとさを感じさせることなく、川べりのゆったりとした時間の流れのなかにとけ込んでいる。制作時期不詳であるが、おそらくは江寧帰隠後の作であろう。

（和田英信）

王安石-54 「惠崇畫」

「えすう が惠崇が画」

斷取滄州趣

移來六月天

道人三昧力

變化只和鉛

そうしゅう おもむき だんしゆ
滄州の趣を斷取して

うつ き ろくがつ てん
移し來たる六月の天

どうじん さんまいりき
道人の三昧力

へんか た えん わ
變化只だ鉛を和するによる

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 76

【押韻】

「天」：下平声 1 「先」、「鉛」：下平声 2 「仙」（同用）

【訳】

はるかな青い水辺のおもむきを切り取って、
この真夏のもとに移してきた。
僧の不可思議な力は、
さっと絵の具を混ぜるだけで、季節を変えてしまうのだ。

【注】

- 惠崇：僧の名 (?-1017)。絵画にすぐれ、北宋・郭若虚『図画見聞誌』巻 4「花鳥門」に「建陽の僧惠崇、^{ががん}鵝雁^{ろし}を画くを工とし、尤も小景を工とす、善く寒汀^{かんてい}遠渚^{えんしよ}を為し、蕭灑^{しょうしゃ}虚曠^{きょこう}の象は人の到り難き所なり」とある。北宋初期に詩名のあった「九僧」の一人でもある。
- 断取：切り取る。菩薩が廣大無辺の世界を、あたかも土をひねるように手につかみ取ること。補説参照。
- 滄州趣：青い水辺のおもむき。齊・謝朓「宣城に之かんとして新林浦を出で版橋に向う（之宣城出新林浦向版橋）」（『文選』巻 27）に「既に禄^{おも}を懐うの情を^{よろこ}權ばしめ、復た滄州の趣^{かな}に協う」、また、唐・杜甫は山水を描いたついたてを詠んで「興に乗じて滄洲の趣^{えが}を画か遣む」（「奉先の劉少府の新たに画ける山水の障の歌（奉先劉少府新畫山水障歌）」、『全唐詩』巻 216）という。「滄州」は隠者が棲むという水辺を指す。
- 六月天：真夏のこと。旧暦六月は新暦の七、八月にあたり、夏の盛り。
- 道人：僧のこと。ここでは惠崇を指す。
- 三昧力：「三昧」はサンスクリット語 samādhi の音訳。雑念を払い、一心不乱に事に臨むこと。「三昧力」はその結果得られた不可思議な力。
- 和鉛：顔料を調合する。

【補説】

この作品の主題である惠崇の絵画に描かれた世界がどのようなものであったかについて、私たちは王安石の古詩「純甫 僧惠崇が画を出だして予^{もと}に要めて

詩を作らしむ（純甫出僧惠崇畫要予作詩）（『李壁注』卷 1）からその一端をうかがうことができる。王安石が弟・純甫の求めに応じて書いたこの題画詩は、その冒頭部分に「早雲 六月 林莽みなぎ 漲るとき、我を移して儻然しゆくぜんとして洲渚おに墮とす」、「頗る疑う道人の三昧力、異域の山川 能く断取す」とあるなど、着想・語彙ともに重なる部分の多いことから、おそらく同一の絵画を対象としたものであろう。その前半には「黄蘆 低くくだ 摧けて 雪は土を翳い、鳧雁おお ふがん 静かに立ちて 儔ちゅうりよ ひき 侶を將しずいる」、「沙平らに水は澹か 西江の浦」、「暮気 舟に沈んで 魚罟ぎよこ暗し」などの句がみえる。つめたい岸辺に羽を休める水鳥のすがた、暮れなずむ静かな水面など、そこに描かれた世界は「鵝雁鷺鷥」「寒汀」「遠渚」を得意とし、その「すっきりと垢抜けて広々としたさま（蕭灑虚曠の象）」は余人の及ぶところではないとした『図画見聞誌』の評そのままのものであったようだ。本作では、そうした「惠崇画」の妙趣、エッセンスを「滄州の趣」の一語で捉えたもの。一句目「滄州の趣を断取して」の「断取」について、李壁は『維摩詰所説経』不思議品の一節「舍利弗よ、不可思議解脱に住す菩薩は、三千大千世界を断取すること陶家の右掌中に輪着するが如し。恒河沙世界の外てきかに擲過するも、其の中の衆生は覚えぬ知らず」をあげるが、王安石がこの一節を意識しているとすれば、この語は「不可思議な力をもったものが、広大な世界を、あたかも陶工が土をひねるように軽々と切り取ってきた」という意を含んでいよう。

描かれた世界と現実世界の関係について、たとえば唐の韓愈は「画工の妙手が常ならぬ世界をここに移してきたようだ（文工の画妙おの 各おの 極いたに臻り、異境 恍惚として斯に移る）」（「桃源圖」、『全唐詩』卷 338）といい、前述した王安石の古詩も「異域の山川 能く断取す」と述べて、画家の不可思議な力が遠くの世界を切り取って絵のなかに移してきたと述べる。これに対して本作の面白さはむしろ「絵画のもつ力が画中世界をはみだして現実世界を変えてしまった」と言うことにある。後半二句は、さっきまでの炎暑はどこへ消えたのだ、まるで画家の絵筆が、その不可思議な力で瞬く間に世界を塗りかえ、すがすがしい水辺に変えてしまったようではないか、と鑑賞者の驚きを伝える。結句の「変化」は、前述の古詩にみえる「方諸もて水ほうしよを承けて幻葉ととのを調え、生しやうしやう 絹に洒落して寒暑を変ず」の「寒暑を変ず」に同じ。

王安石-55 「蒲葉」

ほよう
「蒲葉」

蒲葉清淺水

杏花和暖風

地偏縁底縁

人老爲誰紅

ほよう せいせん みず
蒲葉 清淺の水

きようか わだん かぜ
杏花 和暖の風

ち へん なに よ みどり
地 偏なれば底に縁りてか 縁なる

ひと お た ため くれぬい
人 老いたれば誰が為にか 紅なる

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 77

【押韻】

「風」「紅」：上平声 1「東」

【訳】

菖蒲が清く澄んだ水辺に葉をのぼし、
杏はあたたかな春の風に花をひらく。
この辺鄙な地で何ゆえにこの縁は萌え、
年老いた私の前で誰の為にこの花は咲くのだろうか。

【注】

- 蒲葉：菖蒲の葉。李壁注は唐・白居易「夢遊春の詩に和す 一百韻（和夢遊春詩一百韻）」（『全唐詩』巻 437）の「菖蒲の水を尋ぬるに因りて、漸く入る桃花の谷」を引く。
- 清淺水：清く澄んだ浅瀬、その水辺。劉宋・謝靈運「斤竹澗従り嶺を越えて溪行す（從斤竹澗越嶺溪行）」（『文選』巻 22）に「蘋萍は沈深に泛かび、菰蒲は清淺を冒う」、唐・李德裕が「蘭蓀」（菖蒲）を詠んだ詩「春暮 平泉を思ふ雜詠二十首 芳蓀（春暮思平泉雜詠二十首 芳蓀）」（『全唐詩』巻 475）に「葉は抽ず 清淺の水」。
- 杏花：アズの花。春、白または淡紅色の花を開く。
- 和暖風：春の暖かな風。『楚辞』九思「傷時」に「風習習として和暖たり、

百草萌えて華榮たり」。

- 地偏：辺鄙な土地。劉宋・陶淵明「雜詩」其二（『文選』卷 30）に「心遠ければ地おの自ずから偏なり」。李壁注は隋・王胄「燕歌行」（『太平御覽』卷 591 所引『国朝伝記』）の「庭草人無く 随意に緑なり」および唐・杜甫の「王使君に陪して晦日江に泛かび黄家の亭子に就く（陪王使君晦日泛江就黄家亭子）二首」其二（『全唐詩』卷 228）から「人無く 碧草芳し」を引き、人の訪れも稀な地の意を読み取る。
- 縁底：なにによって、どんな理由で。唐・王維「愚公谷三首」其二（『全唐詩』卷 126）に「底に縁りてか愚谷と名づく、都て愚の成す所すべに由る」。

【補説】

前半二句の句作りについて、李壁注は唐・杜牧「恩徳寺」（『全唐詩』は許渾の作とする、卷 530）の「蘿洞 浅深の水、竹廊 高下の風」を襲ったものと指摘する。つる草の垂れかかる洞穴に浅く深く流れる水。竹林に囲まれた回廊を高く低く吹き抜ける風。名詞をならべて山深い寺をつつむ情景を描き出したこの杜牧の対句は、実体ある「蘿洞」や「竹廊」と、自在に形を変えつつ空間を満たす水や風を合わせて作られたという点でも、王安石の句づくりの手本となったものといえるのだろう。

また李壁は、「蒲葉」「杏花」の対の用例として、唐・儲光羲の「田家即事」（『全唐詩』卷 137）の「蒲葉は日に日に長く、杏花は日に日にしげに滋し。老農 此を看んと要するは、天時に違わざるをとうと貴べばなり」を挙げているが、「蒲葉」は古く『呂氏春秋』卷 26 に「冬至の後、五旬七日にして莒生ず。莒なる者は、百草の先生なり。是に於いて耕始まる」（『広群芳譜』は卷 88「莒蒲」の項に引く）とあるように、他の植物に先立って芽を伸ばし、農家に春の到来、農事の始めを告げる風物。また、「杏花」は、「屋上に春鳩鳴き、村辺に杏花白し」（唐・王維「春中田園作」、『全唐詩』卷 125）、「萋萋たり 麦隴 杏花の風、好きは是れ行春 野望の中」（唐・羊士諤「野望二首」其一、同卷 332）などにみえるように、春の田園を描く上での典型的な風物の一つであったようだ。これらを踏まえて読めば、前半二句は田園の春の野趣あふれる美をスケッチ風に描いたもの。水の「清浅」、風の「和暖」は、田園の春を包む穏やかで澄んだ陽光を連想させ、

ことばによって描かれた空間をより充実した、手触りのあるものになっている。

後半二句が問いかけるのは、その「蒲葉」の緑、「杏花」の紅についてである。人も稀な辺鄙な土地で一体何故に緑は生い茂るのか。愛でる人もいないのに、花は誰の為に咲くのかと。いや、実際には花をみつめる詩人はそこにいるのだが、四句目が、李壁が注に引く「今日 花前に飲む、甘心 酔うこと数杯。但だ愁う花に語有りて、老人の為に開かずと」（唐・劉禹錫「唐郎中宅にて諸公と共に飲酒し牡丹を見る（唐郎中宅與諸公同飲酒看牡丹）」、『全唐詩』巻 364）を踏まえているとすれば、花は老いた人のために咲くのではないし、老いた詩人は花を愛でるに相応しい人の数には入らず、いないも同然なのだろう。これらのことばは、田園の春の思いがけぬ美しさを前にした驚きにふと口をついて出たものを対句に仕立てたものにみえる。何ゆえに、誰の為にと問いかけつつ、王安石はむしろ、何ゆえでもなく、誰の為にでもないと言いたかったのではないか。自然の営みは、人の思惑とは関わりなく、時が満ちれば葉を茂らせ、花を咲かせる。前半二句に描いた田園の無垢なる美。その本質は、まさにそこにあるのだから、と。制作時期未詳だが、おそらく晩年、隠棲後の作。

（水津有理）

王安石-56 「芳草」

ほうそう
「芳草」

芳草知誰種

縁階已數叢

無心與時競

何苦縁忽忽

ほうそう し たれ う
芳草 知んぬ誰か種えし
ぎざはし よ すで そうそう
階 に縁りて已に数叢あり
こころ とし きそ な
心の時と競う無く
なに はなは みどり そうそう
何をか苦だ縁 忽忽たる

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 77

【校異】

「階」、『臨川先生文集』、『王文公文集』は「堦」に作る。

「忽忽」、『王文公文集』は「葱葱」に作る。

【押韻】

「種」「叢」「忽」：上平声 1「東」

【訳】

このかぐわしい草は誰が植えたのだろうか、
 きざはし浴いにもういくつもの草むらができています。
 季節の勢いと競い合う気もないのに、
 どうしてこんなにぼうぼう生い茂っているのだろう。

【注】

- 芳草：文字通りには、かぐわしいかおりぐさの意味であるが、ここでは単に草。あるいは、名もない草、雑草をわざとこのように呼んでいると考えられる。補説参照。また、王安石による芳草の用例は、王安石-1「聊行」参照。こちらでも、単なる草の美称として「芳草」が用いられている。
- 与時競：季節と競う。王安石「独り臥して懷有り（獨臥有懷）」（『李壁注』巻4）に「紅緑紛として眼に在り、流芳時と競う」とある。
- 忽忽：葱葱に通じる。草木が生い茂るさま。

【補説】

「知んぬ誰か種えし」と表現される「芳草」、これは、雑草のことを指している。雑草が、誰が植えたわけでもないのに、水をやったり肥料をやったりしたわけでもないのに、生命力盛んに生い茂るさまを詠んでいる。唐・李白「寄遠十一首」其九（『全唐詩』巻184）には、「長短春草の緑、階に縁りて情有るが如し」との句がある。こちらの詩の草は美しいものとしてとらえられ、草にさえ感情があるかのようにだと表現される。それにたいし、王安石は同じくきざはしに生える雑草のさまを「無心」と表現することで、雑草のたくましい生命力に感嘆している。前半では、敢えて「芳草」ときれいな言葉で描くことにより、後半の「無心」という語や「忽忽」という言葉が印象深く浮かびあがるように演出されている。

日常のなんでもないものを詩で詠み上げることからして、注にあげた王安石-1「聊行」や、「独り臥して懷有り」と同じく、江寧（現在の南京）隠棲後、

熙寧九年(1076)以降の作であると考えられる。

(佐野誠子)

王安石-57 「與徐仲元自讀書臺上過定林」

「徐仲元と讀書臺上自り定林に過る」	じょちゆうげん どくしょだいじょう よ ていりん よぎ
横絶潺湲度	おうぜつ せんかん わた
深尋犖確行	しんじん らくかく ゆ
百年同逆旅	ひゃくねん げきりよ おな
一壑我平生	いちがく わ へいせい

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻66

【校異】

題、『臨川先生文集』『王文公文集』では「與徐仲元自讀書臺上定林」に作る。

【押韻】

「行」「生」：下平声 12「庚」

【訳】

横切ってざあざあと流れる川を渡り、
深く尋ねてごつごつと険しき岩場に行く。
百年の人生など旅の仮住まいのようなものだけれども、
この丘壑こそが私の人生なのだ。

【注】

- 徐仲元：『宋詩紀事』巻22にみえる。徐徽、字は仲元、滁州（現在の安徽省）の人、嘉祐四年(1059)の進士、後に滁州独山に隠遁し、独山翁と号した。王安石には他に「次韻して徐仲元に酬ゆ（次韻酬徐仲元）」（『李壁注』巻26）、「徐仲元の梅を咏むに次韻す（次韻徐仲元咏梅）二首」（『李壁注』巻31）がある。
- 讀書台・定林：南宋・周応合『景定建康志』巻22によれば、蔣山の定林寺

の裏手にある山の峰に、梁・昭明太子の書台の跡があった。王安石はこの詩の他、王安石-68「題定林院窗」などでも「定林」に言及している。

- 横絶：横切る。唐・李白「蜀道難」（『全唐詩』巻 162）に「西のかた太白に当たりては鳥道有り、以て峨眉の巔を横絶すべし」とあるように、通りにくい場所を横切るときに用いる。
- 潺湲：水の絶え間なく流れる様子。
- 犖確：大きな石が重なり合いそびえる様子。唐・韓愈「山石」（『全唐詩』巻 338）に「山石は犖確として行径微かなり、黄昏に寺に到り蝙蝠飛ぶ」とある。
- 百年：「古詩十九首」其十五（『文選』巻 29）に「生年百に満たざるに、常に千歳の憂いいだを懐く」とみえるように、人生はしばしば百年と表現される。
- 逆旅：旅籠、かりの宿。『莊子』知北遊に「悲しきかな、世人の直に物の逆旅為るのみ」とあるように、人生を逆旅に喩える例は古来多くみえる。
- 一壑：一つの谷。『漢書』叙伝上に「漁釣に一壑をもってすれば、則ち万物は其の志を好まず。棲遲に一丘をもってすれば、則ち天下は其の楽しみかを易えず」とあるように、丘と壑とはいずれも隠遁し、あるいは山水を楽しむことのできる場所を指す。
- 平生：人生のこと。唐・韓愈、孟郊の「遣興聯句」（『全唐詩』巻 791）の韓愈句に「平生に百歳無く、岐路に四方有り」とみえる。

【補説】

詩題に定林寺の名前がみえることから、熙寧九年（1076）南帰後の詩であろうと推測される。前半では「潺湲」と「犖確」という畳韻語を用いて、山奥の雰囲気を描き出す。後半は「百年」と「一壑」で数字を対応させる。同時に、人生（百年）が「逆旅」であるとの『莊子』以来の発想は、「一壑」が人生（平生）であるとの結句と鮮やかに対応し、意味を転換する。すなわち、『莊子』にみえるような、外物の往来を見送ることしかできない人生のむなしさは消え、山水を楽しむ伸びやかさが伝わってくる。劉宋・劉義慶『世説新語』品藻にみえる、庾亮と自らを比較する晋・謝鯤の言葉に「一丘一壑、自ら之に過ぐと謂う」とあり、北宋末の『宣和画譜』山水敘論に「其れ胸中に自ら丘壑有りて、発して諸これを形容に見わすあらに非ざれば、未だ必ずしも此を知らず」とあるように、

「一丘一壑」あるいは「丘壑」は、士大夫の自負とするに足る境地だったのであろう。

(高芝麻子)

王安石-58 「病中睡起折杏花数枝二首」其一

「病中睡りより起き	杏花数枝を折る二首」
獨臥南窗榻	ひとり臥す南窓の榻
儻然五六句	儻然たり五六句
已聞鄰杏好	已に聞く隣杏好しと
故挽一枝春	故に一枝の春を挽く

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 65

【校異】

題、『王文公文集』は「庵中睡起二首」其一に作る。其一は「折花病中」として『王文公文集』巻 77 にも重載。

【押韻】

「句」「春」：上平声 18「諄」

【訳】

(病気のために) 南の窓辺の長椅子に横になったまま、
あっという間に五、六十日が過ぎてしまった。
もう隣家の杏の花がすっかり盛りだと聞いたので、
僅かながらも春を楽しもうと枝を引き寄せて手折ってみた。

【注】

- 榻：細長く低い寝台。また、長椅子。
- 儻然：あっという間に過ぎる。時間が短く感じる事。北宋・司馬光の「館に宿して雨に遇い諸同舎を懐う(館宿遇雨懐諸同舎)」(『司馬文正公伝家集』巻 6) に「佳雨 煩暑を濯ぎ、儻然として暁涼生ず」とある。

- 五六句：「句」は十日。「五六句」は五、六十日あまりをさす。
- 故：ことさらに。わざわざ。
- 挽：引く、引き寄せる。
- 一枝春：杏の一枝分の春。補説参照。

【補説】

中国詩人選集二集『王安石』（岩波書店 1962）所収の清水茂氏の年譜によれば、元豊七年（1084）春、王安石は病に伏し、神宗は国医を遣わして診察をさせたほどであったという。詩人は病のなかで楽しむこともなく過ぎてしまった春をわずかながらも味わおうと杏の花を手折る。詩題がそのまま内容となっている作品である。

第一句、冒頭の「独」字が、死と相対する孤独感を深める。「儵然」は詩語としての用例は少ないようで、『全唐詩』では白居易・孟浩然・劉叉の三例がみえ、いずれも「儵然」の字を用いる（意味は「儵然」に同じ）。

後半二句、語調は一転して明るくなる。季節はめぐり、病気も回復の兆し。「一枝（分ほどの）春」という控えめな表現に、ようやく体調が上向いてきた過程にあることを思わせる。「一枝春」は、劉宋・陸凱の詩「范曄に贈る（贈范曄）」を踏まえる。『太平御覧』巻 19 等に引く『荊州記』に、陸凱は『後漢書』を著した范曄と親しく、春まだ遅き西北の地・長安にいる范曄に、江南の梅の花を一枝手折り、馭馬を使って送らせたというエピソードが収録されている。そのとき花とともに贈った詩が、「花を折りて馭使に逢い、隴頭の人に寄与す。江南有る所無し、聊か贈る一枝の春」である。この詩は「梅の花に寄せた友情の詩」として有名になり、後世「一枝春」または「梅の花を手折る」は友人との別離や友情を表すものとして用いられるようになったという。王安石は病を得て楽しめなかった春の盛りを慈しんで、この有名な詩語を引いたのであろう。また、陸凱のいう「一枝の春」が春まだ浅い時期に咲く梅の花であるのに対し、この詩に詠まれる杏は春たけなわの季節に花を開く。杏の花は闘病生活の長さを、暗に示しているのである。一枝の杏の花に、病気からの回復と万物生ずる春の、生命の喜びがこめられているようである。

王安石-59 「病中睡起折杏花數枝二首」其二

びょうちゅうねむ	お	きょうかすうし	お	にしゅ
「病中睡りより起	き	杏花数枝を折る二首」		
獨臥無心處	ひと	ふ	むしん	ところ
	ひとり	臥す	無心の	処
春風閉寂寥	しゅんぷう	せきりょう	と	
	春風	寂寥を	閉ざす	
鳥聲誰喚汝	ちようせい	たれ	なんじ	よ
	鳥声	誰か	汝を	喚ぶ
屋角故相撩	おくかく	ことさら	あい	みだ
	屋角	故に	相	撩る

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 65

【押韻】

「寥」「撩」：下平声 3「蕭」

【校異】

題、『王文公文集』は「庵中睡起二首」其二に作る。

「處」、『臨川先生文集』『王文公文集』は「起」に作る。

【訳】

ただ一人、寢床で心を無にしていると、
春風が、わたしの部屋を静謐な空間に閉ざしてくれる。
鳥の声が聞こえるが、誰がお前たちを呼んだのだろうか。
屋根の隅でさかんに囀っているおかげで、わたしの心が乱されてしまった。

【注】

- 無心：無我・無心の境地。補説参照。
- 処：場所。また、時をさす。
- 屋角：屋根の隅。この語は唐詩に用例がほとんどみえず（『全唐詩』では杜甫と韓愈の二例のみ）、宋代以降、詩や詞に使用されるようになったものらしい。北宋・黄庭堅「呉宣義の三徑懐友に次韻す（次韻呉宣義三徑懐友）」（『山谷内集詩注』巻 1）に、「佳眠 未だ暁を知らず、屋角に晴哢を聞く」（「晴哢」は払暁の鳥の鳴き声）とある。

○ 撩：いどむ、からかう。

【補説】

連作の第二首。一首目が春を視覚（杏花）で感じたのに対し、二首目は聴覚（鳥の声）で感じる春。

一首目と同じく冒頭に置かれた「独臥」の二字が、閉ざされた空間の中にぼつんと存在する自分を、端的に表現している。「無心」は劉宋・陶淵明「歸去來辭」（『文選』巻 45）に「雲は無心に以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦きて還るを知る」とあり、ことさらな作為がないことをいう。しかしこの詩でいう「無心処」とは、心を無にした状態、仏教でいうところの無我、「大我」の境地をさすのではないだろうか。あるいは病床にいる自分の精神状態を、それに喩えているのかもしれない。王安石には他にも「無心」を用いた「即事二首」其二（『李壁注』巻 4）という、禅問答のような詩がある（雲は無心従り来たり、還た無心に向って去る。無心 尋ぬるに処無し、無心の処を覓むること莫れ）。

二句目は一句目を受けて、閉ざされた空間をいう。王安石は自分の病室を、「そよ吹く春風に閉ざされた静かな空間」と描写している。そこは他と切り離された、自分だけの空間なのである。三句目、無心の境地を破るのが、屋根の隅で騒ぐ春の鳥の声。「撩」の字、李壁は注に唐・韓愈「同冠峽に次る（次同冠峽）」の「嶺北を思うに心無し、猿鳥相撩すこと莫れ」（『全唐詩』巻 343）を引く。猿や鳥の、けしかけるような鳴き声に心がかき乱されることをいう。鳥の声は春を告げる、喜ばしいもののはずである。しかし作者はここでも第一首と同じ「故」を使い、「せっかく無心の境地を楽しんでいるのに、わざわざ邪魔しに来た」と、眉をひそめてみせる。いささかアマノジャクな表現で春の訪れを暗に喜ぶところが、この詩の面白みであろう。

『王文公文集』はこの詩の題を「庵中睡起」とし、一句目の「処」を「起」に作る。そうであれば、「物憂い春の朝、ぐずぐずと床の中にいる私に、小鳥たちが早く起きろとけしかけている」と読むこともできよう。

前作と同様元豊七年（1084）春頃の作。

（三瓶はるみ）

王安石-60 「送望之赴臨江」

「望之の臨江に赴くを送る」
黄雀有頭顱 黄雀に頭顱あり
長行万里餘 長行す万里の余
想因君出守 想う君の出でて守たるに因り
暫得免包苴 暫く包苴を免かるるを得ん

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 57

【押韻】

「余」「苴」：上平声 9「魚」

【訳】

黄雀にだって首はあるが、
遠くはるばる万里のあなたへ。
君がかの地の知事となれば、
付け届けの包みにされることもあるまい。

【注】

- 望之：呂嘉問、字は望之。王安石の腹心であり、新法とくに市易法の推進者であった。王安石には、本詩のほか贈詩が数篇ある。伝は『宋史』巻 355。
- 臨江：臨江軍（軍は、宋代の行政単位の一）。江南西路に属し、治所は現在の江西省樟樹市。元豊元年（1078）、知江寧府であった呂嘉問は、江東転運司の弾劾を受けて知潤州に降され、同三年（1080）さらに知臨江軍に左遷された（『続資治通鑑長編』）。
- 黄雀：マヒワ。黄色い小鳥。北宋・蘇轍「筠州二咏」其二「黄雀」（『欒城集』巻 10）に、秋に網で捕らえられ北方に送られて食用にされることを、「農夫網を拏ぐれば合圍に驚き、頸を懸け足を繋ぎ膚に衣無し。百箇 缶を同じくして仍お相依り、頭顱万里 行きて帰らず。北方の居人 羔豨に厭き、咀嚼して聊か発す一笑歎」と詠われている。次の注も参照。

- 頭顱：あたま。北宋・黄庭堅「黄雀」(『山谷外集詩注』巻 9) に「頭顱 復た万里を行くと雖も、猶お塩梅を和せし傳説の羹のごとし」。
- 万里：建安十二年 (207)、曹操に追われた袁尚・袁熙は遼東の公孫康を頼って逃げるが、公孫康は二人を殺し、その首級を曹操のもとに届ける。捕らえられた袁尚が寒さのため席を求めたとき、公孫康は「卿の頭顱 方に万里を行かんとす」と要求を拒みそのまま首を斬ったという(『後漢書』袁紹伝)。
- 包苴：植物の繊維で編んだ包み。魚肉などの食品を包む。転じて贈り物、あるいは賄賂、の意で用いる。殷の湯王が雨乞いの祭りを行った際、天に対して自らの過ちを責めた、いわゆる「成湯六事」のなかに、「苞苴 行わるるか、讒夫 興 なるか (賄賂や讒言が横行していないか) 」(『荀子』大略)。

【補説】

すでに宰相の任を辞し江寧に退居していた元豊三年 (1080)、呂嘉問が知臨江軍として赴任する際に贈ったはなむけの作。かつて市易法を拙速に推し進め政治に混乱をもたらしたとされる呂嘉問に対して、王安石はその後にも変わらぬ信頼を寄せていた。王安石-63「送呂望之」参照。

「黄雀に頭顱あり」という詠い興しは、次にいったい何が述べられるのだろうかというとまどいを読者にもたらすだろう。続く第二句の「長行万里」で、その「頭顱」が「万里」の彼方に届けられたという袁尚・袁熙のエピソードに結びつけられる。とはいえ、「黄雀」と「頭顱」とをつなぐ、その意味は不明のままである。

後半の二句で、第一句のところが解き明かされる。すなわち、君が知事として臨江に赴任すれば、賄賂などの不正が横行することもなくなり、「黄雀」もその肉が付け届けの包みにされることがなくなるだろう、と。注に挙げた蘇轍の詩などをみるならば、「黄雀」は南方の穀倉地帯で多く捕獲され、それが「万里」の彼方、北方に送られて食用に供されたとおぼしい。とくにその「頭顱」への言及は、王安石の本詩、蘇轍詩、黄庭堅詩に共通する。「黄雀」はとりわけその「頭顱」の食感が嗜好の対象であったのだろうか。

南宋・黄徹『碧溪詩話』巻 1 に本詩について、「使し能く其の言を行えば、則ち生類を虐げて以て口腹を飽かし、疲民を刻して以て権勢を肥やす者、寡から

ん。其の詩 纔かに二十字のみなるも、仁愛を敦くし、奔競を抑うること、皆な具われり。何ぞ多を以て為さん」という。

(和田英信)

王安石-61 「送丁廓秀才歸汝陽」

「丁廓秀才の汝陽に帰るを送る」	ていかくしゆうさい じょよう かえ おく
風駛柳條乾	かぜ はや りゅうじょうかわ
駝裘未勝寒	たきゆう いま さむ た
殷勤陌上日	いんぎん はくじょう ひ
爲客暖征鞍	きやく ため せいあん あたた

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 58

【校異】

題「汝陽」、『臨川先生文集』は「汝陰」に作る。

題、『王文公文集』は「送丁廓秀才三首」其三に作る。

「殷勤」、『臨川先生文集』、『王文公文集』は「慇懃」に作る。

【押韻】

「乾」「寒」「鞍」：上平声 25「寒」

【訳】

風がピューピュー吹いて柳の枝も乾ききっている、

ラクダのコートを羽織ってもまだまだ寒い。

やさしくしてやってくださいな、道を照らす太陽さん、

旅の空では、馬に乗った丁廓秀才を暖めてくださいよ。

【注】

- 丁廓秀才：詳細不詳。『李壁注』巻 45 に「丁廓秀才の汝陰に帰るを送る（送丁廓秀才歸汝陰）二首」という七言絶句二首がある。『王文公文集』巻 58 はこれら七絶と一緒にこの詩を取め、「丁廓秀才を送る（送丁廓秀才）三首」と

する。

- 汝陽：地名。現在の河南省洛陽市。汝陰であれば、現在の安徽省阜陽市。
- 駝裘：ラクダの毛で作った防寒着。
- 殷勤：慇懃に同じ。ていねいなさま。唐・李商隠「無題」（『全唐詩』巻 539）に「青鳥 殷勤に為に探り看よ」とある。
- 陌上：道。
- 征鞍：旅行者が乗る馬。ここではその馬に乗る丁廓秀才を指していると考えられる。唐・盧照鄰「大剣にて劉右史を送別す（大剣送別劉右史）」（『全唐詩』巻 41）に「相逢いて晩歳に属し、相送りて征鞍を動かす」とある。

【補説】

詩題の「汝陽」について、『臨川先生文集』は「汝陰」に作り、また『王文公文集』は詩題を「送丁廓秀才三首」其三とする。巻 45 の「送丁廓秀才歸汝陰二首」も合わせて考えると、詩題はおそらく「汝陰」が正しいのであろう。しかし、それがわかって丁廓秀才なる人物の詳細は不詳である。「丁廓秀才の汝陰に帰るを送る二首」其二の結句には、「豈に能く冶城の潮をおも意う無からん」とあり、冶城は南京を指すため、王安石は、南京の地で丁廓秀才を見送ったことになる。詩題に「帰る」とあることから、丁廓秀才は、志を果たせず失意の中故郷に帰るのではないかと推測される。

前述の通り王安石が南京にいることから、江寧（現在の南京）隠棲後、すなわち熙寧九年（1076）以降の作であろう。

柳は唐・王維「元二の安西に使いするを送る（送元二使安西）」（『全唐詩』巻 128 は題を「渭城曲」とする）の「渭城の朝雨軽塵を浼し、客舎青青 柳色新たなり」（『全唐詩』は「柳色新」を「楊柳春」に作る）に代表されるように、別れの場面には欠かせない樹木である。王維の詩では雨に濡れて青々としたみずみずしい柳の葉であったが、王安石の柳は乾いている。李壁注は唐・皎然「盧使君に陪して樓に登り方巨之の京に還るを送る（陪盧使君登樓送方巨之還京）」（『全唐詩』巻 815）の「春風潮水漫たり、正月柳条寒し」の句を引用する。春のはじめ正月であれば、柳の葉もまだ芽吹かないだろう。「柳条乾き」というのは、水気がなく、柳の葉もまばらなことを表現している。すると、この王安石

の詩も皎然と同じく、季節は正月、あるいは冬の終わりなのだと推測できる。

転句・結句は、王安石から太陽への呼びかけとなっている。小川環樹「自然は人に好意を持つか」（『小川環樹著作集』第3巻、筑摩書房1997、初出1961）によると、自然を擬人化した表現は唐詩から多くみられるようになるものの、自然が人間に好意を持っているとの表明は、宋詩に多いとする。本詩で王安石が、太陽にやさしくしておくれ、と呼びかけるのには、そのような自然観の変化が反映されている。

（佐野誠子）

王安石-62 「送王彦魯」

おうげんろ おく
「王彦魯を送る」

北客憐同姓

南流感似人

相分豈相忘

臨路更情親

ほっかく どうせい あわれ
北客 同姓を 憐み
なんる に ひと かん
南流 似たる人に 感ず
あいわ あ あいわず
相分かるも 豈に 相忘れんや
みち のぞ さら じょうした
路に 臨みて 更に 情親しむ

【収載】

『臨川先生文集』巻26、『王文公文集』巻58

【押韻】

「人」「親」：上平声 17「真」

【訳】

かつて北の都に身を寄せたわたしたちは、同姓のよしみで心を交わした。

南の地に流されゆくあなたは、きっとわたしに似ている人に懐かしさを覚えるだろう。

離れ離れになるからといって、どうして忘れることができよう。

別れがいよいよ差し迫ったいま、惜別の情が深まるばかりである。

【注】

○ 王彦魯：王洸之のこと。彦魯はその字。王介の子。常山の人。王安石に学ん

だことがある。国子監、直講潁川団練推官に就いたが、太学生である章公弼の賂を受け、規則を無視し、より上のクラスに彼を入れた。このことが禍となり免職される。『続資治通鑑長編』元豊二年(1079)十一月の条に「庚午の詔に国子監、直講潁川団練推官の王沆之を除名し、永^{とこし}えに叙に収めず」とみえ、『宋史』に伝はない。この詩の他に王安石は「清涼寺に王彦魯を送る(清涼寺送王彦魯)」(『李壁注』巻5)と題する詩も詠んでいる。

- 北客：北客は、南にきた北人、北にきた南人、いずれの意味でも通るが、ここでは南から北にきた客の意ではないか(そうとった方が第二句との対が生きる)。王安石も王彦魯もともに南人。
- 同姓：同じ姓を持つ者同士のこと。『宋書』王懿伝に「北土……同姓を重んず、之を骨肉と謂う」とある。また、唐・劉長卿「戯れに干越の尼子の歌を贈る(戯贈干越尼子歌)」(『全唐詩』巻151)「鄱陽の女子 年十五、家は本は秦人にして今 楚に在り」に始まり、その女子が「北客……相逢えば秦と姓するかと疑う」とある。王安石と詩が贈られる相手である王彦魯はともに王の姓。
- 南流：南に流された人。ここでは王彦魯を指すと思われる。元豊七年(1084)ころ、蘇軾が彼と京口(現在の江蘇省鎮江市)で会った際に、彼の亡父王介を偲んで「王中甫哀辭」(『合注』巻24)を作り、王彦魯に贈っている。その自序に「時に、沆^{つみ}之もまた、鼻を以て錢塘(現在の浙江省杭州市)に謫家せらる」とあり、彼が罰せられ、南に遷ったことがわかる。
- 似人：旧友・旧知に容貌が似ている人。『莊子』徐無鬼「子、夫の越の流人を聞かずや。国を去ること数日、其の知る所を見て喜び、国を去ること旬月すれば、嘗て国中に見し所の者を見て喜び、期年に及ぶや、似たる人を見て喜ぶ」を踏まえる。
- 臨路：別れのとき。古来より人を見送るとき、道の枝分かれしたところまで送ることから、別れに臨むことを「臨路」、「臨岐」という。

【補説】

王彦魯が罪を得て、南に流される際に贈った作。ともにかつては「北客」として都に身を寄せていたが、王彦魯はこれからひとり「南流」として南に赴く。

「北客」が同姓に抱く親しみ、「南流」が旧知を思う気持ちが、二人の強いつながりを伝える。古来より同姓は肉親ほどに親しいと考えられてきたが、我ら二人も同じ姓を持つ、と王安石は語りかける。続く第二句では南に行く王彦魯の立場に立ち、『莊子』にみえる越の流人の話を踏まえ、向こうの地で、私に似ている人を見かけたら、きっと懐かしさが湧き上がるだろう、とことばを重ねる。

後半二句はこれを承け湧きおこる離別の思いを詠う。「相忘」一語は、唐・張籍「姚怱ふに贈る（贈姚怱）」（『全唐詩』卷 383）「離別 復た道いう勿れ、貴ぶ所は相忘れざること」にみえるように、送別詩に用いるときは「不」や「莫」といった否定詞で打ち消されることが多い。ここでは、より語調の強い反語「豈」を用いて、君は遠くへ行ってしまいが、情は途切れるはずなどない、と述べる。離情の深まりが続く第四句によって掬い上げられ、別れがたい気持ちが伝わってくる。罪に問われてもなお見放すことなく、こうした詩を贈ってくれる王安石に、王彦魯は慰めを得たことだろう。

詩は、王彦魯が免職された元豊二年(1079)、あるいは、それからほどないころの作品であろう。

(鄭月超)

王安石-63 「送呂望之」

りよぼうし おく
「呂望之を送る」

池散田田碧	いけ でんでん あお さん 池は田田たる碧を散じ
臺敷灼灼紅	だい しゃくしゃく くれなゐ し 台は灼灼たる紅を敷く
年華豈有盡	ねんか あ つ あ 年華豈に尽くる有らんや
心賞亦無窮	しんしょう またきわ な 心賞も亦窮まる無し

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』卷 58

【押韻】

「紅」「窮」：上平声 1「東」

【訳】

池には豊かに茂る葉の碧が点々と見え、
 台には鮮やかな花の紅が一面に広がっている。
 春景が尽き果てるなどあるはずもない、
 春景を愛する私たちの心もまた果てることはないのだから。

【注】

- 呂望之：呂嘉問のこと。補説及び王安石-60「送望之赴臨江」参照。
- 田田：蓮の葉が茂っている様子。樂府「江南に蓮を採るべし（江南可採蓮）」（『宋書』樂志）の「江南に蓮を採るべし、蓮葉は何ぞ田田たる」以来広く用いられ、唐・姚合「南池嘉蓮」（『全唐詩』巻 502）の「芙蓉の池裏に葉は田田たり、一本双枝 碧泉に照る」など、蓮の葉を描くときに特有の表現として定着している。よって、王安石は蓮とは言明していないが、蓮の葉として解釈した。
- 台：池のあたりにある楼台。池台。
- 灼灼：花の明るく鮮やかな様子。『詩経』周南「桃夭」の「桃の夭夭たる、灼灼たり其の華」に由来する表現。必ずしも桃の花だけに用いられる語ではないが、「田田」にあわせて「灼灼」も典故に従うものと解釈したい。ここでは、桃の花びらが池台のあたり一面に散り敷いている様子。
- 年華：美しい春の景色。桃の花が散るのは晩春であり、蓮の葉が生い茂る景は多くの場合、初夏のものとして描かれるが、ここでは春が終わろうとしている時期の眺めを指す。「西池に白二十二の東歸するを送り兼ねて令狐相公に寄す聯句（西池送白二十二東歸兼寄令狐相公聯句）」（『全唐詩』巻 790）の唐・張籍の句に「春尽きんとして年華少なく、舟通らんとして景気長し」とあるように、本来であれば春の終わりと共に「年華」は尽きる。
- 心賞：自然の美を眺め、好ましく思うこと、あるいはその気持ち。劉宋・謝靈運「南亭に遊ぶ（遊南亭）」（『文選』巻 22）の「我が志は誰にか亮あきかならん、賞心は惟だ良知ならん」、唐・白居易「湖亭に水を望む（湖亭望水）」（『全唐詩』巻 439）の「憐むべし心の賞する処、其れ独遊を奈何せん」のように、多くの場合、誰かと共に楽しむことが想定されている。王安石-11「題何氏宅園亭」に「但だ心をして賞有らしめば、歲月渠それがうなが催すに任す」とある。

【補説】

呂望之とは、新法を施行したときの王安石の腹心、呂嘉問のこと。『王荊公詩注補箋』は、この詩を王安石-60「送望之赴臨江」と同様、呂望之が知臨江軍になったときの送別詩であろうとする。熙寧十年(1077)に王安石が宰相を辞めて江寧府(現在の南京)に移ると、呂望之も知江寧府となったが、元豊元年(1078)に罪に問われて潤州に移されることとなり、元豊三年にさらに知臨江軍におとされた。

前半二句は、萌え初めた碧の蓮の葉と、散り尽くした紅の桃の花という鮮やかな色彩の対句である。後半二句は「年華」と「心賞」の無限とを対とし、さらに詩全体では、前半二句が叙景、後半二句が情趣という対となっている。作りこまれた品のいい詩であるが、送別詩でありながら、一切、送別の言葉がみえない。すでに引退しているとはいえ、新法党の首領であった王安石からは、かつての腹心の呂望之に、恨み言めいた別れの言葉は語れなかったであろうし、言葉にならぬ想いばかりが募ったに違いない。別れの言葉に代えて描かれたのが「年華」と「心賞」の対である。春の景物「年華」が尽きぬはずはないが、それを敢えて尽きぬと言うのは、春の景物を共に味わう「心賞」、ひいては呂望之との交情が無限であって欲しいとの王安石の切なる願いが込められていたからに相違ない。

(高芝麻子)

王安石-64 「別方邵秘校」

ほうしょうひこう わか
「方邵秘校と別る」

迢迢建業水

中有武昌魚

別後應相憶

能忘數寄書

ちょうちょう けんぎょう みず
迢迢たる建業の水
うち ぶしょう うおあ
中に武昌の魚有り
べつご まさ あいおも
別後も応に相憶うべし
よ しば しょ よ わす
能く数しば書を寄するを忘れんや

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 58

【押韻】

「魚」「書」：上平声 9「魚」

【訳】

とうとうと流れる建業の川、
 その中には武昌の魚がいる。
 別れたあとも、私のことを思っていてくれるでしょう、
 きっと、たびたび手紙を武昌の魚の腹に入れて寄こしてくれますよね。

【注】

- 方邵秘校：方邵は詳細不詳の人物。秘校は、秘書省校書郎の簡稱。校書郎は、元は本来朝廷にて書籍の校正の職務を行う官吏を指したが、北宋前期には寄禄官として、単に当人の位階を示すものとなっていた。元豊の改革で官僚制度は大きく変わるが、ここでは単に相手の官位を称して相手に敬意を示したものかと考えられる。
- 迢迢：原義は、「古詩十九首」其十（『文選』巻 29）の「迢迢たる牽牛星（迢迢牽牛星）」に代表されるように遙か遠いさま。ここでは、そのみならず、水の流れが延々と続くさまの意が込められている。唐・杜牧「揚州の韓綽判官に寄す（寄揚州韓綽判官）」（『全唐詩』巻 523）に「青山 隱隱として水迢迢たり、秋尽きて江南草木澗^{しほ}む」とある。
- 建業水・武昌魚：建業は現在の南京。武昌は現在の湖北省鄂州。武漢の近くにある町。三国時代、呉の孫皓が、建業から武昌に遷都をしようとした。そのとき、陸凱が「寧ろ建業の水を飲むも、武昌の魚を食せず。寧ろ建業に還りて死するも、武昌の居に止まらず」という童謡がはやっていることを紹介し、人びとが遷都をいやがっていることを知らせた（『三国志』陸凱伝）。補説参照。

【補説】

語注にあげた武昌魚は、言葉のみが用いられ、典故の故事は反映されていない。内容の背景には、『文選』巻 27 に収められる楽府「飲馬長城窟行」の故事がある。「飲馬長城窟行」には、「客遠方従り来たりて、我に双鯉魚を遺る、児

を呼びて鯉魚を烹せしむるに、中に尺素の書有り。長跪して素書を読む、書上竟に何如ぞ。上には餐食を加えよと有り、下には長く相憶うと有り」とある。魚の中に絹に書かれた手紙が入っていて、末尾には、「相憶」と書かれているのである。そのため、武昌の地で魚の腹の中に手紙を入れて放ってくれば、建業で手紙を読めると解釈した。武昌も建業も長江沿いにある。

『李壁注』巻 41 には「方劭秘校を送る（送方劭秘校）」という七絶がある。「邵」と「劭」と字が違うが同一人物で間違いないだろう。そちらでは、「武昌の官柳年年好し、他日春風此の時を憶わん」との句がある。方邵なる人物は、武昌で官職につくために、建業を去ったことがわかる。建業の地名が出てくることから、江寧（現在の南京）隱棲後の作であろう。

（佐野誠子）

王安石-65 「梅花」

ばいか
「梅花」

牆角數枝梅

凌寒獨自開

遙知不是雪

爲有暗香來

しょうかく すうし うめ
牆角 数枝の梅
かん しの ひとりひら
寒を凌いで 独自開く
はる し こ ゆき
遙かに知る 是れ 雪ならざるを
あんこう き あ ため
暗香の来たる有るが為なり

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 77

【押韻】

「梅」：上平声 15 「灰」、「開」「来」：上平声 16 「吟」（同用）

【訳】

垣根のすみの梅の木。その数本の枝が、
寒さをついて花をつけている。
遠くからでもそれが雪ではないとわかるのは、
ほのかな香りが漂ってくるからなのだ。

【注】

- 牆角：垣根のかど。
- 凌：うち勝つ、おしのける。
- 暗香：ほのかに漂ってくる香り。「暗香」と言えば、北宋・林逋^{りんぽ}の「山園小梅二首」其一「疎影 横斜 水清浅、暗香 浮动 月黄昏」（『林和靖先生集』巻 2）が夙に有名である。月夜と梅の香りのペアは、日本でも凡河内躬恒^{おおしこうちのみつね}の「春の夜の闇はあやなし 梅の花 色こそ見えね 香やはかくるる」（『古今和歌集』巻 1）などに詠まれている。

【補説】

庭の梅、寒さ、色、香り。この詩は情景・用語ともに前漢・蘇武「梅花落」（『樂府詩集』巻 24）の「中庭 一樹の梅、寒多くして 葉未だ開かず。祇だ言う花は是れ 雪かと、悟らず 香の来たる有るを」と重なる。前半二句は眼前の風景。枯れて黒々とした木々の中にある「白いもの」はことさら人の目を引く。後半二句は梅の花の色と季節の寒さから、雪と花を結びつける。しかし王安石は蘇武の「白い花が雪のようだ」という表現にひねりを加え、否定詞「不」の位置を換えて「白いものは雪ではない、なぜならば」とすることで梅の花の香りをさらに深く表出しているのである。李壁は「介父（介甫。王安石の字）は略して転換するのみ。或いは偶たま同じうするなり」という。蘇武の詩の語句を換えただけにせよ、王安石らしいひねりが効いている詩である。

王安石のこの詩の制作について、南宋・釈惠洪『冷齋夜話』巻 5 荊公梅花詩に「荊公嘗て一高士を訪ねて思わず、其の壁に題して曰く、牆角数枝の梅、寒を凌いで特地に開く。遥かに知る是れ 雪ならざるを、暗香の来たる有るが為なり」という。「特地」とは「ことさらに」の意であるが、梅の花は早春他の花に先駆けて開くことから、ここでは「独自」という語がよりふさわしく感じられる。

（三瓶はるみ）

王安石-66 「紅梅」

こうばい
「紅梅」

春半花纔發

多應不奈寒

北人初未識

渾作杏花看

はるなか はなわず ひら
春半ばにして花纔かに発く
おほ まさ かん た
多く応に寒に奈えざるべし
ほくじんもと いま し
北人初より未だ識らず
す きょうか な み
渾べて杏花と作して看る

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 77

【押韻】

「寒」「看」：上平声 25「寒」

【訳】

春のさかりに花はようやく綻ぶ、
きっと寒さに耐えられないからだろう。
北人はこれまで見たこともなく、
すっかり杏の花だと思っている。

【注】

- 春半：春のなかば過ぎ。
- 多応：たぶん、おそらく。
- 奈：たえる。耐と同義。

【補説】

紅梅といえば、北宋・石曼卿が「桃と認むるに緑葉無く、杏と弁ずるに青枝有り」と詠うのを、「詩老は知らず梅格の在るを、更に緑葉と青枝とを看んや」と切って捨てた蘇軾の言が知られる（「紅梅三首」其一、『合注』巻 21）。たしかに「緑葉」「青枝」の有無を挙げて、桃や杏との見分け方を説くかのような石曼卿の詩句は、「村学究の体」（『東坡志林』巻 10）といわれても仕方あるまい。

その紅梅の開花時期がふつうの梅よりも遅いことと、花色が北人にとって見慣れぬものであったため、多く杏と見間違えられることを詠う王安石の本作も

また、詠物の作としてはやはり極めて素朴な詠いぶりと言ってよかろう。北宋期、とくに北方においては、紅梅は珍しいものであったようだ。もと呉の地の名物であったものを晏殊が都の屋敷に移植し、やがてそれが広まったものという（南宋・蔡條『西清詩話』、南宋・鄭虎臣『呉都文粹』）。『西清詩話』に引く晏殊の詩が「若し更に遅く開くこと三二月ならば、北人 応に杏花と作して看ん」と詠うその趣向は本作と同様である。

両詩の背景には、北人に対する南方出身者の文化的優越感が読み取れる。晏殊の詩句について、ある客人が「公の詩は固より佳なるも、北俗を待つは何ぞ浅なる」と述べたのに対し、晏殊は笑って「僮父 安んぞ然らざるを得んや」と返したという。北の田舎者はきっと杏とってしまうはずだ。それをそのまま詠ったに過ぎないということか。「僮父」は、呉出身の陸機が北方の文人を蔑んで呼んだことばとして知られる。晏殊も王安石と同じく、撫州臨川の出身であった。

(和田英信)

王安石-67 「病起過寶覺」

「病より起ちて宝覺に過る」	
執手乍欣悵	手を執りて 乍ち欣悵す
霜毛應更新	霜毛 応に更に新たなるべし
依然舊童子	依然たり 旧童子
卻想夢前身	却って想う 前身を夢むと

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 62

【押韻】

「新」「身」：上平声 17「真」

【訳】

手をとりあつては、喜んだり涙ぐんだり、

私の鬢のあたりの髪がさらに白くなったとお気づきのことでしょう。

昔のまま変わらぬ童のようなあなたのすがたに、

あたかも前世での出来事を夢にみているように思われます。

【注】

- 宝覚：僧の名。『李壁注』巻 22「定林に宿して宝覚に示す（宿定林示寶覺）」の題下注に「宝覚は即ち無外、名は務周」とある。また、清・査慎行は、北宋・蘇軾「宝覚に答うに次韻す（次韻答寶覺）」（『合注』巻 24）の注で「金陵・定林寺の僧なり。王荊公と与に遊び……臨川集中に贈答の詩多し」と述べる。
- 執手：（別れや再会に際して）相手の手をとること。『詩経』鄭風「遵大路」に「大いなる路に遵いて、子の手を摻え執つ」、唐・李白「金陵江上にて蓬池の隠者に遇う（金陵江上遇蓬池隠者）」（『全唐詩』巻 182）に「共に語りて一たび手を執り、留連して夜將に久からんとす」。
- 乍欣悵：喜んだり悲しんだりする。「乍」は「乍有乍無」のように、相反する動作が次々を行われることをいう。「乍欣悵」は「乍欣乍悵」に同じ。唐・韓愈「岳陽樓にて寶司直に別る（岳陽樓別寶司直）」（『全唐詩』巻 337）に「主人 童孩の旧、手を握りて乍ち欣悵」。
- 霜毛：白髪。唐・白居易「白髪」（『全唐詩』巻 443）に「雪髪は梳るに随いて落ち、霜毛は鬢を繞りて垂る」とあるように、特に鬢のまわりの白髪を指す。老齢による容貌の変化を実感させるものとして用いられることが多い。
- 旧童子：昔の童子。唐・王維「休仮に旧業に還り便ち使す（休假還舊業便使）」（『全唐詩』巻 125）に「時輩は皆長年、成人は旧童子」。ここでは「昔とかわらぬ童子のようなすがた」の意。
- 前身：仏教語で前世の意。

【補説】

病癒えて、なつかしい友人と再会したときの心情をのべた作。宝覚は王安石の詩にしばしば登場する人物の一人で、金陵の定林寺の僧であつたらしい。この作品の特徴は、それぞれの句がほぼそのままの形で唐人の作品中に見出せることである。たとえば一句目「執手乍欣悵」は、語注にもあげた韓愈の「握手

乍欣悵」とほぼ同じ。二句目「霜毛応更新」も、白居易「春遊」（『全唐詩』巻 453）「朱顔 去りては復た去り、白髪 新たにして更に新たなり」の「白髪新更新」、唐・崔塗「蜀城の春（蜀城春）」（同巻 679）の「清鏡 照らす能わず、鬢毛 愁いによりて更に新たなり」の「鬢毛愁更新」などとの類似を指摘できる。三句目にいたっては、楊巨源「春日 劉評事と与に故証上人の院を過る（春日與劉評事過故証上人院）」（同巻 333、この作品は巻 270 に重収され、戎昱「衡陽の春日 僧院に遊ぶ（衡陽春日遊僧院）」とする）「依然たり 旧童子、相送りて花陰を出ず」の前の句をそっくり襲ったもの。結びの句は、劉禹錫「初めて長安に至る（初至長安）」（同巻 357）の「行きて旧処を経る毎に、却って想う前身に似たりと」、白居易「昨日復た今辰（昨日復今辰）」（同巻 460）の「経る所は多く故処なるも、却って想う前身に似たりと」などにみえる「却想似前身」を一字換えて「却想夢前身」としたものであろう。

王安石は先人の詩句を集めて詩をつくる「集句」の手法を得意としたが、この作品も先人の句のをただコラージュしたかのようににみえて、実は随所に小さなひねりや工夫がある。たとえば上にあげた「依然旧童子」は、文字こそ全く同じだが、楊巨源の作品は「昔と同じ寺の童僕」の意であり、王安石はこれを友人である僧・宝覺の「昔と変わらぬ童子のようなすがた」として用いる。また結句は、白居易らの詩句の「似」の一字を「夢」に換えたことで、夢の中に落ちたような非現実感が、より感覚的に表現されているようにみえる。病が癒えたとはいえすっかり老いを感じはじめた詩人と、童子のように変わらぬ姿の宝覺。「夢」の一字は、時間の流れを歪ませたような不可思議な感覚、現実の宝覺を目の前にしつつも消えない夢のような心地を、より直接的に読者に味わわせてくれるのである。

李壁は、「執手」の文字が『法華経』入法界品にみえることから、三句目の「旧童子」は善財童子を意識して用いたものと指摘するが、ここでは単に僧の若々しいすがたとして理解した。制作時期は未詳だが、場所を江寧とし、病明けとすれば、鍾山隱棲後、元豊七年（1084）ごろの作か。

（水津有理）

王安石-68 「書定林院窗」

「定林院の窓に書す」

道人今輟講

道人今講を輟め

卷袂寄松蘿

袂を巻きて松蘿に寄る

夢説波羅密

夢に波羅密を説く

當如習氣何

當に習氣を如何にかすべき

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 63

【押韻】

「蘿」「何」：下平声 7「歌」

【訳】

遠大師はいま説法を一段落なさって、
僧衣を脱ぎ片付けて、松につた絡む定林寺でお休みになる。
夢の中では波羅蜜の説法をしておられたという、
しみついた性というものはどうしようもないものですなあ。

【注】

- 定林院：鍾山の山中にある定林寺のこと。王安石-57「與徐仲元自讀書臺上過定林」など多くの作品にみえる。
- 輟講：講義を一段落する。南宋・大川普済『五灯会元』巻 5 に「座主は講を輟むること旬日にして、室内に端然として静慮す」とある。
- 道人：僧侶のこと。ここでは自注にみえる遠大師を指す。補説参照。
- 卷袂：「袂」は一般に衣の裾、あるいは花を盛る器を指し、李壁も『浄土経』を引いて、散華の花を盛る器と解している。だが、ここでは、北宋・蘇軾「広愛寺に過りて三学演師の楊惠之の塑せる宝山 朱瑤の画ける文殊普賢を観ずるを見る（過廣愛寺見三學演師觀楊惠之塑寶山朱瑤畫文殊普賢）三首」其一（『合注』巻 9）の「敗蒲は翻覆して臥し、破袂は再三に連ぬ」などの用例を踏まえ、「袂」を僧衣の意味で理解し、南宋・洪邁「再び東首座に和す（再和

東首座)」（『野処類藁』巻下）の「归来 苦雨 梅子熟し、袂を巻きて深く臥す 蛮煙の中」などから、夜に休むために僧衣を脱ぎ片付ける意味で解釈した。

- 松蘿：松に絡まるつた。転じて山林。唐・孟郊「擢第後東歸して懷を書し座主呂侍御に献ず（擢第後東歸書懷獻座主呂侍御）」（『全唐詩』巻 377）に「松蘿居むべしと雖も、青紫終に当に拾うべし」とある。ここでは人里離れた定林寺を比喩的に表す。
- 波羅蜜：波羅蜜とも書く。修めるべき徳目。六波羅蜜であれば、布施、自戒、忍辱、精進、禪定、般若の六つ、十波羅蜜であれば、六波羅蜜と方便善巧、願、力、智をあわせた十の徳目を言う。
- 習気：習い性。あるいは仏教語で煩惱を言う。習気。

【補説】

この詩には王安石の自注が附されている。それによると「遠大師に問う。師云う、夜来夢に与に十波羅蜜を説くと」とあり、定林寺の遠大師という僧との会話に基づいて作られた詩であることが分かる。夢に波羅蜜を語るという着想は、李壁も指摘している通り、北宋・雪竇(980-1052)の言葉を集めた『明覚禪師語録』巻 2 に「舍利仏 須菩提に問う、夢中に六波羅蜜を説く。覚時とはれ同じか是れ別かと。須菩提云う。此の義 幽深なり。吾説く能わず。汝往きて弥勒に問えと」とあるのを踏まえているのであろう。

『李壁注』巻 43、『臨川先生文集』巻 29 にも「定林院の窓に書す」と題する七絶詩があり、自注として「安大師と同宿し、既暁なり。安大師に問う、昨夜何の夢か有ると。師云う、数夢有るも皆忘記すと」とある。一方、『王文公文集』巻 63 は、七絶「定林院の窓に書す」の次に「又」と題してこの五絶を配し、詩の手前にそれぞれ王安石自注を附している。二つの詩はいずれも定林寺の僧侶の言葉に基づいて作られた、夢にまつわる詩であることから連作と考えられ、五絶の自注も、七絶の自注を踏まえて読む方が状況がより分かりやすい。

制作年代は江寧府（現在の南京）に隠遁した熙寧九年(1076)以降と考えられる。

(高芝麻子)

王安石-69 「題徐浩書法華經」

「徐浩の法華經を書するに題す」

一切法無差

いっさい ほう さ な
一切の法に差 無く

水牛生象牙

すいぎゅう ぞうげしやう
水牛に象牙 生ず

莫將無量義

ぶりやうぎ も
無量義を將 って

欲覓妙蓮華

みやうれんげ もと ほつ なか
妙蓮華を 覓めんと 欲する 莫れ

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 69

【校異】

題、『王文公文集』は「示無著上人」に作る。

【押韻】

「差」「牙」「華」：下平声 9「麻」

【訳】

この世のあるゆる物事は、本質的には差別が無いのだ、
それは、水牛が象牙を生やすようもの。
だから無量義（説法の方便）でもって、
妙蓮華（無上の悟り）を求めるようなことはおやめなさいよ。

【注】

- 徐浩：唐代中期の書道家。字は季海、越州（現在の浙江省紹興市）の人。文辞に優れ、若くして科擧の明経科に挙げられる。書に巧みで楷書と隸書を良くした。肅宗の寵愛を受け、皇帝の詔勅のほとんどが徐浩の手になったと言われる。しかし晩年は財貨を貪り、また妾を溺愛して政治を乱し、評判を貶めたという。代表作に「不空三藏和尚碑」（西安・碑林蔵）などがある。『旧唐書』『新唐書』に伝があるほか、『全唐詩』にも詩二首を採録する。
- 一切法：すべての法。また、ありとあらゆるものごと。
- 水牛生象牙：この語の意味はよくわからないが、ありきたりの物の中に真理が宿ることの喩えか。仏教の偈にみえる言葉。北宋・永明延寿『宝鏡録』に

収録する「行路易十五首」其十一に、「如来真仏の処を覓めんと欲すれば、但だ見る石牛の象兎を生ずるを」とある。

- 無量義：数限りない意味をもつ教え。衆生の性根は一人ひとり異なるため、基本となる教えをそれぞれの性根に応じ、さまざまに変化させて説いたもの。『無量義経』説法品に、「性^{しょうよく}欲無量なるが故に説法無量なり。説法無量なるが故に義も亦無量なり。無量義とは一法より生ず。その一法とは即ち無相なり」とある。『無量義経』は『法華三部経』の一つで、法華経の序論にあたる開経とされる。すべての法門は「無相」の一法より生じることを説いたもの。
- 妙蓮華：霊妙なる蓮華。何ものにも染められていない、清浄無垢なもの。ここでは根本的な一義、「無相」をさす。

【補説】

徐浩は唐代の著名な書家であり、唐宋以降その書風に学んだ者は多い。蘇軾や黄庭堅もそうした一人であったようだ。

全句に仏教語を配置した構成で、諸説に惑わされず、執着心を捨てて、物事の本質を追究しなさいと、法華経の教えの核心を詠む。二句目の「水牛生象牙」の意味はよくわからない。王安石と同時代の黄庭堅は「郭功甫 楊次公の家の金書細字経を得て予に贄を作るを求む（郭功甫得楊次公家金書細字経求予作贄）」（『山谷別集』巻 2）で同じく法華経の世界を詠んでおり、最後を「水牛象牙を生じ、墮ちて諸仏数に在り」と結んでいることから、あるいは当時、仏法を学んだ人士にはよく知られた喩えであったのかもしれない。法華経では、すべての物事は相対的なものではなく、あるがままに存在している。凡人は我執にとらわれているので、それがわからないのである。無上の悟りを開くには、我を捨てて無心になることだ、と説いている。仏教に造詣の深かった王安石の知識を披歴する作品である。

（三瓶はるみ）

王安石-70 「春怨」

「春怨」

掃地待花落

惜花輕著塵

遊人少春戀

踏去卻尋春

ち ほら はな お ま
地を掃い花の落つるを待ち
はな かるがる ちり つ お
花の 軽しく塵の著くを惜しむ
ゆうじん しゅんれんすく
遊人に春恋少なし
ふ さ かえ はる たず
踏み去りて却って春を尋ぬ

【収載】

『臨川先生文集』闕、『王文公文集』巻 72

【押韻】

「塵」：上平声 17 「真」、「春」：上平声 18 「諄」（同用）

【訳】

地を掃き清め、花が舞い落ちるのを見守るのは、

花がたやすく塵にまみれてしまうのを惜しむため。

遊人に春の情緒を解するものは少ない。

落ちている花を踏みつけて行ったあの人は、なんと春を楽しみに出かけたそ
うだよ。

【注】

- 著塵：塵がつく。塵にまみれる。
- 遊人：遊びに出た人。唐・暢当「春日 奉誠園に過る（春日過奉誠園）」（『全唐詩』巻 287）に「帝里陽和の日、遊人 御園に到る」。
- 春恋：春を愛する心。補説参照。
- 踏去：踏みつけていく。
- 尋春：春の景物、とくに花を求めて出かける。唐・孟浩然「重ねて李少府の贈らるるに酬ゆ（重酬李少府見贈）」（『全唐詩』巻 160）に「五行 将に火を禁ぜんとし、十歩 春を尋ぬるに任す」。

【補説】

「春怨」を詩の題として用いるとき、表現される春のうらみは、一般的には

唐・王昌齡の「西宮春怨」(『全唐詩』巻 143) のような閨怨詩にみえる女性のうらみであることが多い。しかしこの作品で描かれているのは、それとは異なっている。この「春怨」は、心から春を愛する作者から、表面上は春を愛しているようにみえて、実際は足元では落ちていた花に目を配らず、踏みつけて行ってしまう無粋な遊人に向けた、皮肉である。落ちた花に塵がつくことさえ痛ましく思う作者には、「春を楽しもう。花を見に行こう」と騒ぐ、心ない人の足に踏みつけられた花の悲鳴が聞こえていたのだろう。自身にとっては喜ばしいはずの春の日であるのだが、作者は春を愛するが故にうらめしい気持ちになってしまったのである。

落ちていた花さえ大切に思う、という発想は、唐・張籍の「韋開州の盛山十二首に和す 梅溪 (和韋開州盛山十二首 梅溪)」(『全唐詩』巻 386) の「人をして石を掃かしめざるは、落ち来たる花を損なうを恐るればなり」という表現にも見られる。

三句目の「春恋」はほとんど用例がない語であり、作者の造語である可能性も考えられる。春を愛する心を指すと解釈したが、このような語を創造するところからも、作者の春を大切に思う気持ちを感じ取ることができるだろう。『李壁注』が載せる南宋・劉辰翁の評語「一往にして情有り」が指すのも、作者のこうした春に対する深い愛情であると思われる。

(森山結衣子)

王安石-71 「離昇州作」

しょうしゅう はな さく
「昇州を離るるの作」

相看不忍發	あいみ はつ しの 相見て発するに忍びず
慘澹暮潮平	さんたん ぼちようたい 慘澹として暮潮平らかなり
語罷更攜手	かた や さら て たずさ 語り罷みて更に手を携う
月明洲渚生	つきあき しゅうしょしょう 月明らかに洲渚生ず

【収載】

『臨川先生文集』卷 36、『王文公文集』卷 70

【校異】

題、『王文公文集』は「離昇州作二首」其一に作る。

【押韻】

「平」「生」：下平声 12「庚」

【訳】

互いに見交わせば後ろ髪引かれて旅立てず、
ぼんやりと暮れの潮は平らかに満ちてくる。
語り終えて更に手を取れば、
月明かりのした、目に映るおおかわの中州。

【注】

- 昇州：現在の南京。
- 慘澹：うすぐらいさま。疊韻の語。唐・韋応物「鼙鼓行」（『全唐詩』卷 194）に「淮海 雲を生じ暮に慘澹たり」。
- 潮平：潮が満ちて水面が平らかにひろがる。唐・王湾「次北固山下（北固山下に次る）」（『全唐詩』卷 115）に「潮平らかに兩岸闊し」。
- 洲渚：なかつ。晋・左思「呉都賦」（『文選』卷 5）に「島嶼 綿邈たり、洲渚 馮隆（高々）たり」。

【補説】

『臨川先生文集』卷 36 は集句を集めたものだが、本篇はそのなかにある。先行する作品のなかに類似した詩句を求めてみるならば、

起句「相看不忍発」——唐・李白「殷淑を送る（送殷淑）三首」其二（『全唐詩』卷 176）に「相看不忍別、更進手中杯」。

承句「慘澹暮潮平」——唐・皇甫冉「裴員外の江南に赴くを送る（送裴員外赴江南）」に「風帆幾日到、処処暮潮平」（『文苑英華』卷 272。『全唐詩』卷 250 に収めるものは「暮潮清」に作る）。

転句「語罷更携手」——唐・高適「鄭三 韋九 兼ねて洛下の諸公に留別す（留別鄭三韋九兼洛下諸公）」（『全唐詩』卷 213）に「不知何日更携手、応念茲晨去折腰」。

結句「月明洲渚生」——唐・李郢「秦處士 家を富春に移さんと樟亭を発す 懐寄（秦處士移家富春發樟亭懐寄）」（『全唐詩』巻 590）に「潮落空江洲渚生、知君已上富春亭」。

いずれも一句単位で先行詩句を踏襲したのではなく、少なくとも現存の作例に検する限り、ふつうにいう集句とは異なる。ただ、南宋・惠洪『冷齋夜話』巻 4 は「舒王百家夜休日」として本詩を引き、当該記事を『詩話総龜』巻 9 ならびに『詩人玉屑』巻 10 が再引するものは「舒王百家衣体」に作る。舒王は王安石、百家衣体とは集句のことである（「夜休」に作るのは魯魚の誤りであろう。なお本篇を明・曹学佺『石倉歴代詩選』巻 35 ならびに『全唐詩』巻 128 は「闕題」二首の一つとして王維の詩とする。『冷齋夜話』が王維の作と王安石の作とを並べて引くのを、誤っていずれをも王維の作としたものか）。

たとえば上に挙げた李郢詩の「潮落ち空江に洲渚生ず」と王安石の「月明らかに洲渚生ず」を比べると、前者は水位が落ちて洲渚が現れたのを描くのに対し、後者は月の光のなかに浮かび上がる洲渚を詠う。かりに前者を踏まえて後者が作られているとするならば、同じ表現を用いながら異なる情景・趣致を生みだしているということが出来るだろう。ちなみに李郢詩は右に挙げた高適詩とともに王安石の編として伝わる『唐百家詩選』にとられている。時に自らの作をも含めて既存の詩句を意識的に用いながら新しい表現を編み上げるのは、王安石詩の特色のひとつである。

（和田英信）

王安石-72 「回文四首」其一

かいぶんよんしゅ
「回文四首」

碧燕平野曠
黄菊晚村深
客倦留甘飲
身閑累苦吟

へきぶ へいやひろ
碧燕 平野曠く
こうきく ばんそんふか
黄菊 晩村深し
きゃく う かんいん とど
客 は倦みて甘飲に留まり
み かん くぎん かさ
身は閑にして 苦吟を累ぬ

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 75

【校異】

題、『臨川先生文集』では「碧蕪」とし、題下に「回紋」と記す。『王文公文集』では「回文三首」其一とする。また、四首のうち最初の三首のみを収載。

【押韻】

「深」「吟」：下平声 21「侵」

【訳】

青々と生い茂る雑草が平原いっばいに広がり、
黄色い菊の花が夕暮れの村に影を深めてゆく。
旅人は漂泊に倦み疲れて、美酒に引き留められ、
私は無聊をかこって、苦吟を続ける。

【注】

- 回文：前から読んでも後ろから読んでも意味を為す詩。中には中央から旋回して読めるものもある。前秦の竇滔の妻、蘇蕪が錦に織り込んで遠地の夫に送ったという「回文旋圖詩」（「回文錦字詩」ともいう）が有名。
- 碧蕪：「碧」は緑、青。「蕪」は荒れる、草が生い茂る。ここでは雑草が生い茂る意。唐・温庭筠「醉歌」（『全唐詩』巻 576）に「唯だ恐る 南国 風雨落ち、碧蕪 狼藉たる棠梨の花」。
- 晩村：暮れなずむ村。
- 客：旅人の意。
- 甘飲：美酒のこと。「甘」は美味、「飲」は広く飲み物一般を指す。見慣れない語だが、「甘醴」と同様、ここでは美酒のことであろう。
- 苦吟：苦心して詩歌を作ること。苦吟といえば「推敲」で悩んだ賈島がまず思い浮かぶ。唐・賈島「秋暮」（『全唐詩』巻 572）「黙黙として朝夕空し。苦吟 誰か喜びて聞かん」。

【補説】

前半二句は秋の夕暮れの農村風景を詠む。「碧蕪」「黄菊」の色のコントラストと、「曠」「深」の平面と奥行き対比、また、遠景と近景の対比が空間の広

がりをいっそう際立たせる。「深」の一字は、宵闇の中に沈んでゆく深さと、辺りが暗くなることによって生じる、奥行きを深さを示すものであろう。

後半の三四句も前半と同じく、旅路で疲れ、美酒に引き寄せられる「客」（旅人たち）がいる一方で、時間があれば苦心して詩を作っている「身」（作者）を対比させている。

【倒読】

吟苦累閑身	ぎん にが かんしん わざらわ 吟 苦くして 閑身を 累し
飲甘留倦客	いん あま けんかく とど 飲 甘くして 倦客を 留む
深村晩菊黄	しんそん ばんきく こう 深村 晩菊 黄に
曠野平蕪碧	こうや へいぶ みどり 曠野 平蕪 碧なり

【押韻】

「客」：入声 20 「陌」、「碧」：入声 22 「昔」（同用）

（三瓶はるみ・松原功補訂）

王安石-73 「回文四首」 其二

「回文四首」	かいぶんよんしゅ
夢長隨永漏	ゆめ なが えいろう したが 夢の長きは永漏に 随い
吟苦雜疎鐘	ぎん くる そしやう まじ 吟の苦しきは疎鐘に 雑わる
動蓋荷風勁	がい うご かふう つよ 蓋を動かして 荷風 勁く
沾裳菊露濃	しょう うるお きくろ こま 裳を沾して 菊露 濃やかなり

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 75

【校異】

題、『臨川先生文集』は「夢長」に作る。

題、『王文公文集』は「回文三首」其二に作る。

【押韻】

「鐘」「濃」：上平声 3「鍾」

【訳】

終わらぬ夜の夢に水時計の滴りはいつまでも響き、
とぎれとぎれのことばはまばらな鐘の音に混じる。
揺れ動く車の幌に、池のハスをわたる風のきびしさを知り、
しっとり濡れた衣に、庭の菊に置く露の細やかさを知る。

【注】

- 永漏：いつ終わるとも知れない、水時計の滴る音。時の経過が遅いことをいう。唐・李頻「陝下にて帰るを懐う（陝下懐歸）」（『全唐詩』巻 588）に「独夜 帰思を懸く、迢迢なり永漏の中」。
- 動蓋：車の幌を揺り動かす。
- 沾裳：衣の裳裾を濡らす。
- 濃：露がしっとりとおいたさま、細かな露がびっしりとついたさま。『詩経』小雅「蓼蕭」に「零露 濃濃たり」とある。

【補説】

秋の夜長をうたった回文詩。一首の前半は、音を用いた対である。終わらない長い夜に聞こえる水時計の滴りをいうのは、たとえば唐・李益「宮怨」に「海水を将いて宮漏に添うるに似て、共に滴る 長門 一夜の長きに」（『全唐詩』巻 283）とあるなど、閨怨詩などにしばしばみられる表現。二句目は、まばらに聞こえる鐘の音と、苦吟によって生まれる切れ切れのことばを重ね合わせた点がユニークである。後半二句は「荷風」「菊露」を組み合わせた秋の庭の対。菊とハスの対は「荷香 晩夏に銷え、菊氣 新秋に入る」（唐・駱賓王「晩に江鎮に泊す（晩泊江鎮）」、『全唐詩』巻 79）、「菊艷は秋水を含み、荷花は雨声を遡う」（唐・許渾「同年崔先輩を送る（送同年崔先輩）」、同巻 528）などがあり、秋の表現としてはそれなりに類型化したものであったようだ。後半二句は、「動蓋」「沾裳」をそれぞれ「車の幌を揺らす」「衣の裳裾を濡らす」と理解したが、倒読における「荷蓋」はハスの葉を意味し、これと対となる「菊裳」も菊の花びらと理解すれば、「風に吹かれ水面を動くハスの葉」「露に濡れた菊の花びら」と読むこともできるだろう。花びらを衣と表現したものには、唐・王維「紅牡丹」「緑艷 閑にして且つ静か、紅衣 浅く復た深し」（『全唐詩』巻 128）、同じ

く唐・羊士諤「郡中即事三首」其二「紅衣 落ち尽くして 暗香残り、葉上の秋光 白露寒し」（同巻 332）などの句がある。

【倒読】

濃露菊裳沾	こま 濃	つゆ やかなる	きくしやう 露は	うるお 菊裳を	汚し
勁風荷蓋動	つよ 勁	かぜ 風は	かがい 荷蓋を	うご 動かす	
鐘疎雑苦吟	しょうまば 鐘	らにして	くぎん 苦吟に	まじ 雑わり	
漏永隨長夢	ろう 漏	なが 永くして	ちやうむ 長夢に	したが 随う	

【押韻】

「動」：上声 1 「董」、「夢」：去声 1 「送」（通押）

（水津有理）

王安石-74 「回文四首」其三

かいぶんよんしゅ
「回文四首」

迸月川魚躍	つき 月	ほとばし 迸りて	せんぎよ 川魚	おど 躍り
開雲嶺鳥翻	くも 雲	ひら 開きて	れいちょう 嶺鳥	ひるがえ 翻る
徑斜荒草惡	みち 徑	なな 斜めに	こうそう 荒草	あ 惡しく
臺廢冶花繁	だい 臺	すた 廢れて	や 冶花	しげ 繁る

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 75

【校異】

題、『臨川先生文集』は「迸月」に作る。

題、『王文公文集』は「回文三首」其三に作る。

【押韻】

「翻」「繁」：上平声 22 「元」

【訳】

月光をしたたらせて川の魚が跳ね、
雲を分けて、嶺の鳥が飛んでゆく。

斜めに続く小道にはぼうぼうにのびた草がはびこり、
打ち棄てられたうてなが、美しい野の花に埋もれている。

【注】

- 迸月：ここでは水面から跳ね上がった水が月光を浴びてきらきらと光ることを指す。「迸」は勢いよくとび散るさま。補説参照。
- 荒草：野放図にのびた草。唐・太宗皇帝「旧宅を過る（過舊宅）二首」（『全唐詩』巻1）は廢園のさまを描いて「葉鋪きて荒草蔓り、流れ竭きて半池空し」という。
- 冶花：艶やかな花、美しい花。

【補説】

一句目の「迸月」は、勢いよく跳ねあがった魚がほとぼしらせた水が月光をうけて、あたかも光をほとぼしらせているようにみえるさまと読んだ。二句目も同様に、嶺のあたりを行く鳥があたかも雲を分けて飛ぶように見えるの意。

静かな夜、古い廢園の光景を見立てて読んだものだろうか。後半二句、野の植物だけが毒々しいまでにその生命を謳歌しているすがたに独特の美しさがある。三句目の「悪」は厭わしいほどはびこっている様子。

【倒読】

繁花冶廢臺	繁花 冶 廢臺
惡草荒斜徑	惡草 斜徑を 荒う
翻鳥嶺雲開	翻鳥 嶺雲 開き
躍魚川月迸	躍魚 川月 迸る

【押韻】

「徑」：去声 46 「徑」、「迸」：去声 44 「諍」（通押）

（水津有理）

王安石-75 「回文四首」其四

かいぶんよんしゅ
「回文四首」

泊鴈鳴深渚	はくがん しんしよ な 泊雁 深渚に鳴き
收霞落晚川	しゅうか ばんせん お 收霞 晩川に落つ
柝隨風斂陣	せき かぜ じん おさ したが 柝は風の陣を斂むるに 随い
樓映月低弦	ろう つき げん た えい 樓は月の弦を低るるに映ず
漠漠汀帆轉	ぼくぼく ていはんてん 漠漠として汀帆転じ
幽幽岸火然	ゆうゆう がんか も 幽幽として岸火然ゆ
壑危通細路	がく あやう さいろ つう 壑は危くして細路を通じ
溝曲繞平田	こう まが へいでん めぐ 溝は曲りて平田を繞る

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』闕

【校異】

題、『臨川先生文集』は「泊雁」に作る。

【押韻】

「川」「弦」「然」「田」：下平声 1「先」

【訳】

宿る雁は中洲の奥まったところに鳴き、
夕焼け雲はくすみつつ暮れなずむ川に消えてゆく。
拍子木の音は風が収まるのにもなって聞こえなくなり、
樓は細い月が低くかかるのに照らされる。
静まりかえった汀の帆が動き、
ひそやかに舟の灯りが燃えている。
谷は急斜面で細い路が通るのみ、
水路は曲がりくねり平らな畑の間を縫う。

【注】

- 深渚：中洲の奥まったところ。
- 收霞：夜の訪れと共に夕焼け雲が夕靄の中に消えてゆくこと。劉宋・謝靈運「石壁精舎より湖中に還るの作（石壁精舎還湖中作）」（『文選』卷 22）に「林壑は暝色を斂め、雲霞は夕霏を収む」とある。
- 晩川：夕暮れ時の川。

- 柝：時を知らせるために打つ拍子木。
- 陣：「風」の縁語であり、ここでは「斂陣」で風が収まったことをいう。唐・李涉「湖台に題す（題湖臺）」（『全唐詩』巻477）に「時に月を帯び床の昇^かきて到る有り、一陣の風来たりて酒尽く醒む」とあるように、「陣」は風を数えるときにも用いられる。
- 弦：「月」の縁語であり、ここでは月が弦のように細いことをいう。
- 漠漠：音もなく静まりかえった様子。『荀子』解蔽の「漠漠たるを聴きて以て啍啍と為す」に対する唐・楊倞の注に「漠漠は声無きなり」とある。
- 汀帆：「汀」は中洲のあたりの水辺、「帆」は舟の帆を言うので、中洲付近を航行する舟の帆を描いていると考えられ、『御定駢字類編』巻54に項目も立っているが、当該詩を除いて他に用例を見いだせない。
- 幽幽：薄暗い様子、光が弱い様子。
- 岸火：川でたかかっている火。唐・王維「河北城樓に登りて作る（登河北城樓作）」（『全唐詩』巻126）に「岸火孤舟宿り、漁家夕鳥還る」、唐・孟浩然「夜に湘水を渡る（夜渡湘水）」（同巻160）に「榜人は岸火を投じ、漁子は潭煙に宿る」とみえ、舟の灯りをいうものと考えられる。

【補説】

この詩は『李壁注』、『臨川先生文集』は回文詩としているが、『王文公文集』は巻75に「回文三首」として、当該詩以外の三首を採録するものの、当該詩は『王文公文集』に採られていない。『宋文鑑』巻29は王安石「泊雁」、『御選宋詩』巻77と『御定淵鑑類函』巻198は王安石「泊雁迴文」、『回文類聚』巻3は王安石「客懷」としてこの詩を収めていて、詩題は一定していない。王安石詩には詩の冒頭二文字をそのまま詩題とするものが多くあるため、「泊雁」とすることも妥当性はあるが、逆に読んだときに韻を踏んでおり、意味も通ることから、回文として作られたことは間違いがないと考えられる。

一方、『全唐詩』巻273はこの詩を唐・戴叔倫「泊雁」として採録しており、『御定佩文齋詠物詩選』巻426も戴叔倫「泊雁迴文」、『御定駢字類編』巻54「汀帆」の項も戴叔倫「泊雁詩」としている。しかし、戴叔倫詩としている諸本はいずれも清代の成立であり、唐宋から遠く隔たった時代の著作である。その

点、『宋文鑑』は南宋・呂祖謙の編であり、『回文類聚』もまた南宋・桑世昌の手によっているように、南宋の諸本は王安石説を採る。また、清代成立の『御選宋詩』と『御定淵鑑類函』も作者を王安石としており、清代には王安石説と戴叔倫説が同時に行われていたようである。いずれが正しいかについて確たる判断を下すことは難しいが、王安石には他にも回文詩があることも考え合わせると、『王文公文集』には未収録である点を差し引いても、この詩の作者は王安石であると考えの方がいくらか蓋然性が高いのではないだろうか。

【倒読】

田平繞曲溝	た たい きょくこう めぐ 田は平らかにして曲溝を繞り
路細通危壑	ろ ほそ きがく つう 路は細くして危壑に通ず
然火岸幽幽	ひ も きし ゆうゆう 火を然やすも岸は幽幽として
轉帆汀漠漠	ほ てん てい ぼくぼく 帆を転ずるも汀は漠漠たり
弦低月映樓	げん ひく つき ろう えい 弦は低し 月は樓に映じ
陣斂風隨柝	じん おさ かぜ せき したが 陣は斂む 風は柝に随う
川晚落霞收	かわ く らく かおき 川は晩れて落霞収まり
渚深鳴雁泊	なぎさ ふか めいがんはく 渚は深くして鳴雁泊す

【押韻】

「壑」「漠」「柝」「泊」：入声 10「藥」

(高芝麻子)

王安石-76 「題西太一宮壁二首」 其一

	せいたいつきゅう かべ だい にしゅ 「西太一宮の壁に題す二首」
柳葉鳴蝸綠暗	りゅうよう めいちょう みどりくら 柳葉 鳴蝸 緑暗く
荷花落日紅酣	か か らくじつ くれないたけなわ 荷花 落日 紅酣なり
三十六陂春水	さんじゅうろくひ はる みず 三十六陂 春の水
白頭想見江南	はくとう こうなん そうけん 白頭 江南を想見す

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』卷 66

【校異】

前二句、『臨川先生文集』は「草色浮雲漠漠、樹陰落日潭潭」に作る。

「陂」、『王文公文集』は「宮」に作る。

「春」、『臨川先生文集』は「流」に、『王文公文集』は「煙」に作る。

【押韻】

「酣」：下平声 23 「談」、「南」：下平声 22 「覃」（同用）

【訳】

柳葉にセミ鳴きさわいで緑はおぐらく、
ハスの花、夕陽を浴びてあまりにあかい。
三十六陂の春の水に、
白髪のいま、江南のあの日を思いうかべる。

【注】

- 西太一宮：みやこ開封の西、順天門外の八角鎮に建てられた道教の廟宇（『続資治通鑑長編』仁宗・天聖六年三月壬戌）。
- 鳴蜩：セミ。『詩経』邶風「七月」に「五月鳴蜩」。
- 三十六陂：「陂」は、ため池の土提。『続資治通鑑長編』神宗・元豊二年（1079）に「洛（水）を導いて汴（河）に通ぜしむ。古索河を引いて源と為し、房家・黄家・孟王陂及び三十六陂に注ぐ。高仰の処、水を瀦めて塘を為し、以て水の足らざるに備う」。また李壁注は揚州の天長県にも「三十六陂」があった（『宋史』蔣之奇伝）ことを指摘する。

【補説】

六言絶句二首連作の一。其二に「三十年前 此の地、父兄 我を持して東西す」というのは、景祐三年（1036）十六歳のとき、父とともに初めてみやこ開封に上ったときを指すものと思われる。その三十二年後の熙寧元年（1068）四月、王安石は神宗の詔を奉じて江寧より京師に上る。本篇はその上京時、あるいはそれからほどない頃の作であろう。其二では、過去と現在が対比されているが、ここでは現在身を置く京師郊外の風景のなかに、故郷江南の過去が二重写しの幻影のように投影される。時間と空間がない交ぜになって、いまこの一篇

のなかに交錯する。

王安石の句として伝えられるものに「濃緑万枝紅一点、動人春色不須多」がある（『詩話総亀』『詩人玉屑』等）。王安石の集には収められないこの句が本当に彼のものであるか否かは確認できないが、たしかに王安石には紅を詠った印象的な詩句が少なくない。この詩の「荷花落日紅酣」もそのひとつだろう。「紅一点」句においては「緑」と「紅」、「万」と「一」のコントラストの鋭さが鮮やかだが、本作では「荷花」と「落日」の「紅」を「酣」、すなわちその極限への無限の接近の相でとらえる感覚が印象的である。「緑」と「紅」というコントラストはここでもやはり、第一句と第二句に見られるが、それはまた結句の「白」という色彩語の系列を形作っている。

転句を『王文公文集』は「三十六宮煙水」、『臨川先生文集』は「三十六陂流水」に作る。「七月」詩に「五月鳴蜩」とあり、また「荷花」の咲く光景もまた夏を思わせる。その意味では底本の「春水」よりも、「煙水」「流水」の方が読みやすい。ただ、王安石が開封郊外にあってこの詩を詠じているのがたとえ夏であっても、詩人が幻視しているのは江南の春ではあるまいか。濃厚で過剰な音と色彩、そして豊かな水のなかで、詩人のまなかに浮かび上がる幻影は江南の春こそがふさわしい。唐・白居易「憶江南三首」其一（『全唐詩』巻 28）に「日出でて江花紅きこと火に勝り、春来たりて江水緑なること藍の如し」。

元祐年間、この地を訪れた蘇軾は王安石の題詩をみて注目すること久しく、「此の老野狐精なり」と称えたという（南宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集巻 35 引く『西清詩話』）。蘇軾・黄庭堅にそれぞれ次韻の詩がある。いま本詩に次韻する各一首を掲げる。

蘇軾「西太一見王荊公舊詩偶次其韻二首」其一（『合注』巻 27）

秋早川原淨麗、雨餘風日清酣、從此歸耕劍外、何人送我池南。

黄庭堅「次韻王荊公題西太乙宮壁二首」其一（『山谷内集詩注』巻 3）

風急啼鳥未了、雨來戰蟻方酣、真是眞非安在、人間北看成南。

（和田英信）

王安石-77 「題西太一宮壁二首」其二

せいたいつきゆう かべ だい にしゆ
「西太一宮の壁に題す二首」

三十年前此地

父兄持我東西

今日重來白首

欲尋陳迹都迷

さんじゆうねんまえ こ ち
三十年前 此の地

ふけい われ じ とうざい
父兄 我を持して東西す

こんにち かさ き はくしゆ
今日 重ねて来たれば白首

ちんせき たず ほつ すべ まよ
陳迹を尋ねんと欲すれど都て迷う

【収載】

『臨川先生文集』巻 26、『王文公文集』巻 66

【校異】

「地」、『臨川先生文集』は「路」に作る。

【押韻】

「西」、「迷」：上平声 12「齊」

【訳】

三十年前、訪れたこの地、

父に連れられ、あちらこちらへ。

今日、再び訪れたわたしは白髪頭となり、

懐かしい場所を尋ねようにも迷うばかりである。

【注】

○ 父兄：父のこと。

○ 陳迹：昔行った場所。

【補説】

六言絶句二首連作の二首目。其一の補説にあるように、「三十年前」とは、王安石が十六歳のとき、初めて父に連れられみやこにやってきたときを指すと思われる。詩は、三十年前と現在の様子がコントラストをなす。昔を思い出し、現実に重ねてみるも、重なるものは何一つない。ともにいた父は亡くなり、自らも老境に差し掛かっている。眼前に広がる景色はなじみのないものとなり、「陳迹」すら辿れないでいる。後半二句からは慨嘆、懐旧の情が入り交じり、佇

むほかない詩人の孤独な様子が思い起される。

『臨川先生文集』では「三十年前此路」に作る。「古詩十九首」其六（『文選』卷 29）に「長路 漫として浩浩たり」とあるように、「路」は一本に伸びる道がイメージされる。「此地」であれば、広がりのある面となり、続く句の「東西」にはより多方向に伸びる足跡を見い出すことができる。ここでは、底本の「此地」に従いたい。

其一と同じように、やはり蘇軾・黄庭堅にそれぞれ次韻の詩がある。

蘇軾「西太一見王荊公舊詩偶次其韻二首」其一（『合注』卷 27）

但有樽中若下、何須墓上征西。聞道烏衣巷口、而今煙草萋迷。

黄庭堅「次韻王荊公題西太乙宮壁二首」其一（『山谷内集詩注』卷 3）

晚風池蓮香度、曉日官槐影西。白下長干夢到、青門紫曲塵迷。

制作時期は其一参照。

（鄭月超）

王安石-78 「西太一宮樓」

せいたいつきゅうろう
「西太一宮樓」

草際芙蓉零落

水邊楊柳欹斜

日暮炊煙孤起

不知魚網誰家

そうさい ふきよ れいらく
草際の芙蓉 零落し
すいへん ようりゅう きしゃ
水邊の楊柳 欹斜す
にちぼ すいえん ひと た
日暮 炊煙 孤り起ち
し ぎよもう た いえ
知らず 魚網 誰が家ぞ

【収載】

『臨川先生文集』卷 26、『王文公文集』卷 66

【押韻】

「斜」「家」：下平声 9「麻」

【訳】

草が生い茂る水際で蓮の花は枯れ落ち、
川のほとりの柳は、水の上に斜めに張り出している。
夕暮れ時、夕餉の支度の煙がひとすじ立ちのぼり、
どこの家のものだろう、魚の網が置かれたままになっている。

【注】

- 草際：草と水の境。唐・方干「于秀才小池」（『全唐詩』巻 651）に「鷁舟 草際に霜葉を浮かべ、漁火 沙辺に小蛭を駐む」。
- 芙蕖：蓮。もとは蓮全体をさす言葉。『爾雅』葍草に、まず「荷は芙蕖なり」といい、後に続けて花や実・茎・地下茎など、それぞれのパーツの呼称を載せる。ここでは蓮の花をさす。『芸文類聚』巻 82 には「芙蕖」の項を設け、晋・潘岳「蓮花賦」の「遊びは春橐より美なるは莫し、華は芙蕖より盛んなるは莫し」などの用例を連ねる。
- 零落：草木が枯れ落ちる。
- 欹斜：傾く、傾斜する。
- 魚網：魚を捕る網。漁師は『楚辞』「漁父」や劉宋・陶淵明の「桃花源記」（『靖節先生集』巻 6）において、自由な境遇の人物、理想郷に行き来できる人物として描かれ、隠者をイメージさせる。この詩で言う「魚網」も、隠者を暗示させる小道具であろうか。梁・何遜「西塞に入りて南府の同僚に示す（入西塞示南府同僚）」（『何水部集』）にも、「方に還た夷路を譲らんとして、誰か知らん 魚網を羨むを」とある。
- 炊煙：炊事の煙。

【補説】

前作「題西太一宮壁二首」に続き、西太一宮を詠んだ六言詩。西太一宮は北宋の天聖六年（1029）都の西南の八角鎮に建てられ、熙寧五年（1074）に城内に遷宮し、中太一宮となっている。この詩にいう「西太一宮楼」は、宮の中の建物の一つであろう。实景をうたいながらも、山水画に通ずる世界を展開する。

前半二句は太一宮のたかどのから見える、周囲の風景。「草際」は水辺の周囲の草が伸びて、地面と水際の境がはっきりしないことをいう。「芙蕖」は蓮の花。次句の楊柳と対をなす。樹木と蓮は王安石-76「題西太一宮壁二首」其

一の前半二句と同様の対比であるが、前の詩では、満開の花は燃え立つように赤く、深い緑と鮮やかなコントラストを成していた。それに対してここでは、枯れ落ちて無残な姿をさらしている花と水の上に張り出す柳に、万物が衰退する秋のうら寂しい様子が描かれる。

後半二句は、人間の営みが風景の点描として示される。農村に立ち上る炊事の煙は、劉宋・陶淵明「歸園田居五首」其一（『靖節先生集』巻2）の「曖曖あいあいたり 遠人の村、依依きよりたり 墟里の煙」や、唐・王維「輞川閑居 裴秀才迪に贈る（輞川閑居贈裴秀才迪）」（『全唐詩』巻126）の「渡頭 落日を余し、墟里 孤煙上る」に通じる、のどかな田園風景を想起させる。魚網は注で指摘したように隠逸のイメージがあるが、ここでは炊事の煙と相まって、より日常的な雰囲気醸し出す。炊煙と魚網の組み合わせの用例に、唐・張南史「春日道中 孟侍御に寄す（春日道中寄孟侍御）」（『全唐詩』巻296）の「誰が家の魚網ぞ 鮮食を求め、幾処の人煙 火耕を事とす。昨日已に嘗む 村酒の熟すを、一杯 孟嘉と傾けんことを思う」がある。「誰家」「魚網」「(人)煙」と、三つのキーワードが重なることから、あるいは作者の意識の中にこの詩があったのかもしれない。隠逸をイメージさせながら、人間臭さを感じさせる作品である。

制作時期は不詳だが、王安石がまだ政治の中樞にあった、熙寧年間(1070-1073)頃の作であろう。

(三瓶はるみ)

附録：王安石略年譜

年号	年齢	事項
天禧五年 (1021)	1	撫州臨川（江西省撫州市）に生まれる。字は介甫。父の王益は臨江軍判官。母は呉氏。
景祐三年 (1036)	16	父に従い、開封（河南省開封市）に上る。
宝元二年 (1039)	19	父、王益卒す。
慶曆二年 (1042)	22	科挙に合格。淮南判官（江蘇省揚州市）となる。
慶曆七年 (1047)	27	知鄞県（浙江省寧波市）となる。
皇祐二年 (1050)	30	開封にて殿中丞を授けられる。
皇祐三年 (1051)	31	舒州通判（安徽省懷寧県）となる。
至和元年 (1054)	34	郡牧司判官となる。
嘉祐二年 (1057)	37	知常州（江蘇省常州市）となる。
嘉祐三年 (1058)	38	提点江東刑獄（江西省上饒市鄱陽県）に転任。
嘉祐五年 (1060)	40	「万言書」を奉る。
嘉祐六年 (1061)	41	知制誥となる。
嘉祐八年 (1063)	43	母の呉氏卒す。
治平二年 (1065)	45	江寧（南京）にて喪が明け、朝廷に召されるが赴かず。
治平四年 (1067)	47	英宗崩御。知江寧府に除せられる。翰林学士に任ぜられるも、上京せず。
熙寧元年 (1068)	48	江寧より上京し、神宗に謁見する。
熙寧二年 (1069)	49	参知政事となる。新法実施され始める。均輸法、青苗法、農田水利法の施行。
熙寧三年 (1070)	50	保甲法の施行。同中書門下平章事となる。
熙寧四年 (1071)	51	免役法の施行。
熙寧五年 (1072)	52	市易法、保馬法、方田均税法の施行。
熙寧六年 (1073)	53	免行法の施行。

年号	年齢	事項
熙寧七年 (1074)	54	同中書門下平章事を辞め、知江寧府となる。
熙寧八年 (1075)	55	同平章事に復し、昭文殿大学士となる。尚書左僕射兼門下に進む。
熙寧九年 (1076)	56	鎮南軍節度使、同平章事、判江寧府となる。子の王雱、卒す。
熙寧十年 (1077)	57	集禧觀使となる。
元豐元年 (1078)	58	舒国公に封ぜられる。会靈觀使となる。
元豐二年 (1079)	59	江寧府の鍾山に隱棲。
元豐五年 (1082)	62	『字説』を献上する。
元豐七年 (1084)	64	春、病む。
元豐八年 (1085)	65	神宗崩御、哲宗即位。司空を授かる。
元祐元年 (1086)	66	卒す。

(角祥衣)